

松江市文化財調査報告書 第82集

久米遺跡群発掘調査報告書

2000年3月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興財団



久米 B 遺跡出土遺物

例 言

1. 本書は、平成2・3年度に松江市教育委員会が、平成11年度に財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した（仮称）南比津ヶ丘団地造成工事に伴う久米遺跡群発掘調査にかかる報告書である。
2. 本発掘調査は、有限会社豊和不動産から松江市教育委員会が依頼を受け、平成2・3年度に松江市教育委員会が、平成11年度は財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

平成2年度 久米遺跡発掘調査

依頼者 有限会社豊和不動産

事務局 松江市教育委員会 教 育 長 諏 訪 秀 富
社会教育課課長 杉 原 精 訓
文化財係係長 岡 崎 雄 二 郎

調査者 松江市教育委員会社会教育課文化財係
調査担当者 主 事 中 尾 秀 信
調 査 員 嘱 託 員 稲 田 奨

平成3年度 久米A遺跡発掘調査

依頼者 有限会社豊和不動産

事務局 松江市教育委員会 教 育 長 諏 訪 秀 富
社会教育課課長 杉 原 精 訓
文化財係係長 岡 崎 雄 二 郎

調査者 松江市教育委員会社会教育課文化財係
調査担当者 主 事 中 尾 秀 信
調 査 員 嘱 託 員 山 尾 絹 江

平成11年度 久米B遺跡発掘調査

依頼者 有限会社豊和不動産

事務局 松江市教育委員会 教 育 長 原 敏
生涯学習課長 谷 正 次
文化財室室長 岡 崎 雄 二 郎
文化財室主幹 吉 岡 弘 行
主任主事 金 山 正 樹

実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長 宮 岡 寿 雄

専務理事 北 村 悦 男

事務局長 柳 浦 孝 行

調査係長 瀬 古 諒 子

調査者 調査担当者 石 川 崇

調査補助員 宮 本 亜 希 子

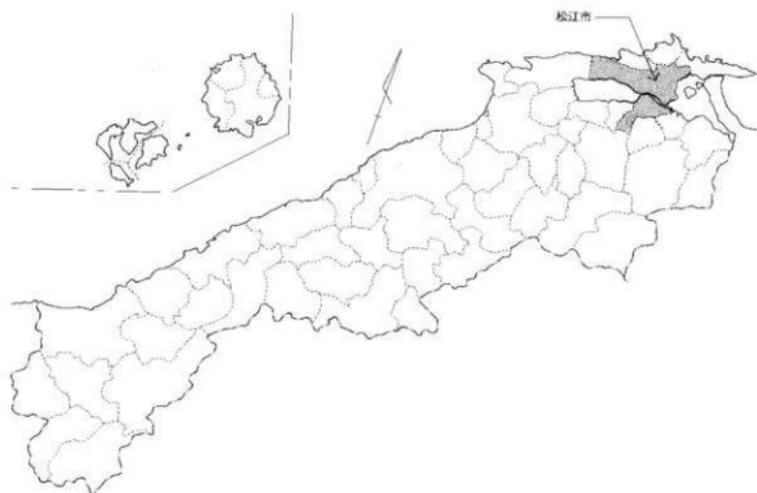
4. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
渡辺貞幸（島根大学教授）、松本岩雄（島根県埋蔵文化財センター）、椿真治（島根県教育委員会）
5. 本書の作成には下記の者が携わった。
（遺物実測）中尾・稲田・石川・花田陽子
（浄 書）宮本・花田・福島知子
（拓 本）萩野哲二（松江市教育委員会嘱託員）・宮本
6. 本書に掲載した写真は石川が撮影した。
7. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。
8. 本書の執筆及び編集は石川が行い、宮本がこれを助けた。

目 次

調査の概要

I 調査に至る経緯	1
II 周辺の歴史的環境	3
III 調査報告	6
1 久米遺跡	6
2 久米A遺跡	27
3 久米B遺跡	31

図 版



第1図 島根県地図



第2図 久米遺跡群位置図

挿 図 目 次

- | | |
|-------------------|--------------|
| 第1図 高根県地図 | 第2図 久米遺跡群位置図 |
| 第3図 久米遺跡群内の各遺跡位置図 | 第4図 周辺の遺跡位置図 |

久米遺跡

- | | |
|---------------------------------|-------------------------|
| 第5図 調査前地形測量図及び調査区設定図 | 第6図 調査成果図 |
| 第7図 D～B調査区南北セクション図 | 第8図 SB-01実測図 |
| 第9図 SB-02・03実測図 | 第10図 SK-01（焼土壘）実測図 |
| 第11図 SB-07実測図 | 第12図 SB-08実測図 |
| 第13図 SB-09実測図 | 第14図 SB-04実測図 |
| 第15図 SB-05実測図 | 第16図 SB-06実測図 |
| 第17図 SX-01（土器溜）実測図 | 第18図 SB-10～12実測図 |
| 第19図 SB-13実測図 | 第20図 A調査区出土遺物実測図 |
| 第21図 A～B調査区出土遺物実測図 | 第22図 B調査区出土遺物実測図 |
| 第23図 B～C調査区間及びSX-01（土器溜）出土遺物実測図 | |
| 第24図 SX-01出土遺物実測図 | 第25図 C調査区出土遺物実測図 |
| 第26図 C区西側拡張区出土遺物実測図 | 第27図 D調査区及び西側拡張区出土遺物実測図 |

久米A遺跡

- | | |
|-----------------------|---------------|
| 第28図 調査前地形測量図及び調査区設定図 | 第29図 調査成果図 |
| 第30図 SB-01実測図 | 第31図 SB-02実測図 |
| 第32図 出土遺物実測図 | |

久米B遺跡

- | | |
|------------------------|---------------------|
| 第33図 調査前地形測量図及びトレンチ設定図 | 第34図 調査成果図 |
| 第35図 南側・北側斜面トレンチセクション図 | 第36図 西側斜面トレンチセクション図 |
| 第37図 SB-01実測図 | 第38図 SB-01出土遺物実測図 |
| 第39図 SB-04実測図 | 第40図 SB-04出土遺物実測図 |
| 第41図 SB-01・04周辺出土遺物実測図 | 第42図 SB-08実測図 |
| 第43図 SB-08出土遺物実測図 | 第44図 SB-09実測図 |
| 第45図 SB-10実測図 | 第46図 SB-11実測図 |
| 第47図 SB-11出土遺物実測図 | 第48図 SB-07実測図 |
| 第49図 SB-07出土遺物実測図 | 第50図 SB-02実測図 |

- | | | | |
|------|--------------------|------|-----------------|
| 第51図 | SB-02出土遺物実測図 | 第52図 | SB-03実測図 |
| 第53図 | SK-03, 05実測図 | 第54図 | SK-03出土遺物実測図 |
| 第55図 | SB-06実測図 | 第56図 | SB-06出土遺物実測図 |
| 第57図 | SX-01（加工段）実測図 | 第58図 | SK-02実測図 |
| 第59図 | SB-05実測図 | 第60図 | SX-02実測図 |
| 第61図 | SX-02出土遺物実測図 | 第62図 | 谷部平坦面トレンチセクション図 |
| 第63図 | 谷部平坦面実測図 | 第64図 | 自然流路出土遺物実測図 |
| 第65図 | SI-01実測図 | 第66図 | SI-01出土遺物実測図 |
| 第67図 | T-14及びその周辺の出土遺物実測図 | 第68図 | SK-01実測図 |
| 第69図 | SK-01出土遺物実測図 | 第70図 | SK-04実測図 |
| 第71図 | SK-04出土遺物実測図 | 第72図 | SK-06実測図 |
| 第73図 | SX-03出土遺物実測図 | 第74図 | 土製支脚実測図 |

図 版 目 次

久米遺跡

- 図版1 調査前全景（西側）
調査前全景（北側）
調査前全景（東側）

- 図版3 SB-03（中央）完掘状況
SB-08完掘状況
SB-07（左）完掘状況

- 図版5 SB-09完掘状況
SB-10-12完掘状況
SB-13（左）完掘状況

- 図版2 SB-01（右）完掘状況
SB-02（中央）完掘状況
SK-01（焼土壙）完掘状況

- 図版4 SB-04（左）完掘状況
SB-05（中央）完掘状況
土器溜遺物出土状況

- 図版6 完掘状況（下段部分）
◇（上段部分）
調査後全景

久米A遺跡

- 図版7 調査前全景
SB-01（上）完掘状況
SB-02完掘状況

久米B遺跡

- 図版8 調査前全景（東側から）
調査前全景（西側から）
調査前全景（南東側から）

- 図版10 SB-07遺物出土状況
SB-07完掘状況
SB-05（焼土壙）完掘状況

- 図版12 SB-09完掘状況
SB-10完掘状況
SB-11完掘状況

- 図版9 SB-01完掘状況
SB-01遺物出土状況
SB-03（焼土壙）完掘状況

- 図版11 SB-02完掘状況
SB-04完掘状況
SB-08完掘状況

- 図版13 SB-06完掘状況
SK-02（焼土壙）完掘状況
SX-01（加工段）完掘状況

図版14 SX-02 (加工段) 遺物出土状況
SX-02 (加工段) 完掘状況
SB-05完掘状況

図版15 SK-01完掘状況
SK-04遺物出土状況
SK-06完掘状況

図版16 SI-01遺物出土状況 (1)
SI-01遺物出土状況 (2)
SI-01完掘状況

図版17 西側斜面完掘状況 (遠景)
西側斜面完掘状況 (近景)
(奥から SB-01~04、07~11)
西側斜面完掘状況 (近景)
(奥から SB-01,04,08)

久米遺跡

図版18 A調査区
A~B調査区

図版19 B調査区
土器溜

図版20 B~C調査区
土器溜

図版21 C調査区
C区西側拡張区

図版22 D調査区
D区西側拡張区

久米B遺跡

図版23 SB-01

図版24 SB-02

図版25 SB-04
SB-01・04周辺

図版26 SB-05
SB-06
SX-02

図版27 SB-08
SB-09

図版28 SB-07
SB-11

図版29 SI-01 (1)

図版30 SI-01 (2)

図版31 T-14 (1)

図版32 T-14 (2)

図版33 SK-01
SK-03
SK-04

図版34 土器溜 (1)

図版35 土器溜 (2)

図版36 土器溜 (3)

図版37 自然流路

図版38 土製支脚、カマド

図版39 北側斜面、西側斜面、下平坦面

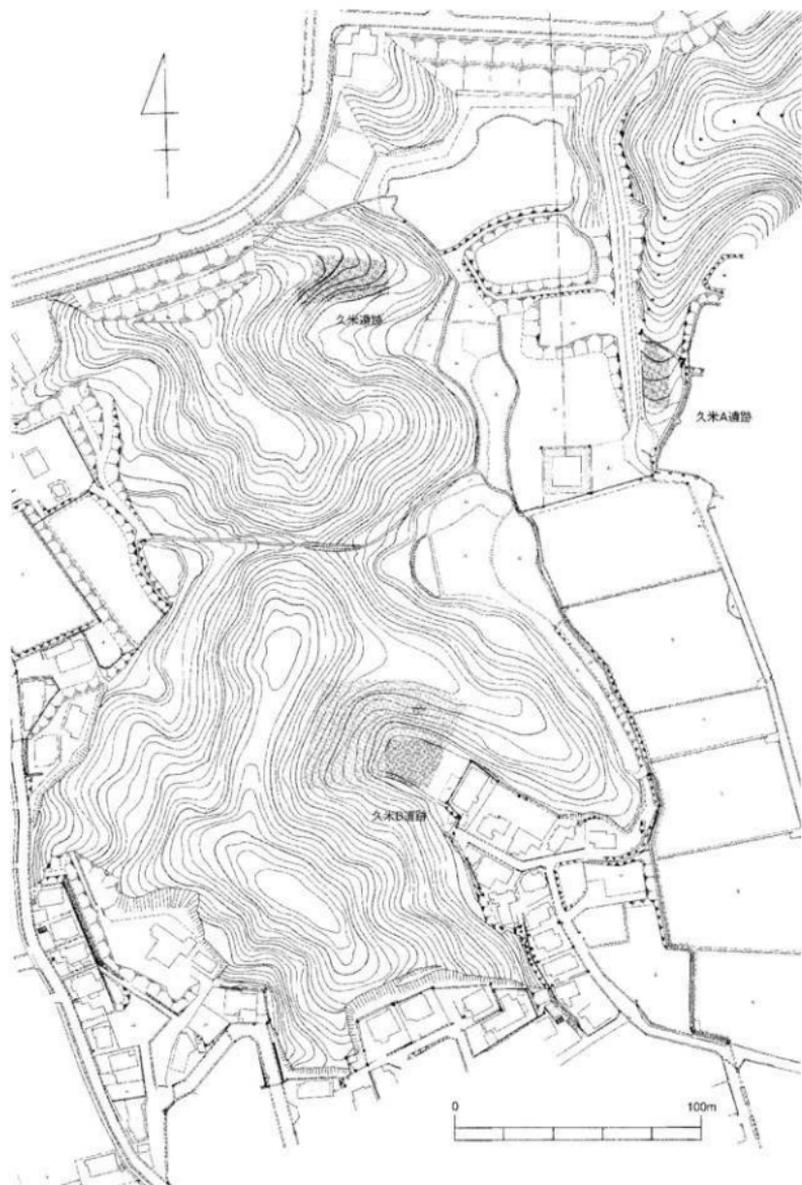
調 查 報 告

I 調査に至る経緯

有限会社豊和不動産において比津町地内に（仮称）法吉団地造成事業の計画が持ち上がった。昭和62年5月27日付で本市教育委員会に埋蔵文化財確認調査依頼書が提出されたため、同年6月9日に開発業者立ち会いで現地踏査を実施した結果、当開発区域北側の比津ヶ丘団地に川廻古墳群が存在していたことから、開発区域内に多数の遺跡が存在する可能性が高いと推測され、伐採後再度分布調査の必要がある旨を事業者宛回答した。

平成2年3月20日付で事業者から埋蔵文化財の分布調査依頼書が提出され、同年3月23日に現地踏査を実施し、古墳推定地3箇所、遺物散布地2箇所、横穴墓推定地4箇所が確認され、開発区域内において事前に発掘調査が必要である旨を回答した。同年4月12日付で埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第57条の2）を本市教育委員会経由で文化庁長官宛に提出した。これを受けて本市教育委員会は同年4月13日付及び平成3年4月18日付で埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第98条の2）を文化庁長官宛に提出した。本市教育委員会において平成2年4月23日から6月29日及び平成3年5月8日から5月31日まで開発区域内の東側を除く箇所について本調査を実施した。

事業者の事情により開発予定が遅れ、事業名称が（仮称）南北津ヶ丘団地造成事業に変更となって、期間をかなり隔てたことから平成10年4月2日付で埋蔵文化財の分布調査依頼書が再度提出され、本調査が終了していない残る東側丘陵に試掘調査を実施して遺跡の範囲・性格等を確認した。その結果、遺物散布地と考えられる箇所が確認されたため、事前に本調査の必要がある旨を事業者宛回答した。本市教育委員会は平成11年4月7日付で埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第98条の2）を文化庁長官宛に提出し、本調査を財団法人松江市教育文化振興事業団事業団に委託して同年4月から実施することとなった。



第3図 久米遺跡群内の各遺跡位置図

Ⅱ 周辺の歴史的環境

久米遺跡群は松江市街地の北側、法吉町から比津町にまたがる丘陵地帯に位置する。この一帯は南側を久米団地、北側を比津団地と開発されている。また遺跡群内も所々田畑などによって削平されているところもある。

久米遺跡は本遺跡群の北側の南向き斜面に位置し、久米A遺跡は久米遺跡の向側の尾根状地形の低丘陵突端で、遺跡群内の東側に位置する。久米B遺跡は本遺跡群内の南、すり鉢状地形のところに位置する。(第3図参照)

この周辺は旧石器時代から弥生時代にかけての明確な遺構を持つ遺跡はまだ確認されていない。しかしながら遺物が出土する遺跡は確認されている。まず本遺跡群の東側にある法吉遺跡②から縄文土器や弥生土器、石鏃や石錐などの石器類などが出土している。また下り松遺跡③からは弥生土器や石器が出土している。

古墳時代になると確認されている遺跡の数が飛躍的に数が増大する。特に後期古墳が多く確認されている。代表的なものは6世紀前半と推定される伝宇牟加比売命御陵古墳④である。一辺が約16m、残存高が約2mで、主体部は石囲い木棺を使用し、南側に造り出しを付設する方墳である。また造り出し部には埴輪が埋め込まれており、墓前祭祀に使用したと思われる丹塗土器や須恵器も出土している⁽¹⁾。6世紀中頃から後半にかけては月廻古墳群⑤が存在する。この古墳群は21基の古墳からなり、箱式石棺や礎床をもつ木棺が使用され、竜虎鏡などの鏡が出土している。また6世紀後半の岡田薬師山古墳⑥は主体部が石室で副葬品には須恵器や玉類が使われていた⁽²⁾。

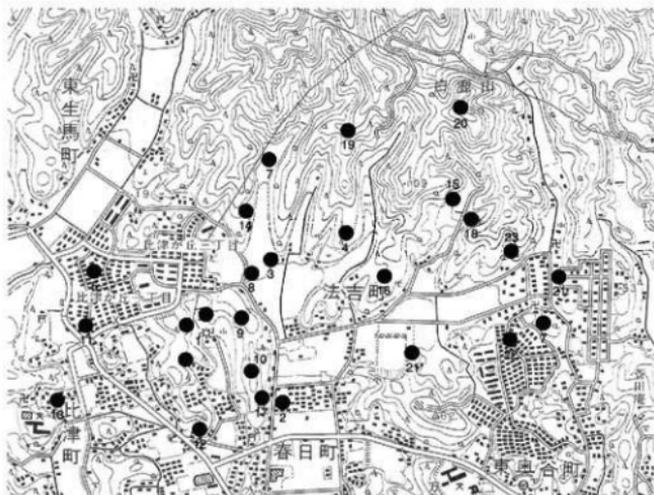
このほかにも全長24m前後の前方後方墳の田中谷古墳⑦、造り出し部を持つ塚山古墳⑧、久米A遺跡の丘陵頂上部に6基(内方墳4基)からなる久米古墳群⑨やその南側に方墳4基からなる唐梅古墳群⑩が存在する。

このようなことから6世紀にはこの周辺が開けていたことがうかがえるが、この時期の集落などの生活遺構を持つ遺跡はあまり知られていない。

これ以降になるとこの一帯でも数多くの横穴墓群が見られる。ひゃくだ横穴⑪、比津が崎横穴群⑫、水崎崎横穴群⑬などである。また須恵器の窯跡推定地のドリ松窯跡推定地⑭や長谷窯跡推定地⑮などの生産遺跡も見られる。

平安時代以降になると、古墓も多く確認されている。2基の経塚からなる山積古墓群⑯や一字一石経が出土した石在経塚⑰、渡米銭(宋銭・明銭)と長さ約44cmの胎巻し「日」が出土したコゴメダカ山遺跡⑱などがある。

またこのあたりは戦国時代、尼子氏の勢力下にあり「尼子十旗」のうち第一と言われた白鹿城があり、その出城と思われる高つば山城⑲や小白鹿城⑳がある。白鹿城は尼子氏の家臣松田氏の居城とされ、1563年(永禄6年)に毛利氏によって攻略された。その戦いは凄惨を極め、毛利・尼子の両軍にかなりの戦死者が出たとされている。石敷きの基壇や宝篋印塔が出土した二反田古墓㉑はその戦いの折の墓とされる⁽³⁾。



第4図 周辺の各遺跡位置

周辺遺跡の一覧表

No	遺跡名	所在地	種別	概要
1	久米遺跡群	法吉町久米	集落	
2	法吉遺跡	法吉町尾後	散布地	縄文土器、弥生土器、石器
3	どり松遺跡	法吉町どり松	散布地	弥生土器、石器、須恵器
4	伝字半加比元命御陵古墳	法吉町鷺谷	古墳	方墳（1辺16m）、刀子、円筒埴輪
5	月廻古墳群	比津町比津ヶ丘	古墳	21基、玉類、鉄器、盤龍鏡
6	岡山薬師古墳	法吉町	古墳	方墳（1辺10m）、丁持壺、玉類
7	田中谷古墳	法吉町田中谷	古墳	前方後方墳（全長23m）、埴輪
8	塚山古墳	法吉町下り松	古墳	方墳（墳長約30m）、埴輪
9	久米古墳群	法吉町久米	古墳	6基（そのうち方墳4基）
10	唐梅古墳群	法吉町唐梅	古墳	方墳4基
11	ひやくだ横穴	比津町	横穴	四柱式妻入、家形石棺
12	比津ヶ崎横穴群	比津町	横穴	須恵器
13	水酌崎横穴群	比津町水酌崎	横穴	須恵器、玉、金環
14	どり松窯跡推定地	法吉町	生産遺跡	須恵器
15	長谷窯跡推定地	法吉町	生産遺跡	須恵器
16	山横経塚群	法吉町山横	古墳	経塚2基
17	石在経塚	法吉町石在	古墳	一字一石経
18	コゴメダカ山遺跡	法吉町	古墳	宋銭・明銭
19	高つほ山城	法吉町	城跡	山城、白鹿城の出城
20	白鹿城	法吉町	城跡	
21	二反山古墓	法吉町二反田	古墳	宝篋印塔14基以上
22	粟元古墳・粟元横穴	法吉町粟元	古墳・横穴	円墳（全長約20m）
23	折廻古墳群	法吉町折廻	古墳	円墳1基、方墳6基、土師器、須恵器
24	なつめ覚神古墳	法吉町	古墳	方墳（15.5×11.5m）、須恵器

周辺は1569年（永禄12年）から1570年（元亀元年）の尾子復興戦の舞台となり、その後毛利氏の支配下に入り、江戸時代に入り1611年（慶長16年）の堀尾氏が松江城に入り城下町として開けてくる。場所は定かではないが松江藩の鉄砲小屋があったとされる。

[引用文献]

- (1) 『伝字牟加比充命御陵古墳』 松江市教育委員会 1993年
- (2) 『岡田薬師古墳』 島根県教育委員会 1986年
- (3) 『二反田古墓』 松江市教育委員会 1987年

Ⅲ 調査の概要

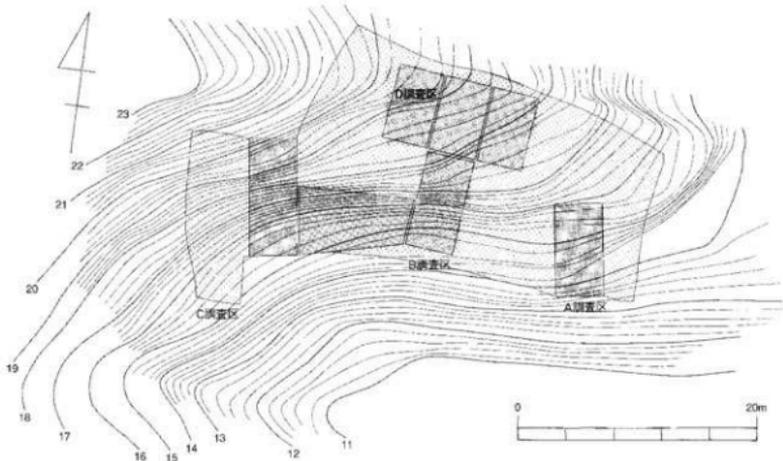
1 久米遺跡

久米遺跡は本遺跡群内の北側、東側に口を開いたようなすり鉢状地形の南側斜面に位置する。この斜面は東側に伸びる低丘陵の斜面であり、標高15～21m、調査面積は東西約37m、南北19m、計約700㎡を測る（第5図）。当初、西側の丘陵頂上部の古墳とこの斜面の横穴墓の有無を確認するために調査が開始されたが、そのいずれも確認できなかった。しかしながら南向斜面からは横穴ではなく、斜面に加工段を形成し、掘立柱建物を造る小集落の存在が確認された。

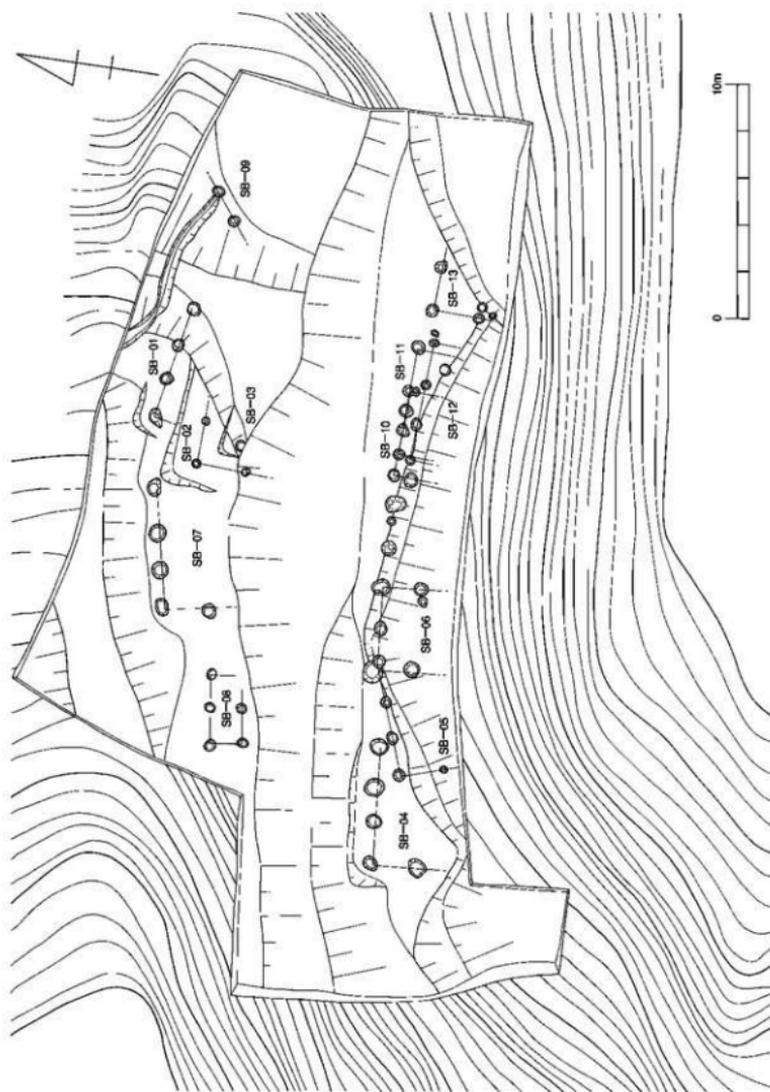
調査は斜面にA～Dの4つの調査区を設定するところから始められた。A調査区（幅4m、長さ7.6m）は遺跡の東側に、B調査区（幅4m、長さ約7.7m）は遺跡の中央、A調査区からは西側に約5m隔てて設定された。C調査区（幅4m、長さ約7m）は遺跡の西側、B調査区から西側に7m隔てて設定された。D調査区はB調査区を尾根に向かって延長した調査区である。その後、遺構の広がりに合わせて各調査区を拡大させた。

調査の結果、斜面にいくつかの加工段を作り、そこに掘立柱建物を造る小集落で、合計13棟の掘立柱建物跡を検出した。大まかにわけて上段2段に分かれており、上段には6棟（SB-01～03、07～09）、下段には7棟（SB-04～06、10～13）が検出された。しかし桁行きは確認できるものの、梁行きが確認できるが少なく、建物跡の正確な規模はわからなかった（第6図）。

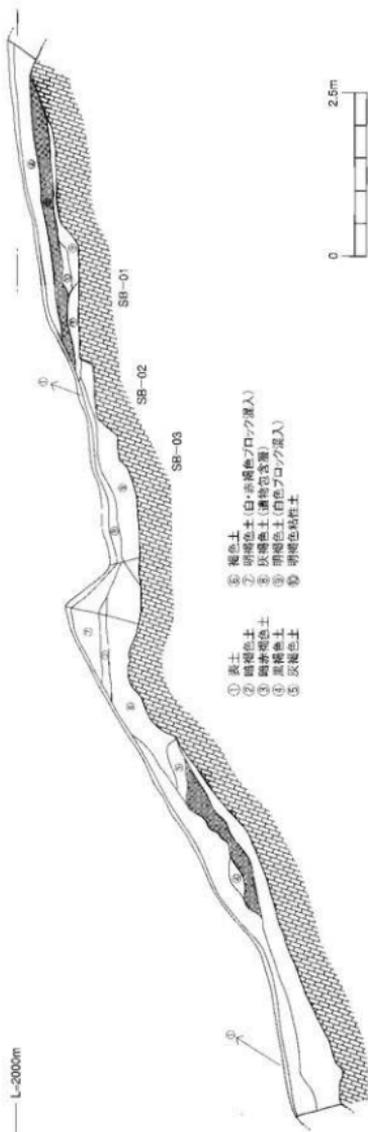
また須恵器や土師器などの遺物も出土したが、特に上段の部分の遺物が遺物包含層である灰褐色土層に集中しており、時期を決定づける床面からの遺物は出土しなかった（第7図）。



第5図 調査前地形測量区及び調査区設定図



第6図 調査成果図



第7図 D～E調査区南北セクション図

[各遺構の概要]

SB-01 (第8図、図版2)

D調査区から検出されたもので、地山面が3段にカットされており、その最上段部分に位置する。SB-01の北西隅には地山面を平坦にした加工段の痕跡がわずかに残っており、その規模は東西1.7m、南北1.1m、高低差5cmを測る。

柱穴は上端径43~56cm、下端径30~56cm、深さは約7~63cm、最西端の柱穴は削平されてしまったのか急激に落ち込んでおり、検出面からの深さは浅いが、本来は他の柱穴と同様に深さがあったと思われる。

遺存状態はあまり良くなく、柱穴の配置は桁行きが3間と確認できるが、梁行きはSB-02のため削平されていて不明である。桁行きの柱穴間は1.5~1.7mと一定している。

遺物が床面から出土しなかったため、時期を決定づけることはできなかった。

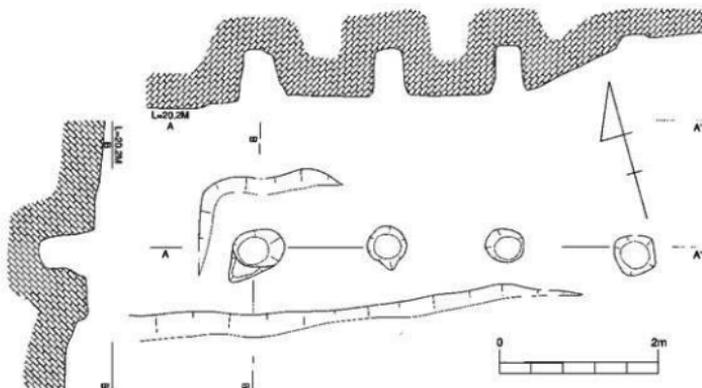
SB-02・03 (第9図、図版2・3)

SB-02はD調査区から検出されたもので、3段カットされた地山の中段部分に位置し、SB-01の南側にあたる。SB-01と同様に、北西隅に地山面を平坦にした加工段の痕跡が残り、その規模は東西6.2m、南北2.4m、高低差27cmを測る。

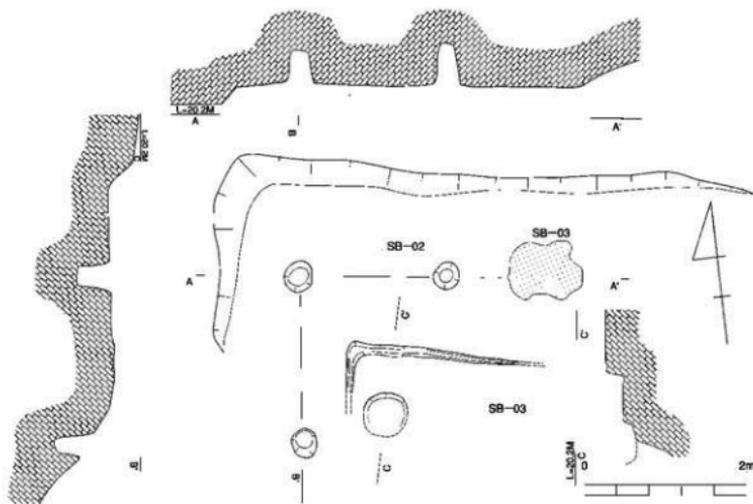
柱穴は上端径34~39cm、下端径15~23cm、深さ34~53cm、柱穴間1.8~2.1mを測る。しかし遺存状態は悪く、柱穴の配置は桁行き1間以上、梁行き1間以上と確認できるが、南側と東側が流失してしまっているため正確な規模は不明である。

遺物は上部の覆土層からは出土しているものの、床面からの遺物はなく時期を決定づけることはできなかった。

SB-03も同様にD地区から検出されたもので、3段にカットされた地山の下端部分に位置し、SB



第8図 SB-01実測図



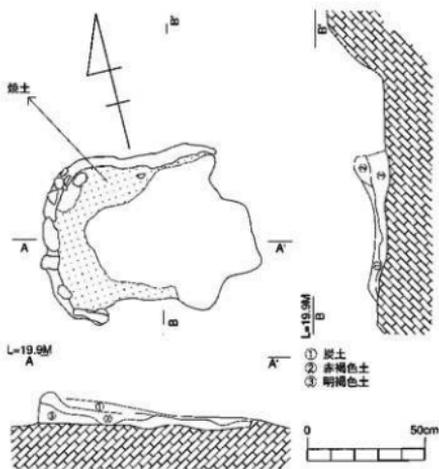
第9図 SB-02・03実測図

-02の南側にあたる。SB-01・02と異なり、加工段によって区画するのではなく、溝によって区画するものである。

溝は北西隅に位置し、平面形は逆L字形、規模は東西長2.5m以上、南北長1.8m以上を測る。溝の東側・南側のいずれも消失してしまっており、正確な規模は不明である。残存している部分では上端幅14cm、下端幅5cm、深さ2cmを測る。また東・南側に行くに連れて細くなっていく。

柱穴らしき遺構は1つ確認されているものの、半分は消失してしまっている。そのため正確な規模や柱穴の配置など詳細については不明である。残存の柱穴は直径は推定で約50cm、現存の深さは15cmを測る。

遺物はSB-01、02と同様に床面から出土しなかったため、この遺構の時期を決定することはできなかった。



第10図 SK-01 (焼土塚) 実測図

SK-01 (第10図、図版2)

SB-02の柱穴のラインから検出された焼

土壌である。規模は東西84cm、南北70cmの範囲に炭土や焼土が多量に見られた。深さは14cmを測り、程度で、表面に約5～6cmの炭土が堆積していた。また上端の縁がかなり火を受けて赤くなっている。

検出面がSB-02とは異なり、やや上層からであり、SB-02から浮いた形になるため、SB-02と関係があまりないと考えられる。また遺物も出土しなかったため、性格など詳細については不明である。

以上のようにSB-01から03は隣接するように作られて重複しているが、遺物が出土しなかったため時期の限定ができず、前後関係についてはわからなかった。しかし土層断面からおそらくSB-01→SB-03へ順番にあまり時を置かずして作られたと考えられる。

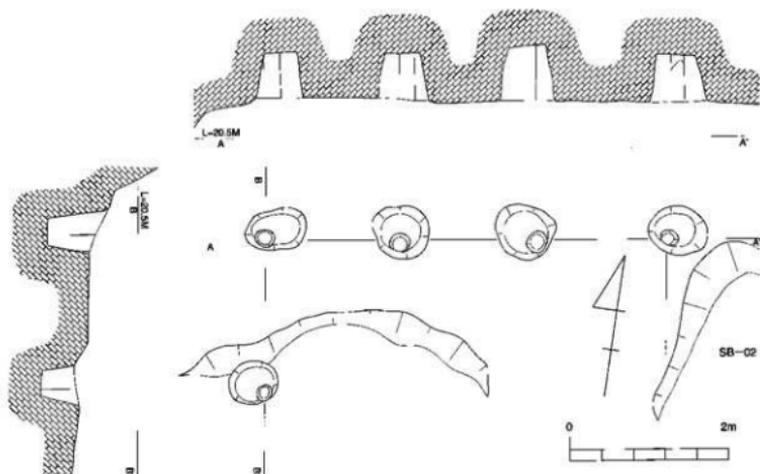
SB-07 (第11図、図版3)

D調査区の西側拡張区から検出されたもので、SB-02の西側に位置する。SB-01～03とは異なり、加工段や溝によって区画されていない。

柱穴は計5つ検出され、その配置は桁行き3間、梁行きは1間以上で、南側は消失してしまっているため確認できなかった。柱穴は上端径45～68cm、下端部20～28cm、深さ23～67cm、柱穴間の距離は1.7～1.9mを測る。ただ南側の柱穴は一段下がっているためやや浅い。この段は本来この住居址と関係のないものと思われるため、南側の柱穴も北側の柱穴と同様の深さがあったと考えられる。

またすべての柱穴から柱痕跡(柱を抜き取った跡と考えられる)が見つかっており、直径約20cm前後の柱を使用していたものと推測される。

全体的には遺存状態はあまり良くなく、また南西側がSB-02と重複しているためか柱穴は検出できなかった。南側の柱列も流失してしまったためか検出できなかった。



第11図 SB-07実測図

遺物は上層の包含層から出土したが床面からは出土しなかったため、時期を決定づけることはできなかった。

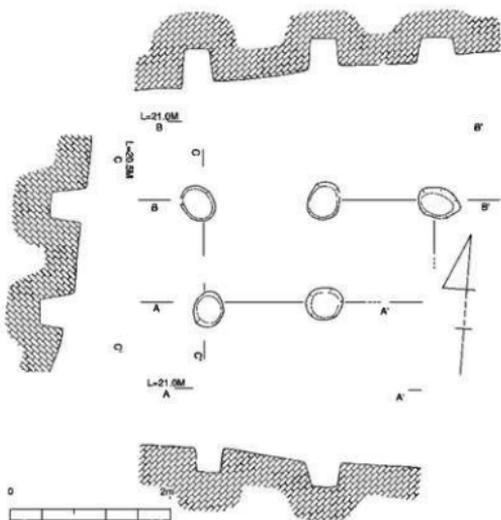
SB-08 (第12図、図版3)

D調査区の西側を掘削した後の精査中に検出されたもので、上段部の西側隅、SB-07の西側に位置する。SB-07と同様に、加工段や溝によって区画されないものである。

柱穴は計5つ検出され、その配置は桁行き2間、梁行き1間で、南側の柱列の東側隅は検出できなかった。

柱穴は上端径40~44cm、下端径16~36cm、深さ30~50cm、柱穴間の距離は東西1.5m、南北1.4mを測る。

遺物は床面から出土しなかったため、時期を決定づけることはできなかった。



第12図 SB-08実測図

SB-09 (第13図、図版5)

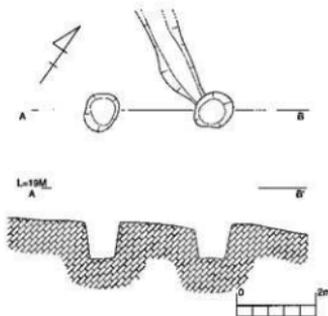
D調査区の東側を掘削後、精査中に検出されたもので、SB-01の東側に位置する。検出された場所は尾根の先端部の東側に向かってなだらかに下がる斜面であり、そこで柱穴らしき遺構が2穴検出された。

柱穴は上端径42~49cm、下端径31~33cm、深さ28~50cm、柱穴間の距離は1.4mを測り、軸は北西~南西方向である。しかし2穴しか確認できなかったため、柱穴の配置や建物の規模などの詳細については不明である。

尾根の先端部は流失したかのように約1mほど掘り込まれたような形になっており、その際にビットも消失した可能性が高く、確認はできなかった。

遺物も出土しなかったため、時期を決定づけることはできなかった。

またSB-09の北西側で検出された溝はこの住居址とは関係ものと思われ、自然流路的なものと考えられる。



第13図 SB-09実測図

以上のように上段部では計6棟の掘立柱建物跡が検出された。いずれも遺物が出土しなかったために詳細な時期限定はできなかったものの、切り合いから新旧関係がある程度推測することができる。

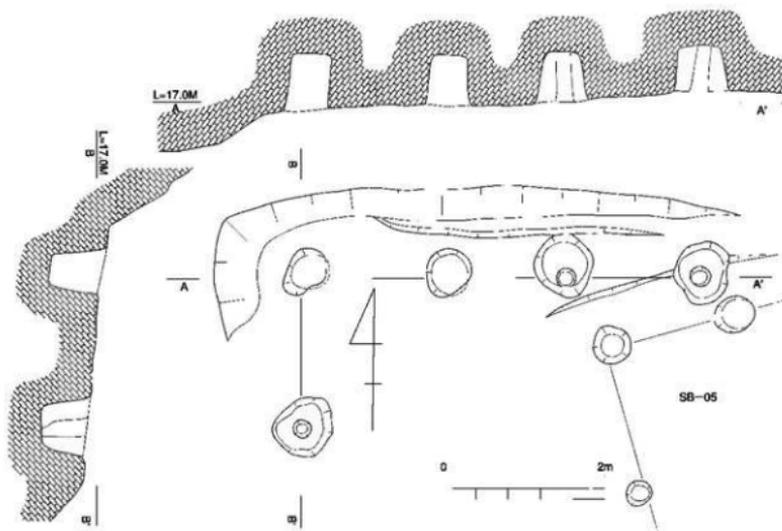
まず大まかにわけて上段部はSB-01～03のグループ(A)とSB-07、08(B)のグループがあると考えられる。それぞれのA・Bグループ内では建物の方向はほぼ同じであるが、AとBと比べると異なる。Aグループは桁行きの軸がやや南東側にずれているのに対して、Bグループの桁行きの軸はほぼ東～西に沿っている。また溝や加工段によって区画する、しないも異なっている。

また新旧関係を見るとSB-02がSB-07の床面を切っていることからSB-07の方が早く建てられたものと思われる。したがってこのAグループとBグループでは時期や用途等が異なっていると推測される。

SB-04 (第14図、図版4)

C調査区から検出されたもので、下段部の最西端に位置する。北西隅に加工段を形成して、区画するもので、一部に溝らしきものも見られる。加工段の平面形はL字形を呈し、規模は規模は東西6.4m、南北1.7m、高低差70cmを測る。また溝は加工段の東西に沿って作られ、その規模は長さ3.75m、幅15cm、深さ5cmを測る。

柱穴は上端径50～90cm、下端径39～57cm、深さ55～85cm、柱穴間の距離は東西は1.5～1.75m、南北は2.0mを測る。遺存状態はあまり良くなく、南側を流失してしまったらしく、また南東側はSB-05に



第14図 SB-04実測図

よって削平されてしまっている。柱穴の配置は桁行き3間、梁行き1間が確認されている。

検出された柱穴の中から柱痕跡が見られるものが3つあり、直径25cm前後の柱が使用されていたと推測される。

遺物は上層の覆土層から出土しているが、床面からの出土はなく、時期を決定づけることはできなかった。

また西側は自然傾斜して谷筋に下がっていき、そこから先で遺構は検出されなかった。

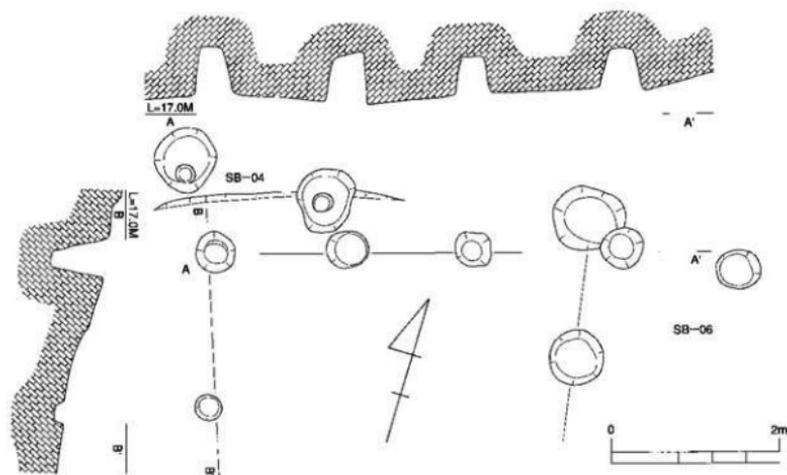
SB-05 (第15図、図版4)

C調査区の西側、B調査区との間に調査区を設定し(B-C調査区)、そこから検出されたもので、SB-04の東側に位置する。SB-04と同じく住居址の北西隅に加工段を形成して区画するもので、平面形はやや弧状気味の直線形で、規模は長さ3.0m、高低差は10cmを測る。

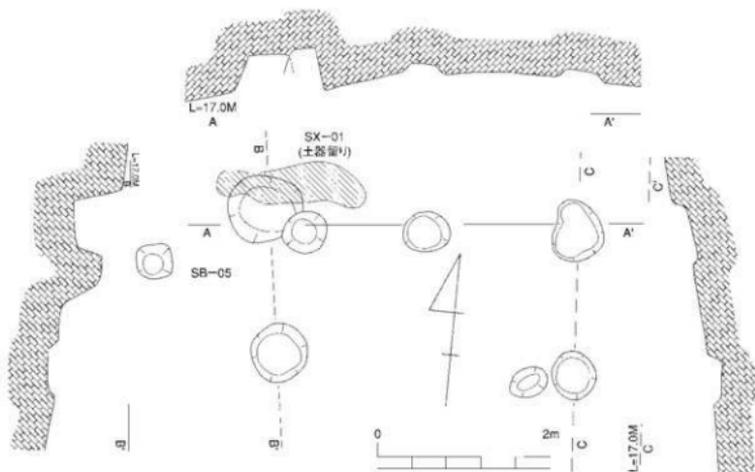
柱穴は上端径30~50cm、下端径23~38cm、深さは10~62cm、柱穴間の距離は東西は1.4~1.8m、南北は1.8mを測る。柱穴の配置は桁行き3間、梁行き1間以上が確認されている。

遺存状態は悪く、東側はSB-06に、西側はSB-04によって削平され、南側は流失によるものが消滅してしまっている。そのため南側で検出された柱穴は浅く、本来は北側の柱穴と同じくらいに深さがあったものと思われる。またSB-04や06に比べて住居址の柱穴の掘り方がやや小さい。

遺物は床面から出土しなかったため、時期を決定づけることはできなかったが、遺構の遺存状況から新旧関係はSB-04の方が古いのではないかと考える。



第15図 SB-05実測図



第16図 SB-06実測図

SB-06 (第16図)

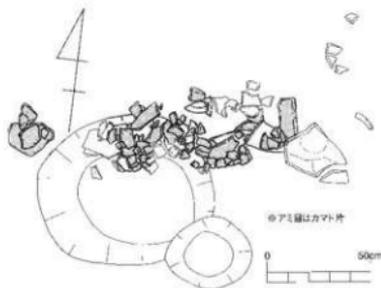
B～C調査区から検出されたもので、SB-05の東側に位置する。西側のSB-04・05とは異なり、加工段や溝によって区画しないものである。

柱穴は上端径43～74cm、下端径37～57cm、深さは9～38cm、柱穴間の距離は1.5～1.8mを測る。柱穴の配置は桁行き2間、梁行き1間以上が確認されている。

遺存状態は悪く、特に北西隅の柱穴以外は削平されているためか検出面から非常に浅く、本来はもう少し深さがあったと思われる。

西側のSB-05とは切り合い関係にあるが、遺構の遺存状況からこれらの新旧関係はSB-06が跡から作られたものと考えられる。

遺物は北西隅の柱穴付近から土器が1.5m×0.5mの範囲で集中して出土した(SX-01、第17図、図版



第17図 SX-01 (土器溜り) 実測図

4)。出土遺物は須恵器の坏・蓋・壺・甕や土師器のカマドなどが多数出土した。

(第23・24図、図版19・20)

坏は底部に糸切り痕(回転・静止)が残るものや高台付のものが出土した。

しかし遺物の出土面が柱穴の検出面よりやや上層にあたり、これらの遺物が上部から流れ込んだ可能性も考えられるため、SB-06の時期を決定づけることができるかは不明である。

SB-10~12 (第18図、図版5)

B調査区の東側から検出されたもので、SB-06の東側に位置する。これらの住居址も加工段や溝によって区画するものではない。

SB-10はこの中で一番東側に建てられたもので、柱穴は上端径24~50cm、下端径19~32cm、深さは28~48cm、柱穴間の距離は1.7~1.9mを測る。柱穴の配置は桁行きは2間で、梁行きは不明である。

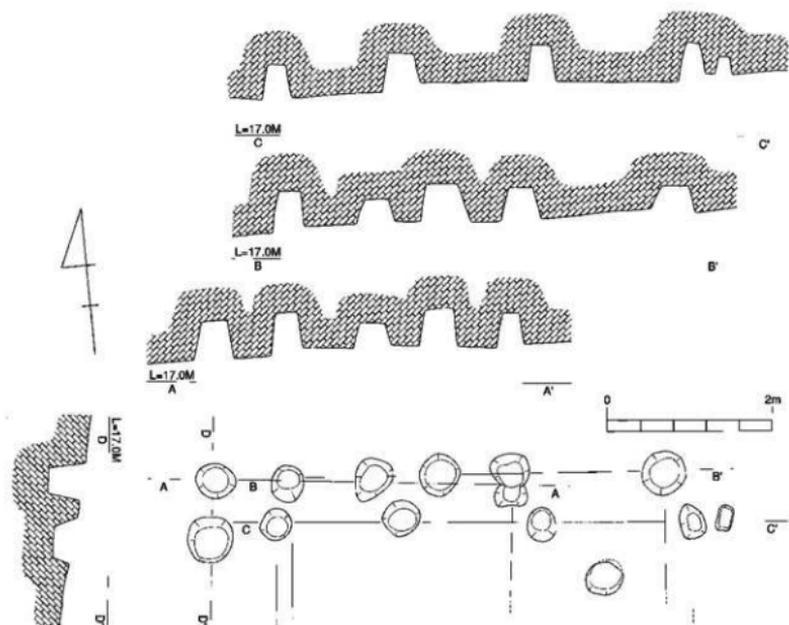
SB-11はSB-10に一部が重なり合って半間ほど東側にずれて作られた。柱穴は上端径46~55cm、下端径23~36cm、深さは32~47cm、柱穴間の距離は1.8~2.7mを測る。柱穴の配置は桁行きは2間、梁行きは不明である。

SB-12はSB-11より40cmほど南側に建てられた。柱穴は上端径38~43cm、下端径22~28cm、深さは35~45cm、柱穴間の距離は1.5~1.8mを測る。柱穴の配置は桁行きは3間、梁行きは不明である。

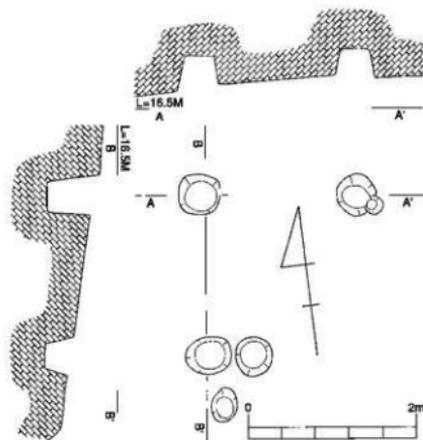
いずれも南側が流失し消滅してしまったため梁行きが確認できず、また遺物が床面から出土しなかったため、住居址自体の時期や住居址の時期差については不明である。

しかしこれらの建物は方向がほぼ同じであり、建て直しによるものなのか定かではないが、その可能性が考えられる。

これら以外にもいくつかのピットが検出されたが、いずれも建物跡等にあてはまらなかった。



第18図 SB-10~12実測図



第19図 SB-13実測図

SB-13 (第19図、図版5)

SB-10-12と同じくB調査区の東側から検出されたもので、SB-12の東側に位置する。これも加工段や溝によって区画されるものではない。

柱穴は上端径45~50cm、下端径27~37cm、深さは27~50cm、柱穴間の距離は東西は1.8m、南北は1.9mを測る。柱穴の配置は桁行きは1間、梁行きは1間が確認できた。

遺物は床面から出土しなかったため、時期を決定づけることはできなかった。

中断部分はおおまかにSB-04・05のグループ(C)、SB-05(D)、SB-10-13のグループ(E)に分けられる。CグループとDグループ

とは切り合い関係にあるが、新旧関係はその検出状況からDグループ→Cグループだったと思われる。しかしながらSB-04と06との新旧関係は遺物が床面から出土しなかったため不明だが、同じ方向という点も考えて同時期に建てられたのではないだろうか。

SB-10-12はほとんど同じ場所に重複して建てられている。时期的なことや新旧関係に関しては遺物が出土しなかったために限定はできないが、方向性や規模など類似している点が多いため建て直しの可能性が考えられる。SB-13はやや離れているものの、方向性が同じであり同時期に建てられているのではないだろうか。

C・DとEのそれぞれグループ間については遺物が床面から出土しなかったため新旧関係は不明である。

本遺跡の遺構の特徴は、第一に斜面を削って平坦面を作り、そこに住居を建てていることである。おそらく削った土砂を盛土して平坦面を広げたものと思われるがそのほとんどが流失してしまったと思われる。

第二に検出された住居址は計5つのグループに分けられる。しかしながら極端な方向の違いや離れていないため时期的な広がりがないように思われる。これら住居址群の方向性は多少異なるものの、すべてが南側に谷に向けて建てられていることである。

第三は残念なことだが、ほとんどの住居址の梁行き部分が検出できず、これによって性格は規模や柱穴位置など詳細について不明な点が多いことである。これは住居址の重複や盛土部分の流失によるものではあるが、それだけ密度が高い集落であった可能性がある。

遺物

第20図はA調査区から出土した主な遺物である。

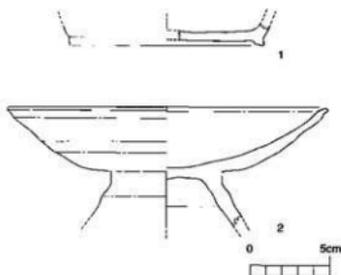
1は第2層明褐色土層から出土した須恵器の坏身片で、底部片が1/4残存している。底径は推定で12.2cm、残存高は1.5cmを測る。器形は胴部が欠損しているため詳細は不明だが、恐らく胴部がまっすぐ立ち上がる碗形と思われる。ロクロ成形で、底部は粘土と切り離した後に高台を貼り付けナデ調整を加えた。底部内面に多方向ナデ、胴部内外面に回転ナデを施す。

2は第2層明褐色土層から出土した須恵器の高坏片で、坏部から継部にかけての破片である。口径は推定で20.2cm、残存高は7.7cmを測る。坏は外側に広がって口唇部でわずかに外反する器形である。継部にはすかしや切り込みは見られない。坏部外面には回転ナデ、坏部の底部内面は多方向ナデを施す。坏部の底部外面にはヘラ切りの痕跡が残る。また坏部の内面に円弧状の重ね焼きの痕跡が見られる。

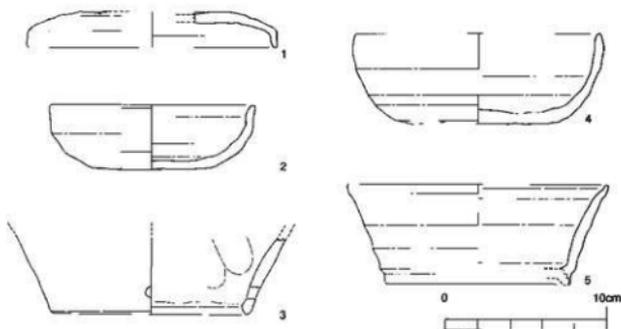
第21図はA～B調査区から出土した主な遺物である。

1は第2層褐色土層から出土した須恵器の坏蓋の口縁部片で、口径・大頂部径はいずれも推定で15.0cm・9.0cm、残存高は2.2cmを測る。天頂部の外面はヘラケズリ、その内面は多方向ナデ、胴部の内外面は回転ナデを施す。恐らく天頂部につまみが付くタイプと思われる。

2は須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて1/3が残存している。口径は推定で14.8cm、器高4.0cm、底径は6.4cmを測る。胴部がわずかに膨らみながら立ち上がる碗形を呈する。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部内面には多方向ナデ、胴部内外面には回転ナデを施す。



第20図 A調査区出土遺物実測図

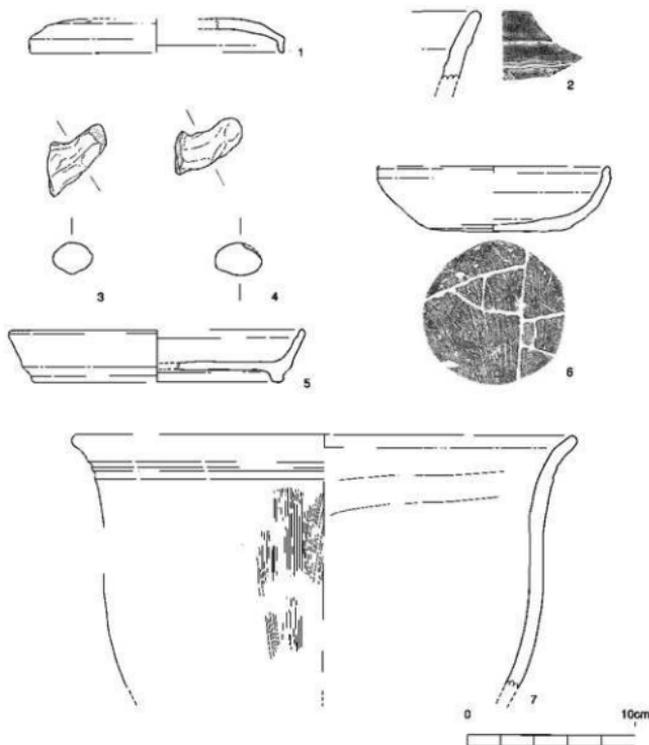


第21図 A～B調査区出土遺物実測図

3は土師器の瓶片で、底部の一部が残存する。外面はナデ、外面はヘラケズリの後ナデによって器面調整が施されている。また直径約8mm前後の円孔が見られる。

4は須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて1/3が残存している。口径は推定で14.8cm、器高は6.6cm、底径は8.4cmを測る。胴部がわずかに膨らみながら口縁部に向かって立ち上がる碗形を呈する。ロクロ成形で底部外面はヘラ切りの後ナデ調整を施し、底部内面に多方向ナデ、胴部内外面には回転ナデを施している。

5は須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて1/5が残存している。口径・底径はいずれも推定で15.8cm・10.7cm、残存高は6.1cmを測る。胴部がまっすぐ立ち上がる碗型を呈し、口唇部はわずかにつまみ出されている。ロクロ成形で、底部は回転糸切りの後高台を貼り付け、ナデ調整を加えている。底部内面に多方向ナデ、胴部内外面には回転ナデを施す。



第22図 B調査区出土遺物実測図

第22図はB調査区から出土した主な遺物である。

1は第2層褐色土層から出土した須恵器の坏蓋の口縁部片で、口径・底径はいずれも推定で、14.8cm、9.0cm、残存高は2.1cmを測る。ロクロ成形で、大頂部外面はヘラケズリ、その内面は多方向ナデ、口縁部付近のない外面は回転ナデを施す。天頂部につまみが付く形態と思われる。

2は第2層褐色土層から出土した須恵器の甕の口縁部片で、口縁部の3条の波状文と突帯を施す。

3・4は第4層明褐色土層から出土した土師器の甕の把手部片で、7の一部と思われる。3は残存長4.5cm、最大幅1.8cm、4は最大長3.9cm、最大幅1.9cmを測る。双方ともケズリによって器面調整されている。

5は第4層明褐色土層から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて2/3が残存している。口径は17.2cm、器高は3.1cm、底径は14.4cmを測る。器形は外側にまっすぐ立ち上がる皿形である。焼成が不良のため、色調が乳白色で柔らかく、そのため器面調整は風化して摩滅している不明である。ロクロ成形で、高台は後から貼り付けたものと思われる。

6は第4層明褐色土層から出土した須恵器の坏身で、ほぼ完形品である。口径13.4cm、器高3.9cm、底径7.9cmを測る。器形は胴部がわずかに膨らみながら立ち上がる碗形である。ロクロ成形で、底部外面は静止糸切りによって切り離され、底部内面は多方向ナデ、胴部内外面には回転ナデを施す。焼成はやや不良で、少し軟調気味である。

7は第4層明褐色土層から出土した土師器の甕片で、3・4と同様の場所から出土したため同一である可能性が高い。口径は推定で29.4cm、残存高15.6cmを測る。口縁部外面はナデを施し、胴部外面にはハケ目を、内面の頸部付近にはケズリを施す。胴部内面は風化のため器面調整は不明である。

B～C調査区や土器溜から出土した主な遺物は第23・24図である。B～C調査区から出土した主な遺物が第23-1・2図で、それ以外は土器溜からの出土である。

1は第2層暗褐色土層から出土した坏身片で、口縁部から底部にかけて1/2が残存する。口径は12.4cm、器高は4.6cm、底径4.0cmを測る。器形は胴部がわずかに膨らみながら立ち上がる碗形で、口縁部はわずかに内湾する。ロクロ成形で、底部外面は回転糸切りによって切り離され、底部内面には多方向ナデ、胴部内外面には回転ナデを施す。

2は第3層赤褐色土層から出土した須恵器の坏蓋で、口縁部から大頂部にかけて2/3が残存する。口径は15.6cm、器高は3.5cm、大頂部径8.2cmを測る。ロクロ成形で、大頂部外面はヘラケズリが、その内面は多方向ナデを施し、また胴部内外面には回転ナデを施す。擬宝珠形のつまみが付いている。

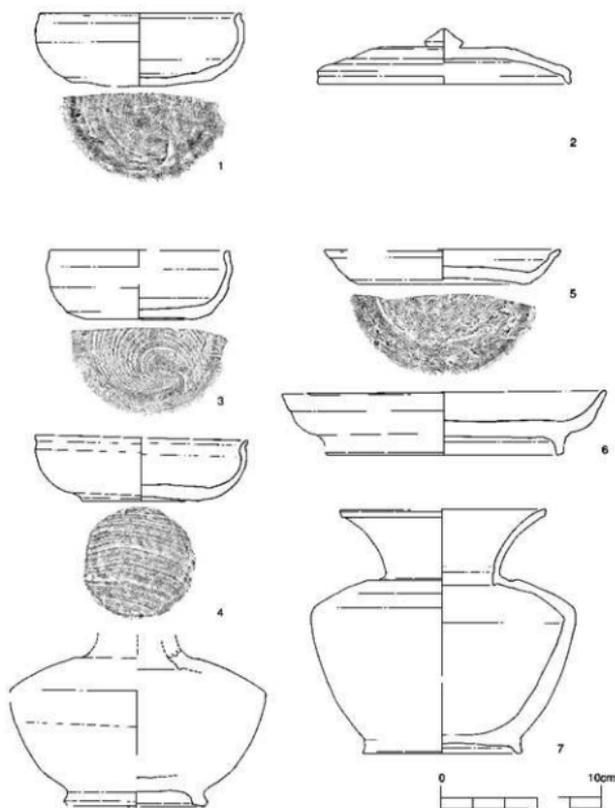
3は土器溜から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて1/2が残存している。口径は13.0cm、器高は3.5cm、底径は8.8cmを測る。器形は胴部がわずかに膨らみながら口縁部に向かって立ち上がる碗形で、口縁部はわずかに内湾する。ロクロ成形で、底部外面は回転糸切りによって切り離され、底部内面は多方向ナデ、胴部内外面は回転ナデを施す。

4は土器溜から出土した須恵器の坏身で、ほぼ完形である。口径は14.8cm、器高は2.2cm、底部は10.8cmを測る。器形は胴部がわずかに膨らみながら口縁部に向かって立ち上がる碗形で、口縁部はわずか

に外反する。ロクロ成形で、底部外面は静止糸切りによって切り離されている。底部の内面、胴部内外面には回転ナデを施す。口縁部はつまみ上げられ外反し、底部はやや窪んでいる。

5は土器溜から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて1/2が残存する。口径は14.8cm、器高は2.2cm、底径は10.8cmを測る。器形は口縁部に向かって外側に広がる皿形で、口縁部はわずかに外反する。ロクロ成形で、底部外面は回転糸切りによって切り離され、底部内面には多方向ナデ、胴部内外面には回転ナデを施す。

6は土器溜から出土した須恵器の坏身で、“盤”と呼ばれるもので、ほぼ完形である。口径は20.4cm、器高は4.1cm、底径は14.9cmを測る。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離されている。底



第23図 B～C調査区及びSX-01（土器溜）出土遺物実測図

部内面・胴部内外面に回転ナデを施す。高台は回転糸切りで切り離された後で貼り付けられ、その後でナデを施す。

7は土器溜から出土した須恵器の高台付壺で、口縁部が欠損しているものの、長径壺であったと思われる。残存高は10.0cm、底径は14.9cmを測る。ロクロ成形で高台は貼り付けられている。形態は胴部中央よりやや上から鋭く内側に立ち上がる。また頸部から底部にかけて一部ではあるが、緑灰色の自然釉が付着している。

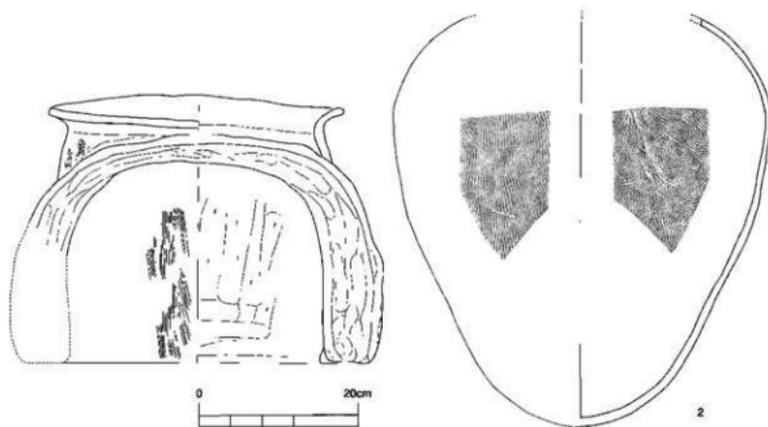
8は土器溜から出土した須恵器の高台付壺で、1/2が残存している。口径は推定で12.7cm、器高は15.5cm、底径は9.8cmを測る。ロクロ成形で、口縁部と高台は貼り付けられている。高台は貼り付けられた後ナデが施されている。

24-1は土器溜から出土した移動式カマドである。器高は44.8cm、受け口径26.2cm、底径33.2cmを測る。外面は主にハケ目を施し、庇や焚き口、内面にはヘラケズリを施す。庇は貼り付けられている。胴部の一部を欠くものの、形状がわかり比較的良好的な資料である。内面にススなどは付着していない

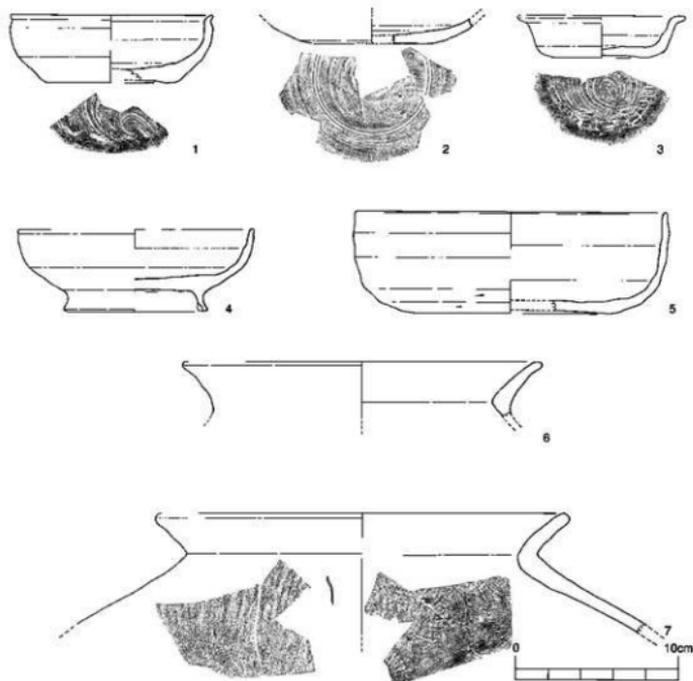
2は土器溜から出土した須恵器の寛片で、口縁部は欠くものそれより下は存在し、だいたいの器形は認識できる。残存高は51.3cm、胴部の最大幅は47.0cmを測る。胴部はタタキ成形である。

第25図はC調査区から出土した主な遺物である。

1は第3層灰褐色土層から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて1/3が残存する。口径・底径はいずれも推定で12.2cm、7.8cm、器高は4.2cmを測る。器形は胴部がわずかに膨らみながら立ち上がる碗形で、口縁部はわずかに外反する。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部内面には多方向ナデ、胴部内外面には回転ナデを施す。



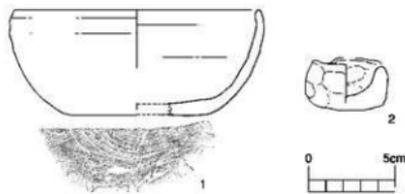
第24図 SX-01出土遺物実測図



第25図 C調査区出土遺物実測図

2は第3層灰褐色土層から出土した須恵器の坏身片の底部片で、底部1/3が残存する。器形は胴部が欠損しているため詳細は不明だが、恐らく胴部がまっすぐ外側に立ち上がる皿形と思われる。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、その後ヘラケズリで成形されている。底部の内面は多方向ナデ、胴部内外面は回転ナデを施す。胴部と底部との境にヘラによってつけられてと思われる溝がある。焼成は不良で、柔らかい。

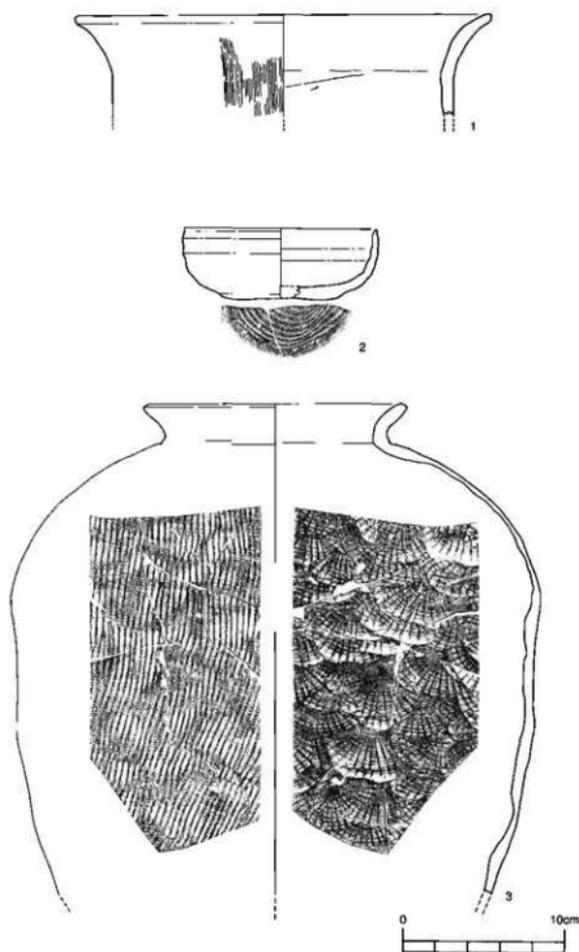
3は第3層灰褐色土層から出土した須恵器の坏身で、1/2が残存する。口縁部は推定で10.2cm、器高2.6cm、底径5.6cmを測る。器形は外側に広がる皿形であるが、口縁部に特徴があり、坏の立ち上がりに対してほぼ水平に折り曲げられて面を作っている。この器形はこの一つだけである。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離されている。胴部内外面には回転ナデを



第26図 C区西側狐塚区出土遺物実測図

施す。

4は第4層明灰褐色土層から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて約1/3が残存する。口径・底径いずれも推定で14.2cm、8.2cm、器高5.1cmを測る。器形は胴部がわずかに膨らみながら立ち上がる碗形である。ロクロ成形で、底部は切り離された後、やや足高の高台を貼り付ける際にナデ調整、底部内面は多方向ナデ、胴部内外面は回転ナデを施す。



第27図 D調査区及びD区西側弧張区出土遺物実測図

5は第4層明灰褐色土層から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて約1/2が残存する。口径は18.8cm、底径12.0cm、器高6.3cmを測る。器形は胴部がわずかに膨らみながらまっすぐに立ち上がる碗形である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部と胴部の境はヘラケズリによって形が整えられている。胴部の内外面には回転ナデを施す。

6は第4層明灰褐色土層から出土した土師器の甍片で、約1/3の口縁部が残存する。口径は推定で21.6cm、残存高は3.9cmを測る。表面は風化が著しいため器面調整は不明だが、胴部内面はヘラケズリを施す。口縁部外面にはススのような附着物が見られる。

7は第4層明灰褐色土層から出土した須恵器の甍片で、約1/3の口縁部が残存する。口径は推定で24.6cm、残存高7.4cmを測る。口縁部には回転ナデを施し、胴部はタタキ成形である。

第26図はC区西側拡張区から出土した主な遺物である。

1は須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて約1/3が残存する。口径・底径はいずれも推定で11.8cm、7.8cm、器高は4.5cmを測る。ロクロ成形で、器形は胴部がわずかに膨らみながらまっすぐに立ち上がる碗形である。底部は回転糸切りによって切り離され、胴部内外面に回転ナデを施す。

2はミニチュアの土師器ではほぼ完形品である。口径は4.1cm、底径は4.0cm、器高は3.1cmを測る。手捏成形で、内外面には指頭圧痕が残る。用途は不明である。

第27図はD調査区及びD区西側拡張区から出土した主な遺物である。

1は土師器の甍片で、約1/3の口縁部が残存する。口径は推定で29.4cm、残存高は6.3cmを測る。口縁部にナデを、胴部外面にハケ目を、胴部内面にケズリを施す。

2は須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて約1/3が残存する。口径・底径はいずれも推定で11.8cm、7.8cm、器高は4.5cmを測る。器形は胴部がわずかに膨らみながらまっすぐに立ち上がる碗形で、わずかに外側に外反する。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、胴部内外面に回転ナデを施す。

3は拡張区から出土した須恵器の甍で、底部が欠損しているものの、全体の形はある程度うかがえる。口径は15.6cm、残存高31.0cm、胴部の最大幅は32.6cmを測る。口縁部の内外面には回転ナデを施している。胴部はタタキ成形である。

木遺跡の出土遺物を概観すると、まず出上のほとんどが遺物包含層からであり、遺構床面からの出土は皆無である。出土遺物は須臾器（坏身・坏蓋・高坏・壺・甕）と土師器（甌・カマド・甕）である。

坏類を分類してみると次のようになる。

碗形	— 有高台	— 膨らみながら立ち上がる	25-4
		— 外側にまっすぐ立ち上がる	20-1、21-5
	— 無高台	— 膨らみながら立ち上がる	21-2・4、22-6、23-1・3・4、
碗形	— 有高台		26-1、27-2、22-5、23-6
		— 無高台	23-5

これらの坏身は碗形・皿形を区別し、器高に低いものを相対的に皿形とした。調整方法は回転糸切り・回転ナデが主流であり（23-4は静止と切り）、高台はその後貼り付けられナデ調整を加えている。時期としては柳浦編年で言うのは3～4期（8世紀中頃～9世紀後半）頃のものと思われる。

坏蓋は23-2以外は欠損しているため正確なことはわからないが、大半が擬宝珠形のつまみは付くタイプと思われる。調整方法はヘラケズリの後、一部再調整しないものや回転ナデといった再調整を加えるものが見られるが、時期としては坏身と同じく柳浦編年で言うのは3～4期（8世紀中頃～9世紀後半）頃のものと思われる。

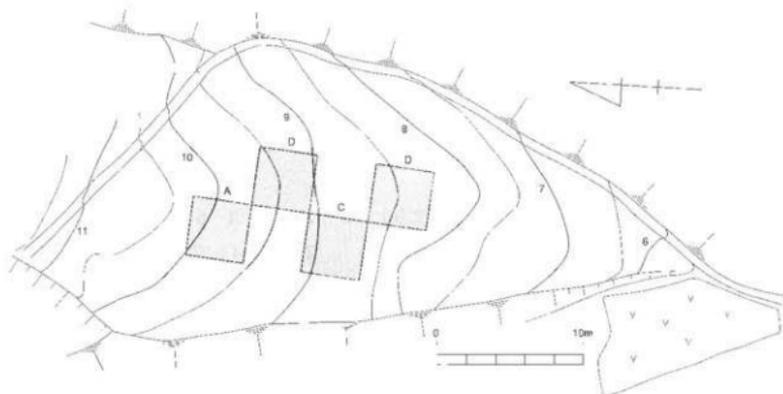
高坏は出土数は20-1のみで少なく、低脚無蓋高坏である。これは坏部の口径がかなり大きい印象がある。すかしや切り込みが見あたらないが坏身・坏蓋と時期的に異なり、時期としては大谷編年で言う出雲5期（6世紀後半）頃のものと思われる。

壺類は器型はほぼ同じで、高台付で胴部よりやや上で最も膨らみ、そこから鋭く立ち上がる。そして頸部にいたっては口縁部は外側に広がる。調整方法は胴部はヘラケズリの後ナデ調整によって再調整している。底部はヘラ切り・ヘラおこしによって切り離されている。また胴部には双方とも自然積が付着している。時期としては大谷編年で言う出雲編年の7～8期のものと思われる。

土師器は大半がカマド・甌・甕などの大型製品であり、火を受けた痕跡が多く見られる。また移動式カマドがあることから、SK-01のような焼土壇は住居址内で使用されていたとは考えにくい。

このように遺構に伴って出土しなかったため、遺構そのものの時期の限定はできなかったが、遺跡全体から言えば6世紀後半から9世紀後半の遺物が出土している。おおよその時期としては8世紀中頃の遺物が集中しているため、奈良時代から平安時代初めにかけての集落ではないかと思われる。

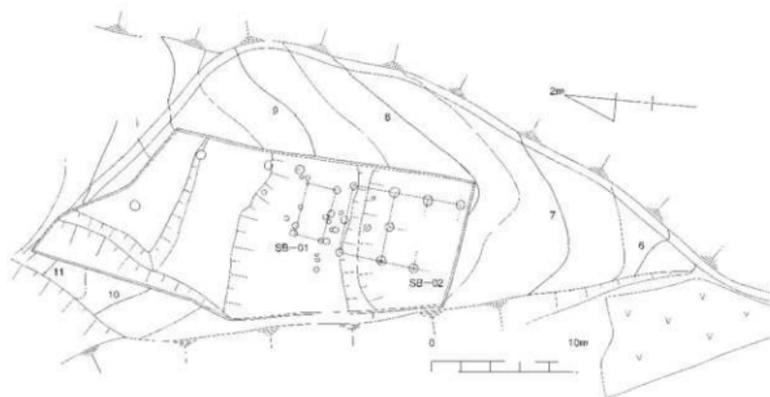
2 久米 A 遺跡



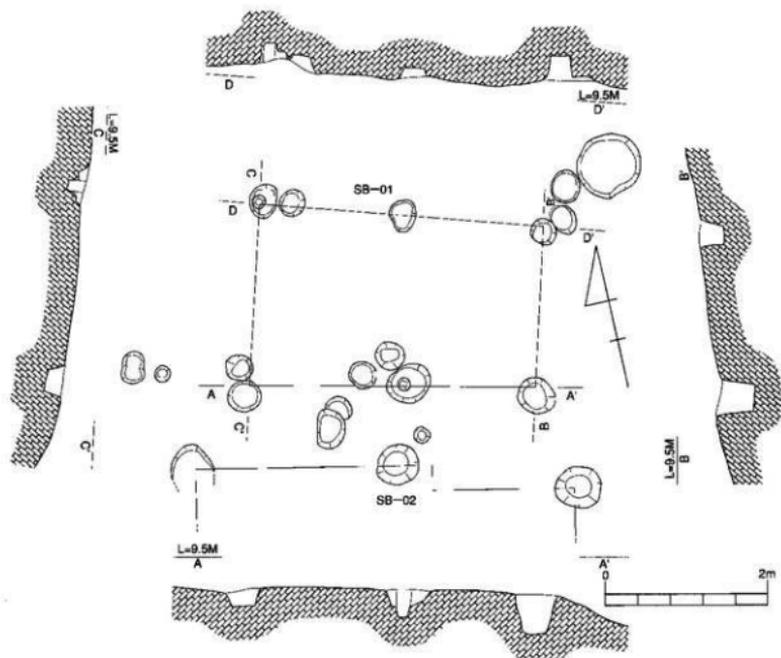
第28図 調査前地形測量図及び調査区設定図

久米A遺跡は本道跡群の西側、久米遺跡から谷を挟んで向かって向かい側の尾根状の緩斜面に位置する。この緩斜面の低丘陵の先端にあり、調査範囲は標高6～11m、東西10m、南北27m、調査面積は270㎡を測る。

当初、調査は4×4グリッドを千鳥格子状に4ヶ所設定したが（第28図）、柱穴状のピットが検出されたので、その付近を中心に調査範囲を拡大し、全面調査を行った。



第29図 調査成果図



第30図 SB-01実測図

調査の結果、この遺跡は斜面に加工段を形成して平坦面を作り、そこに建物を建てるもので、久米遺跡と同様である。本遺跡の場合、いくつかの平坦面が見られたが、そのうちの下の部分で掘立柱建物跡が2棟検出された（第29図）。

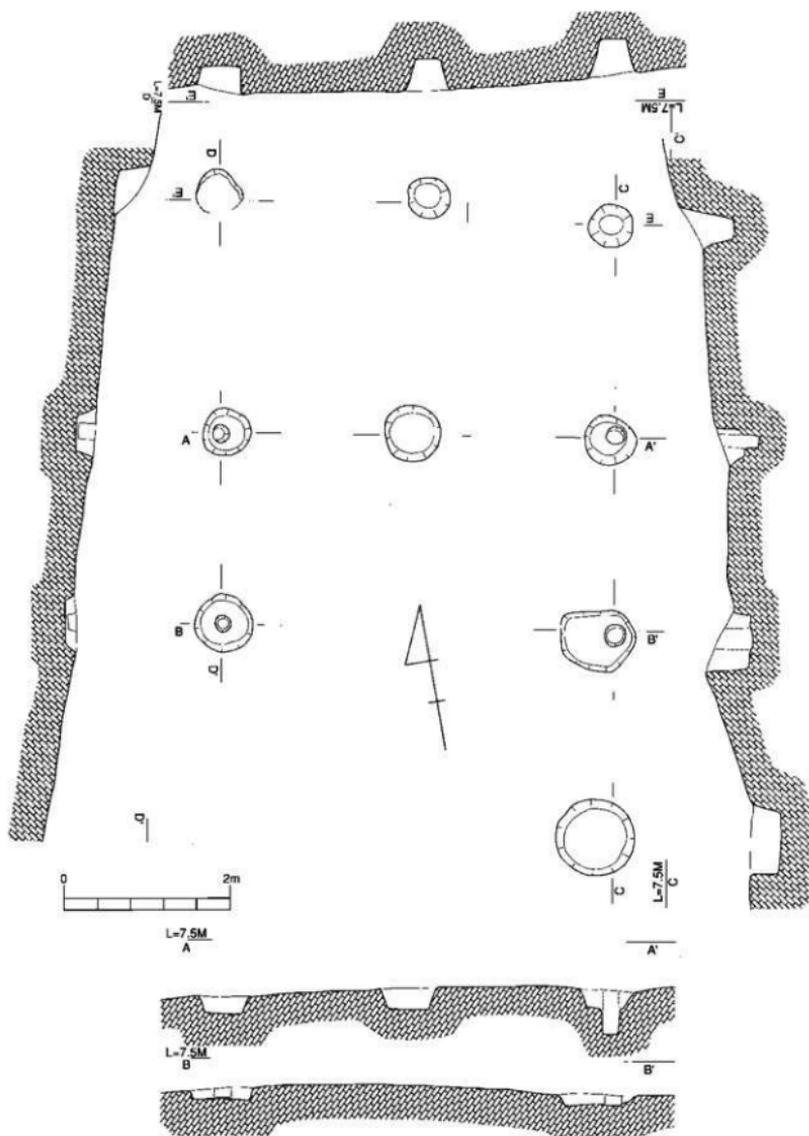
SB-01（第30図、図版7）

SB-01は調査区のほぼ中央の平坦面から検出されたもので、検出された平坦面の中段部分に位置する。この遺構は加工段や溝によって区画するタイプではなく、素堀の柱穴のみである。

柱穴は上端径34～39cm、下端径13～35cm、深さ11～46cm、柱穴間の距離は東西1.7m、南北2.0～2.4mを測る。柱穴の配置は桁行き2間、梁行きは1間であり、柱痕跡を持つ柱穴が2穴確認されている。これによって直径約15cmの柱が使用されていたと推測される。

検出面から浅い柱穴も見られるが、本来はもう少し深さがあったと思われる。恐らく流失して消滅してしまったものと考えられる。

この住居址は西側の梁行きが東側の梁行きに比べて広くっており、半面形は台形状を呈する。また遺物が出土しなかったため、時期を決定づけることができなかった。



第31图 SB-02实测图

SB-02 (第31図、図版7)

調査区の南側で検出されたもので、SB 01の南側に位置する。検出された平坦面の下段部分にあたり、SB-01と同様に溝や加工段によって区画するタイプではない。

柱穴は計9穴検出され、上端径は50~92cm、下端径18~78cm、深さは15~50cm、柱穴間の距離は東西、2.2~2.6m、南北2.5mを測る。柱穴の配置は桁行き2間、梁行き4間であり、柱痕跡が検出された柱穴が4穴ある。それによると15~25cmの柱が使用されていたと推測される。

検出面から浅い柱穴も見られるが、本来はもう少し深さがあったと思われる、恐らく上面が流失して消失してしまったと考えられる。

遺物は堆積土中から10数片の摩滅した須恵器の甕の断片が出土したが、住居址の床面や柱穴から出土しなかったため、時期を決定づけることはできなかった。

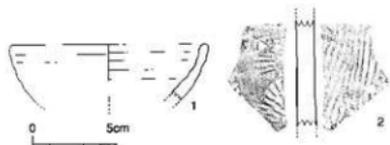
出土した遺物のうち、図化可能なものは第32図である。

1は須恵器の坏身の口縁部片で約1/3が残存する。

口径は推定で12.0cm、残存高は7.0cmを測る。器形は胴部の一部しかないため、詳細はわからないが、胴部がわずかに膨らみながら口縁部に向かってま

すぐに立ち上がる碗形と思われる。ロクロ成形で、胴部内外面に回転ナデを施す。

2は須恵器の甕片で、胴部の一部である。残存長は6.0cm、幅は1.0cm、を測る。胴部はタタキ成形である。



第32図 出土遺物実測図

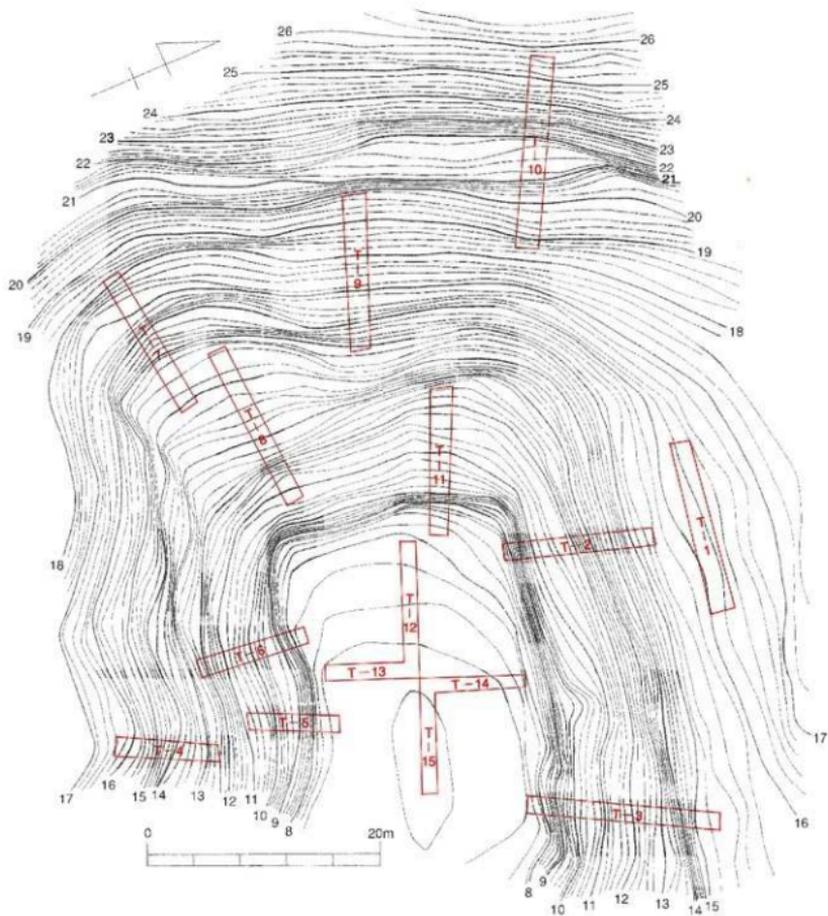
この付近は調査前竹林であったが、昭和40年代までは畑地として耕作されていたらしく、その際に遺構面に伴う遺物はすべて取り除かれてしまった可能性がある。そのため出土遺物が少なかったと考えられる。またSB-02の一部で柱穴が発見できなかったことや、遺存する柱穴が浅いなど遺構の遺存状態の悪さも、地山そのものが耕作時に致10cm程度削平されてしまった可能性が高い。

本遺跡の時期は遺構に伴う遺物が出土しなかったために限定はできないが、第32-1から推測すると、8世紀中頃から9世紀頃の遺跡ではないだろうか。

特徴として向かい側の丘陵にある久米遺跡が谷側に向かって住居址群を作っているのに対して、本遺跡は南向きの好適地にありながら同様に谷側に向かって住居跡を作っていることである。谷を挟んでほぼ同時期にしかも同じように谷に向かって存在した両遺跡は、何らかの関連があったと思われるが、詳細については不明である。

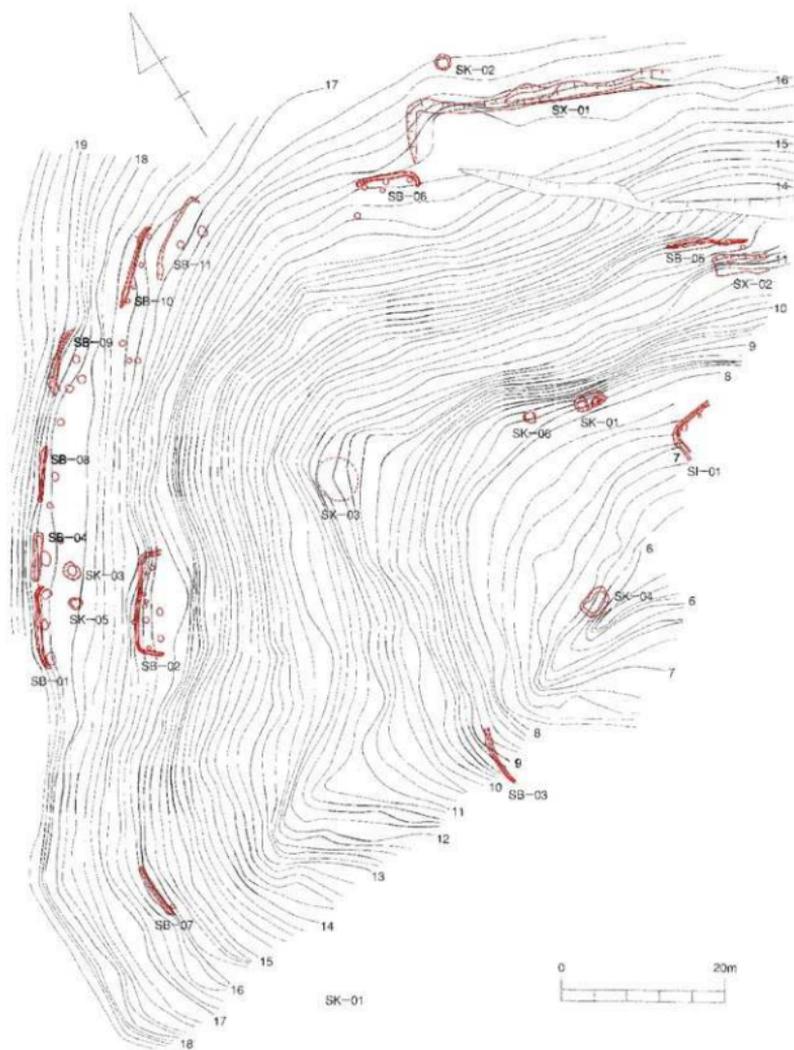
3 久米B遺跡

B遺跡は本遺跡群内の南側、東側に口を開いたようなすり鉢状地形の中に位置する。久米遺跡から谷を1つはさんで南側にあたる。北・西・南側が尾根状地形の囲まれ、標高は8～28m、谷部は南北27m、東西40mの平坦面をもつ。調査範囲は東西約60m、南北約60m、調査面積約3,600㎡を測る。

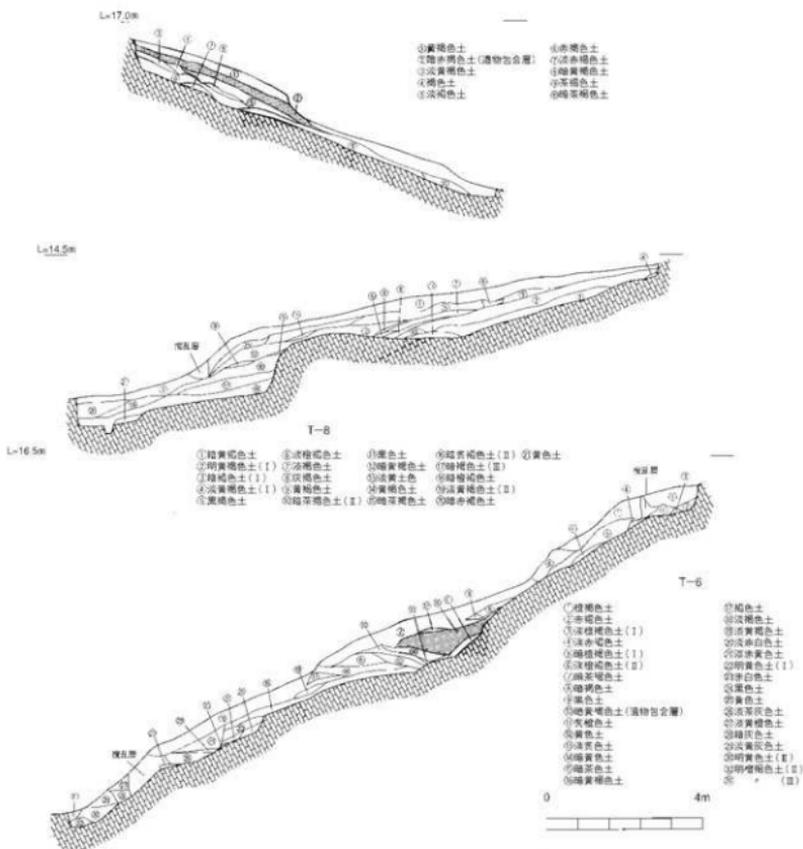


第33図 調査前地形測量図及びトレンチ設定図

当初、調査は谷部の平坦面を中心に斜面にトレンチを設定し（第33図）、遺構の有無、遺跡の範囲の確認から行われた。谷部の平坦面、特に北側斜面との境から大量の遺物が出土し、西側・北側斜面、北



第34図 調査成果図

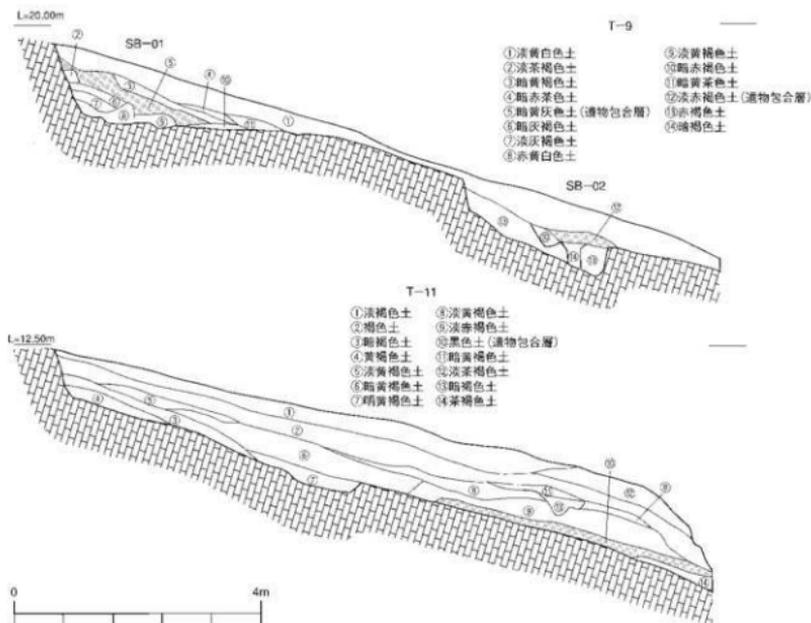


第35図 北側・南側斜面トレンチセクション図

側の斜面頂上平坦部から遺構が確認され、それに伴って調査区を拡大した。しかしながら南側斜面からは遺構は確認されず、南側斜面の全面調査は行わなかった。また土砂や水の流失防止用の環堤のため、平坦面の東側1/3が調査ができなくなってしまった。

調査の結果、西側斜面から掘立柱建物跡が9棟、土壇が2基が検出され、遺構は3つに分けられる。上段部分 (SB-01・04・08~11、SK-03・05)、中段部分 (SB-02・07)、下段部分 (SB-03) である。

北側では2つに分けられる。頂上平坦面から加工段状遺構1基 (SX-01) 土壇1基 (SK-02)、斜面から掘立柱建物跡が2棟 (SB-05~06) 加工段状遺構が1基 (SX-02) がそれぞれ検出された。



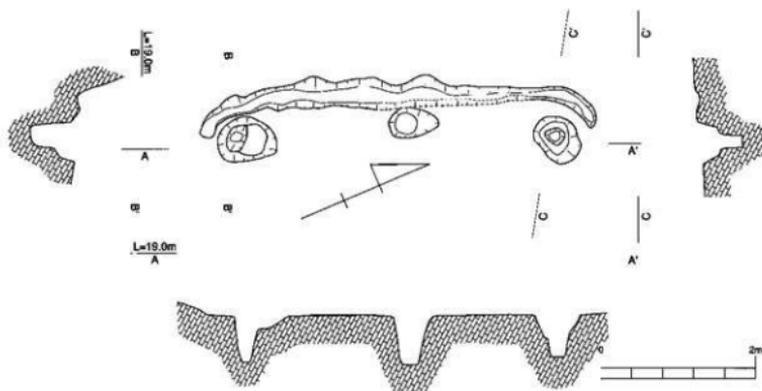
第36図 西側斜面トレンチセクション図

谷部平坦面からは堅穴住居跡が1棟 (SI-01) 土壇3基 (SK-01, 04, 06) が検出された (第34図)。また調査区の南側には自然流路の痕跡も見られた。

全体的に遺存状態が悪く、建物跡自体が完全な形で検出されずに、特に谷側の柱穴が検出されなかった。これはB遺跡の地盤が非常にもろく、所々に地滑りを起こしたような土層が見られた。例えば第35図 3のT-3の土層断面のように中腹部分で土層が逆転しており、また西側斜面の中腹部分においても同様の痕跡が見られた。

そのようなことから遺構の依存度は悪く、ほとんど半分以上消失してしまっている住居跡が多かった。これは土砂が流れ落ちたために遺構の半分が消失してしまったと考えられる。西側斜面中腹部分にある土器溜 (SX-03) は斜面の上から流れ込んだと思われる遺物が大量に出土している。また西側斜面の中腹部分や下腹部分に遺構が少ないのはこのような地崩れを起こしたため、遺構自体が消失してしまった可能性が考えられる。北側斜面も同様ではないかと思われる。

谷部の平坦面にもかなりの斜面中腹の土砂が流れ落ちて堆積しているのではないかと思われ、また大量の遺物も斜面やまた頂上平坦面から流れ落ちてきた可能性が考えられる。



第37図 SB-01実測図

SB-01 (第37図、図版9)

西側斜面から検出されたもので、上段部分の遺構のうち、最南端に位置する。住居址は加工段によって平坦面を作り溝によって区画するタイプである。溝の平面形は住居址を囲むように逆コの字形を呈し、規模は長さ5.4m、上端幅41cm、下端幅21cm、深さ7cmを測る。

柱穴は計3つ検出され、その配置は桁行き2間、梁行きは消失してしまったのか柱穴が検出できなかった。柱穴間の距離は1.9~2.1m、柱穴は上端径57~77cm、下端径15~28cm、深さ58~66cmを測る。また柱痕跡と思われる痕跡も検出され、直径約25cmの柱が使用されていたと思われる。

出土遺物から奈良時代から平安時代初めの住居址と思われる。

第38図はSB-01で出土した主な遺物である。

1は床面直上から出土した須恵器の坏蓋で、一部が欠損しているもののほぼ完全な形を残している。口径は13.4cm、天頂部径は7.5cm、器高は3.4cmを測る。ロクロ成形(右)で、裏側には粘土の巻き上げた痕跡が明瞭に残る。天頂部は回転糸切りによって切り離された後、擬宝珠形つまみがつけられている。肩部はヘラケズリによって形が整えられ、胴部の内外面には回転ナデが施されている。かえりの部分は後で貼り付けられた後つまみ出されたものである。

2は第3層から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部の一部にかけて約1/3が残存する。口径・底径いずれも推定で10.8cm、8.0cm、器高は5.1cmを測る。器形は胴部がわずかに膨らみながら立ち上がる碗形で、口縁部はわずかに外反する。ロクロ成形で、底部は摩滅しているためか痕跡が残っていないが、恐らく回転糸切りによって切り離されていると思われる。胴部内外面は回転ナデを施している。焼成は不良で柔らかく、色調も赤褐色を呈する。

3は第3層から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部の一部が約1/3が残存する。口径・底径いずれも推定で15.2cm、7.0cm、器高は3.0cmを測る。器形は底部から口縁部に向かって外側に開く皿形

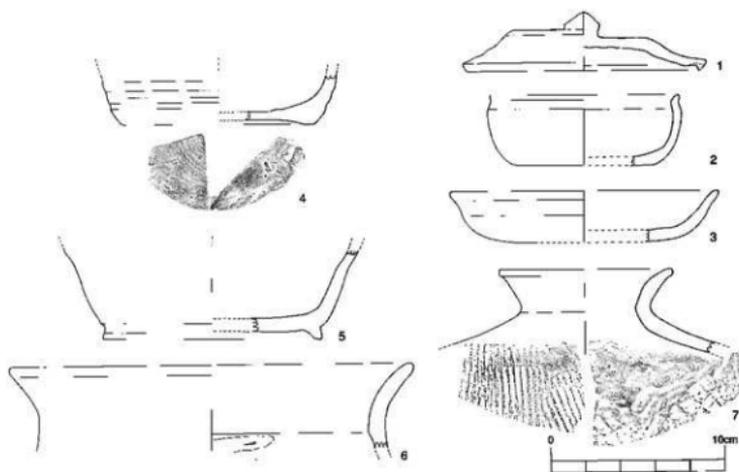
である。底部の切り離しは残存部分が少ないため不明である。ロクロ成形で、胴部の内外面には回転ナデを施す。

4は床面直上から出土した須恵器の坏身片で、底部の一部から胴部の一部にかけて約1/2が残存する。底径は推定で11cm、残存高は3.0cmを測る。器形は胴部の一部しかないため詳細はわからないが、恐らく口縁部に向かってまっすぐに立ち上がる碗形と思われる。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、胴部には回転ナデが施されている。

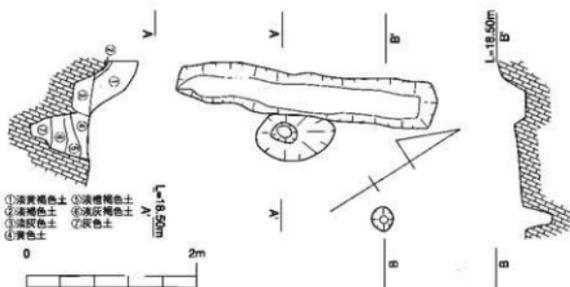
5は第3層から出土した須恵器の坏身片で、底部から胴部にかけて約1/2が残存する。底径は推定で12.6cm、残存高は5.2cmを測る。器形は胴部が欠損しているため詳細はわからないが、恐らく口縁部に向かってわずかに膨らみながら立ち上がる碗形と思われる。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、高台を貼り付けた後ナデによって器面調整が行われている。胴部の内外面には回転ナデが施されている。焼成が不良のため色調は赤褐色を呈し、柔らかい。そのため器面調整が摩擦しているため明確には残っていない。

6は床面直上から出土した土師器の甕もしくは甔の口縁部片で、口縁部が約1/6程度残存する。口径は推定で26.6cm、残存高は5.2cmを測る。口縁部の内面には回転ナデを施しているが、外面は摩擦しているため器面調整は不明である。胴部の内面はヘラケズリによって調整されているが、外面は摩擦しているため不明であるが、ハケ目が施されていたと思われる。焼成は良好で硬い。ススなどの附着物は見られない。

7は床面直上から出土した須恵器の甕片で、口縁部から胴部にかけての一部が約1/4が残存する。口径は推定で9.6cm、残存高は4.9cmを測る。口縁部内外面には回転ナデ、胴部はタタキ成形である。



第38図 SB-01出土遺物実測図



第39図 SB-04実測図

SB-04 (第38図、図版11)

西側斜面の上段部分で検出されたもので、SB-01の北側に位置する。これもSB-01と同じく、住居址は加工段によって平坦面を作り溝によって区画するタイプである。溝の平面形はほぼ直線形を呈し、規模は長さ3.2m、上端幅41cm、下端幅21cm、深さ4cmを測る。

柱穴らしきピットは1つ検出され、溝の上端とピットの上端が接するように作られている。その他の溝に沿って柱穴が検出されなかったため、桁行きや梁行きは不明である。ピットの平面形は楕円形を呈し、規模は長径93cm、短径18cm、深さ66cmを測る。また柱痕跡と思われる痕跡も検出され、そのことから推測して、直径約30cmの柱が使用されていたと思われる。

もう一つのピットが先のピットの約3m東側から検出された。平面形はほぼ円形を呈し、規模は上端径29cm、下端径9cm、深さは28cmを測る。しかしこのピットが住居址の柱穴であるかどうかは不明である。

SB-04はSB-01の真北に当たり、検出された柱穴もSB-01の柱穴とほぼ直線的に並ぶ。また柱穴間の距離もほぼ等間隔を測る。このことからSB-01と何らかの関連があるのではないかとと思われる。

出土遺物から奈良時代から平安時代初め頃の住居址を考える。

SB-04から出土した主な遺物は第40図である。

1は第3層から出土した須恵器の坏身片で、底部から胴部の一部が約1/2残存する。底径は8.6cm、残存高は1.5cmを測る。器形は胴部の大部分が欠損しているため詳細は不明だが、恐らく口縁部に向かってわずかに膨らみながら立ち上がる碗形と思われる。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離された後で高台が貼り付けられている。高台を貼り付けられた後ナデによって器面調整を行っている。底部内面は多方向ナデ、胴部の内外面には回転ナデを施している。

2は床面直上から出土した須恵器の坏身片で、底部から胴部の一部が約1/2残存する。底径は9.0cm、残存高は2.4cmを測る。器形は胴部の大部分が欠損しているため詳細は不明だが、恐らく口縁部に向かって外側に開きながら立ち上がる皿形と思われる。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離された後で高台が貼り付けられている。高台を貼り付けられた後ナデによって器面調整を行っている。底部内面は

多方向ナデ、胴部の内外面は回転ナデを施している。

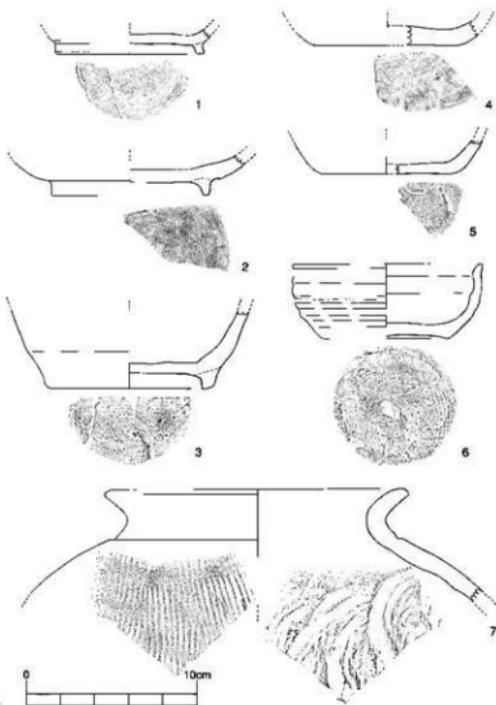
3は第3層から出土した須恵器の坏身片で、底部から胴部の一部が約1/2残存する。底径は9.2cm、残存高は4.6cmを測る。器形は胴部の大部分が欠損しているため詳細は不明だが、恐らく口縁部に向かってわずかに膨らみながら立ち上がる碗形と思われる。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離された後で高台が貼り付けられている。高台を貼り付けられた後ナデによって器面調整を行っている。底部内面は多方向ナデ、胴部の内外面には回転ナデを施している。

4は床面直上から出土した須恵器の坏身片で、底部の一部が約1/5残存する。底径は推定で8.5cm、残存高は1.5cmを測る。器形は胴部が欠損しているため詳細は不明である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部内面は多方向ナデ、胴部の内外面には回転ナデを施している。

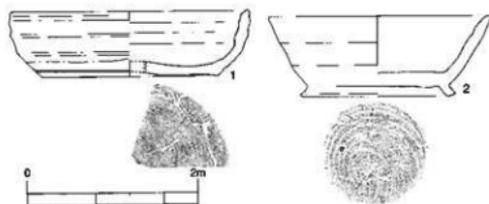
5は床面直上から出土した須恵器の坏身片で、底部から胴部の一部が約1/3残存する。底径は推定で7.8cm、残存高は2.0cmを測る。器形は胴部の大部分が欠損しているため詳細は不明だが、恐らく口縁部に向かってわずかに膨らみながら立ち上がる碗形と思われる。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部内面は多方向ナデ、胴部の内外面には回転ナデを施している。

6は床面直上から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて約1/2が残存する。口径・底径はいずれも推定で11.0cm、7.2cm、器高は4.4cmを測る。器形は口縁部に向かってわずかに膨らみながら立ち上がる碗形で、口縁部がわずかに外反する。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部内面は多方向ナデ、胴部の内外面には回転ナデを施している。

7は床面直上から出土した須恵器の壺片で、口縁部から胴部にかけての一部が約1/6が残存する。口径は推定で17.0cm、残存高は5.9cmを測る。口縁部内外面には回転ナデが施され、頸部はタタキ成形のあとナデ調整が施されている。胴部はタタキ成形である。



第40図 SB-04出土遺物実測図



第41図 SB-01・04周辺出土遺物実測図

第40図はSB-01とSB-04との間から出土した遺物である。どちらに帰属するかは不明である。

1は第2～3層から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけてが約2/3残存する。口径・底径はいずれも推定で13.8cm・10.9cm、器高は3.9cmを測る。器形は口縁部に向

かってわずかに膨らみながら立ち上がる碗形を呈する。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部内面は多方向ナデ、胴部の内外面には回転ナデを施している。

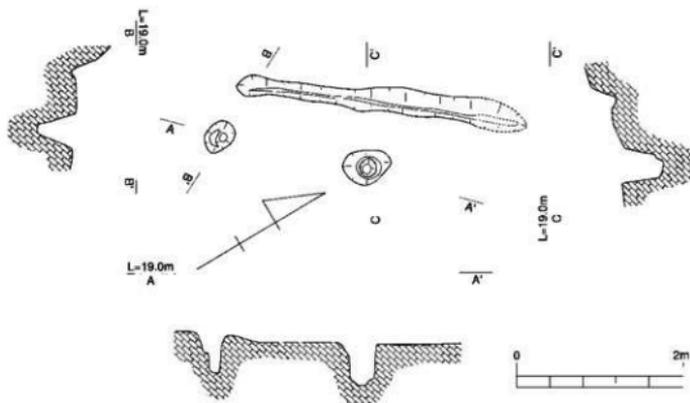
2は須恵器の坏身片で、底部から胴部にかけて約1/2残存する。口径は推定で13cm、底径は10.4cm、器高は4.75cmを測る。器形は口縁部に向かって外側にまっすぐに立ち上がる碗形である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離された後で高台が貼り付けられ、その後でナデによって器面調整を行っている。底部内面は多方向ナデ、胴部の内外面には回転ナデを施している。

両方とも奈良時代から平安時代初め頃の遺物と思われる。

SB-08 (第43図、図版11)

西側斜面の上段部分で検出されたもので、SB-04の北側に位置する。これも同じく住居址は加工段によって平坦面を作り溝によって区画するタイプである。溝の平面形はほぼ直線形を呈し、規模は長さ2.9m以上、上端幅30cm、下端幅5cm、深さ3.7cmを測る。

柱穴は2つ、溝と平行するように検出された。柱穴の配置は桁行きが溝の長さから考えて1間以上あると考えられるが、後は検出できなかった。梁行きも柱穴が検出できなかったため不明である。柱



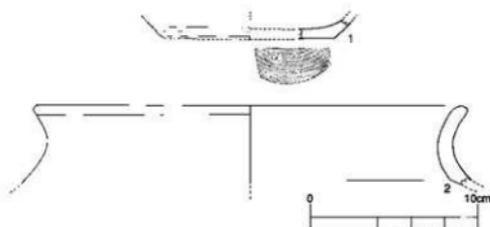
第42図 SB-08実測図

穴間の距離は約1.8m、柱穴は上端径41～56cm、下端径10～12cm、深さ52～64cmを測る。また柱痕跡と思われる痕跡も検出され、そのことから推測して、直径約10cmの柱が使用されていたと思われる。SB-01・04とは住居址の柱穴の軸がやや方向は異なる。

出土遺物から奈良時代以降の住居址と考えられる。

SB-08から出土した主な遺物は第43図である。

1は須恵器の底部片で、約1/4が残存する。10.0cm、残存高は1.1cmを測る。器形は胴部の大部分が欠損しているため詳細は不明だが、恐らく口縁部に向かって外側に開きながら立ち上がる皿形と思われる。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部内面は多方向ナデ、胴部の内外面には回転ナデを施している。

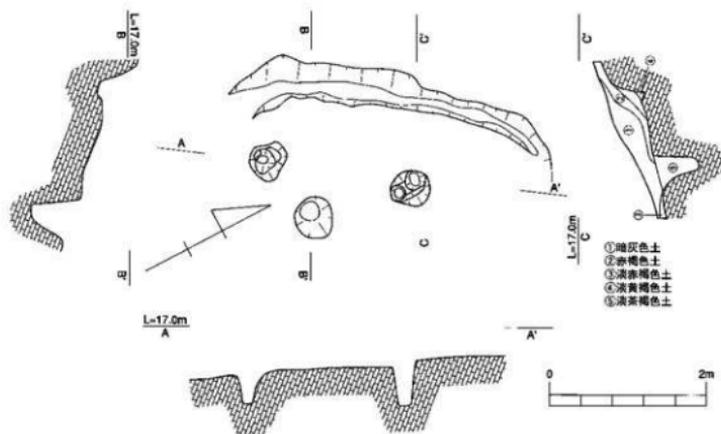


第43図 SB-08出土遺物実測図

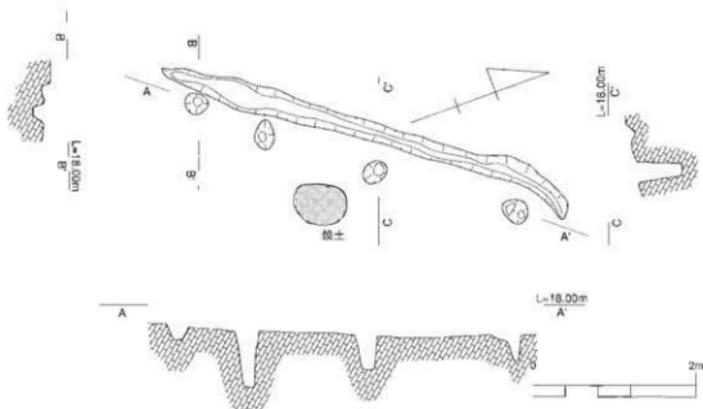
2は土師器の甕の口縁部片で、口縁部が約1/6程度残存する。口径は推定で25.2cm、残存高は5.2cmを測る。全体的に摩滅しているため器面調整は不明だが、口縁部には回転ナデを、胴部の内面はヘラケズリによって調整されていると思われる。

SB-09 (第43図、図版12)

西側斜面上の段部分で検出されたもので、SB-08の北側に位置する。これも同じく住居址は加工段



第44図 SB-09実測図



第45図 SB-10実測図

によって平坦面を作り溝によって区画するタイプである。溝の平面形は住居址を囲むように弧状形を呈し、規模は長さ4.1m、上端幅61cm、下端幅31cm、深さ5cmを測る。

柱穴は2つ、溝と平行するように検出された。柱穴の配置は桁行きが溝の長さから考えて1間以上あると考えられるが、後は検出できなかった。梁行きも柱穴が検出できなかったため不明である。柱穴の平面形は円形を呈し、柱穴間の距離は1.9m、柱穴は上端径48～55cm、下端径13～24cm、深さ37～52cmを測る。

もう一つのピットがほぼ柱穴との中間、方向的には約50cm東側にずれて検出された。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径45cm、深さは40cmを測る。しかしこのピットが住居址に伴う柱穴であるかどうかは不明である。

遺物は覆土中や床面から数点出上したが、図化できるものはなかったため時期は不明である。

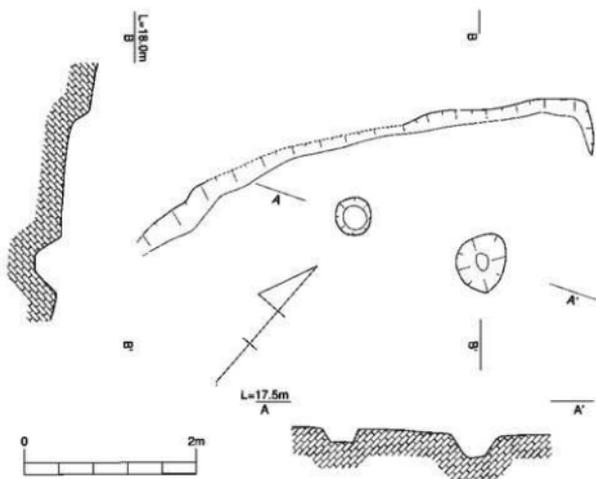
SB-10 (第45図、図版10)

西側斜面の上段部分で検出されたもので、SB-09の北西側に位置する。これは加工段によって平坦面を作り溝によって区画するタイプだが、SB-01や04などのように高い壁は持っていない。もともと無かったのか消失してしまったかは不明である。溝の平面形はほぼ直線形を呈し、規模は長さ5.2m、上端幅38cm、下端幅31cm、深さ5cmを測る。

柱穴は4つ、溝と平行するように検出された。柱穴の配置は桁行きが3間、梁行きは柱穴が検出できなかったため不明である。柱穴の平面形は円形を呈し、柱穴間の距離は一定ではなく0.9～1.7mと北側に行くほど距離が長くなる。柱穴は上端径28～30cm、下端径10～16cm、深さ12～64cmを測る。

住居址の中央から焼土が検出されたが、これが住居址に伴うものかどうかは不明である。

また遺物は覆土中から出上したものの図化ができるものはなかったため時期は不明である。



第46図 SB-11実測図

SB-11 (第46図、図版12)

西側斜面の上段部分で検出されたもので、SB-10の北東側に位置し、SB-10とは重複する。これも加工段によって平坦面を作るが、溝によって区画するタイプでなく、加工段のみ区画するタイプである。加工段の平面形は一部が消失しているため詳細はわからないが、恐らく住居址を囲むように逆コの字形を呈していると思われる。規模は東西長5.3m以上、南北長0.63m、高低差24.5cmを測る。

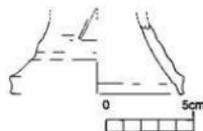
柱穴はらしきピットは2つ検出されたが、加工段とは平行ではなかった。もしこれが柱穴と仮定すれば、柱穴の配置は桁行きが加工段の規模から考えて1間以上あると考えられる。桁行きは柱穴が検出できなかったため不明である。柱穴の平面形は円形を呈し、柱穴間の距離は約1.5m、柱穴は上端径45~65cm、下端径21~29cm、深さ14~24cmを測る。本来はもう少し深さがあったと思われるが、上面が削平されてしまったのか検出面からはかなり浅かった。

床面から遺物が出土しなかったため時期は不明である。

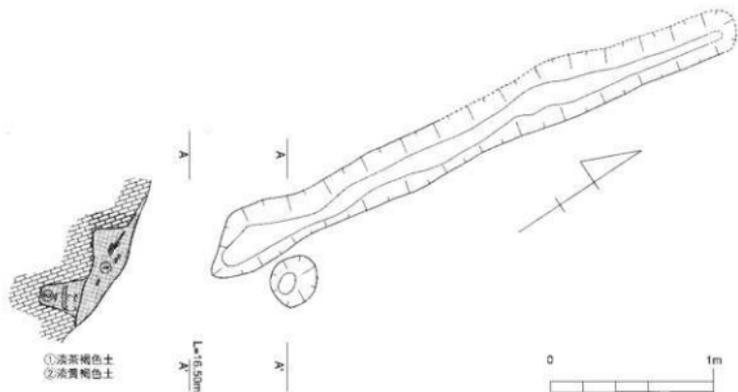
SB-11から出土した主な遺物は第47図である。

覆土層から出土した須恵器の高坏の脚部片で約1/2が残存する。底径は10cm、残存高は4.2cmを測る。ロクロ成形で脚部の内外面は回転ナデを施す。脚部にはすかしに似せた切り込みが1条見られる。反対方向は欠損しているためわからないが、恐らく2方向の一段すかしと思われる。

大谷編年で出雲6期頃のものと思われる。



第47図 SB-11 出土遺物実測図



第48図 SB-07実測図

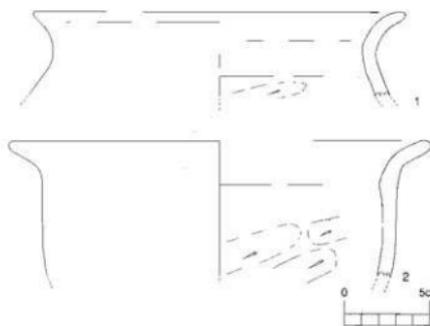
SB-07 (第48図、図版10)

西側斜面の中段部分で検出されたもので、中段部分で検出された遺構のうち、最南端に位置する。これは加工段によって平坦面を作り溝によって区画するタイプだが、SB-01や04などのように高い壁は持っていない。もともと無かったのか消失してしまったかは不明である。溝の平面形はほぼ直線形を呈し、規模は長さ3.4m以上、上端幅38cm、下端幅17cm、深さ2.7cmを測る。

柱穴は遺構の南側から1つ検出された。柱穴の配置はこれ以外の柱穴が検出できなかったため不明である。柱穴の平面形は円形を呈し、柱穴は上端径31cm、下端径13cm、深さ23cmを測る。

遺物は溝の南端、溝と柱穴の覆土中から大量の土師器の破片が出上したが、時期を限定できる遺物は出上らなかった。

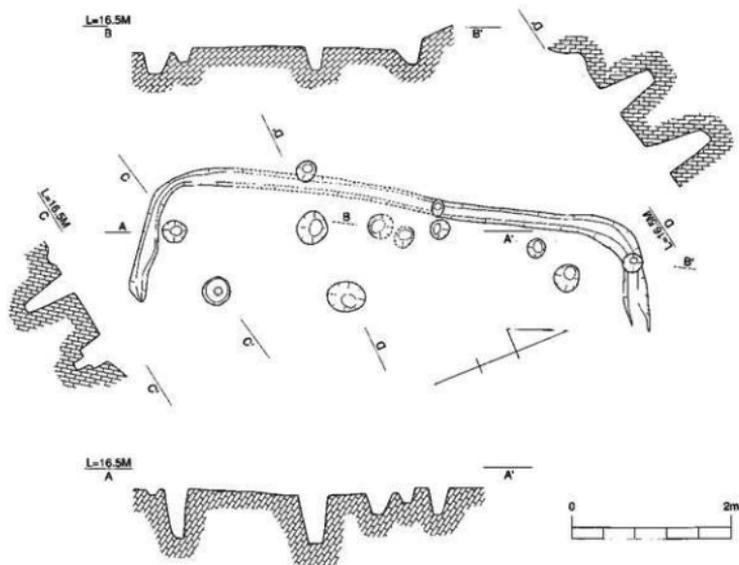
SB-07から出土した主な遺物は第49図である。



第49図 SB-07出土遺物実測図

1は覆土層から出土した土師器の甕類の口縁部片で約1/3が残存する。口径は21.6cm、残存高は5.0cmを測る。胴部内面はケズリが見られるが、表面は風化のためか器面調整が不明である。

2は覆土層から出土した土師器の甕類の口縁部片で約1/3が残存する。口径は24.8cm、残存高は8.0cmを測る。胴部内面はケズリが見られるが、表面は風化のためか器面調整が不明である。



第50図 SB-02実測図

SB-02 (第48図、図版11)

西側斜面の中段部分で検出されたもので、SB-07の北側約30m、SB-01の真下に位置する。これは加工段によって平坦面を作り溝によって区画するタイプである。溝の平面形は住居址を囲むように逆コの字形を呈し、規模は長さ6.5m、上端幅32cm、下端幅16cm、深さ4.6cmを測る。

柱穴はらしきピットは12穴検出された。それぞれの組合せは不明だが、何度か建て替えられた可能性が考えられる。しかしながら住居址の溝に平行に並んで検出されたピットは少なく、また溝の中にもピットが検出された。

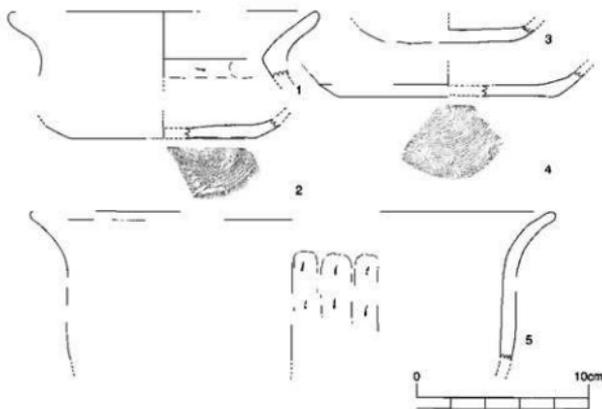
何度かの建て直しが考えられるが、およそ出土遺物から奈良時代以降によるものと思われる。

SB-02から出土した主な遺物は第51図である。

1は柱穴の覆土中から出土した土師器の甕類の口縁部片で約1/3が残存する。口径は推定で17.6cm、残存高は3.9cmを測る。口縁部外面はナデを、胴部内面はケズリを施している。

2は床面直上から出土した須恵器の坏身片で、底部片が約1/2残存し、胴部もわずかに残っている。底径は推定で10.5cm、残存高は1.2cmを測る。器形は胴部が欠損しているため詳細は不明だが、口縁部に向かって外側に広がる皿形と思われる。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部内面は多方向ナデ、胴部の内外面には回転ナデを施している。

3は床面直上から出土した須恵器の坏身片で、底部片が約1/2残存し、胴部もわずかに残っている。

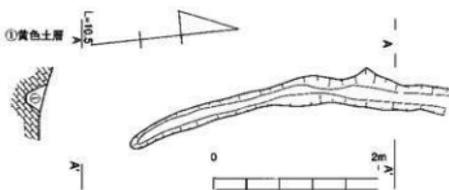


第51図 SB-02出土遺物実測図

底径は推定で7.4cm、残存高は0.9cmを測る。器形は胴部が欠損しているため詳細は不明だが、口縁部に向かって外側に広がる皿形と思われる。ロクロ成形であるが、焼成不良のため柔らかく赤褐色を呈する。そのため全体的に摩耗しており、器面調整など詳細については不明である。

4は覆土層から出土した須恵器の坏身片で、底部片が約1/2残存し、胴部もわずかに残っている。底径は推定で10.2cm、残存高は1.5cmを測る。器形は胴部が欠損しているため詳細は不明だが、口縁部に向かって外側に広がる皿形と思われる。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部内面は多方向ナデ、胴部の内外面には回転ナデを施している。

5は覆土中から出土した土師器の甑の口縁部片で約1/3が残存する。口径は推定で30.0cm、残存高は8.7cmを測る。口縁部外面はナデを、胴部内面はケズリを施している。また口縁部にススのような附着物が見られる。



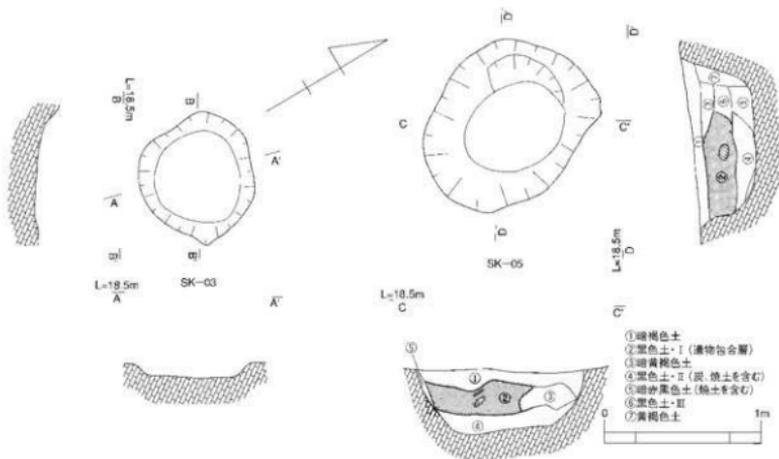
第52図 SB-03実測図

SB-03 (第52図、図版9)

西側斜面の下端部分で検出されたもので、最南端に位置する。これは加工段によって平坦面を作り溝によって区画するタイプだが、SB-01や04などのように高い壁は持っていない。もともと無かったのか消失してしまったかは不明である。また

遺構の北側は木の根によるものか攪乱を受け折り、溝が消失してしまっている。溝の平面形は現存ではほぼ直線形を呈し、規模は長さ3.8m以上、上端幅48cm、下端幅17cm、深さ11cmを測る。

柱穴は全く検出されず、遺物も出土しなかったため時期は不明である。



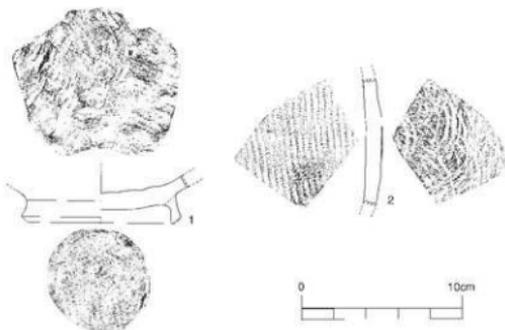
第53図 SK-03、05実測図

SK-03・5 (第53図、図版10)

西側斜面上段部分で検出された焼土塊で、SB-01の南側に位置し、北側がSK-03、南側がSK-05である。

SK-03の平面形は不整形円で、断面径は逆台形を呈する。規模は上端の直径が90~113cm、下端の直径が50~68cm、深さ45cmを測る。地山から掘り込まれたもので、上端の縁辺が壊れており、覆土には焼土や炭が混じった層が見られた。覆土層から須恵器や土師器の破片が出土した。(第54図)

SK-05はSK-03から南側に約2m離れている。平面形はほぼ円形、断面径は逆台形を呈する。規模は上端の直径が直径80~90cm、下端の直径が54~58cm、深さ10cmを測る。上端の縁辺や覆土中から焼土が検出されたが、遺物は出土しなかった。



第54図 SK-03出土遺物実測図

SK-03から出土した主な遺物は第54図である。

1は覆土第2層から出土した須恵器の坏身の底部片で約1/3が残存し、胴部の一部も残る。底径は推定で8.8cm、残存高は3.0cmを測る。本来は壺か壺として作られたのを高台を後で貼り付けて再利用したと思われる。そのため底部のない外面にタタキの痕跡が残り、高台を貼り付けたところだけ回転ナデを施している。

2は覆土第2層から出土した須恵器の甕の胴部片である。残存長は8.0cm、厚さは1.0cmを測る。内外面にタタキの痕跡が残る。

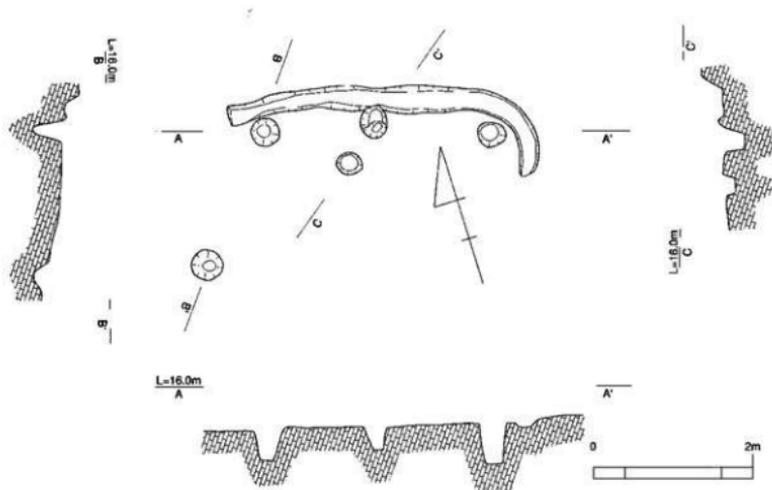
これらの遺物はSK-03の使用当時のものではなく埋没する際に流れ込んだものと思われる。したがってこれらの遺物はSB-01・04にあったものと推測される。

SB-06 (第55図、図版26)

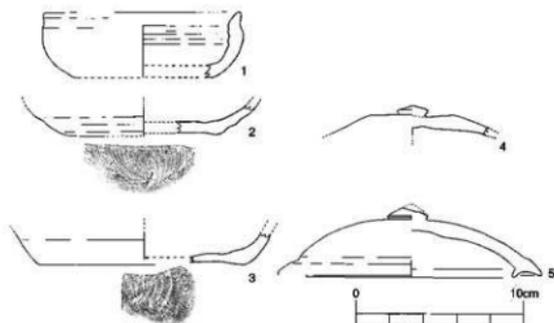
北側頂上平坦面から検出された住居址である。加工段によって平坦面を作り溝によって区画するタイプだが、SB-01や04のように高い壁は持っていない。もともと無かったのが消失してしまったかは不明である。溝の平面形はほぼ直線形で、東側でカーブするような形をしている。規模は長さ3.9m、上端幅35cm、下端幅31cm、深さ7cmを測る。

柱穴は計5穴検出されたが、溝に沿って検出されたのは3穴である。柱穴の配置は桁行きが2間、梁行きは検出できなかったため不明である。他の2穴はこの住居址に関連したものかどうかは不明である。柱穴の平面形は円形を呈し、柱穴の上端径35~42cm、下端径16~20cm、深さ25~52cmを測る。

遺構の時期は床面から出土しなかったため限定はできなかった。



第55図 SB-06実測図



第56図 SB-06出土遺物実測図

SB-06から出土した主な遺物は第56図である。

1は覆上層から出土した須恵器の坏身片で、口縁部片が約1/3残存し、底部もわずかに残っている。口径・底径はいずれも推定で11.7cm・8.4cm、残存高は1.2cmを測る。器形は口縁部に向かってわずかに膨らみながら立ち上がる碗形である。ロクロ成形で、底部は一部しかないため詳細はわからないが、回転糸切りによって切り離されていると思われ、胴部から口縁部の内外面は回転ナデを施す。

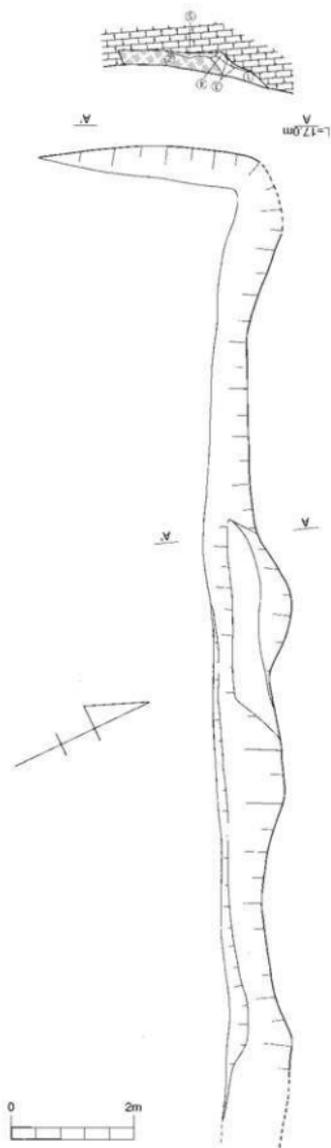
2は覆上層から出土した須恵器の坏身片で、底部片が約1/3残存し、胴部も一部残っている。底径は推定で9.0cm、残存高は1.7cmを測る。器形は胴部が一部しかないため詳細は不明だが、口縁部に向かって外に広がる皿形である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、胴部の内外面は回転ナデを施す。

3は溝の覆土層から出土した須恵器の坏身片で、底部片が約1/3残存し、胴部も一部残っている。底径は推定で12.2cm、残存高は2.0cmを測る。器形は胴部が一部しかないため詳細は不明だが、口縁部に向かってわずかに膨らみながら立ち上がる碗形である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、胴部の内外面は回転ナデを施す。

4は覆上層から出土した須恵器の坏蓋片で、天頂部が約1/4残存する。天頂部径は推定で5.0cm、残存高は1.8cmを測る。ロクロ成形で、天頂部の肩の部分にヘラケズリの痕跡が残り、天頂部の内面は多方向ナデを施す。つまみは擬宝形形で、後で貼り付けられたものである。

5は覆土層から出土した須恵器の坏蓋で、つまみの一部が欠損しているものの、ほぼ完形である。口径は12.2cm、受け部径15.4cm、残存高は4.1cmを測る。ロクロ成形で、外面はヘラケズリの後回転ナデを施し、内面は天頂部付近に多方向ナデ、胴部以下は回転ナデを施す。つまみは擬宝珠形と思われる、後で貼り付けられたものである。

1～3は柳浦編年の3～4期、5は出雲5～6期のものと思われる。



第57図 SX-01 (加工段) 実測図

SX-01 (第57図、図版13)

北側頂上部平坦面から検出された加工段である。平面形は逆L字形で、規模は長さは東西約14m、南北約4m、加工段の高低差は最大で59cmを測る。斜面を削って平坦面を作り、その規模は東西長15.1m以上、南北長3.6mを測る。

側溝や柱穴などその他の遺構が検出されず、遺物も出土しなかったため用途など詳細については不明である。

SK-02 (第48図、図版13)

北側頂上部から検出された土壇(焼土壇)で、SX-01の北側に位置する。平面形は円形を、断面径は逆台形を呈し、規模は直径は95-100cm、深さは21cmを測る。床面や上端の縁辺が赤く焼けており、約5cmにわたって炭を含んだ層が堆積している。

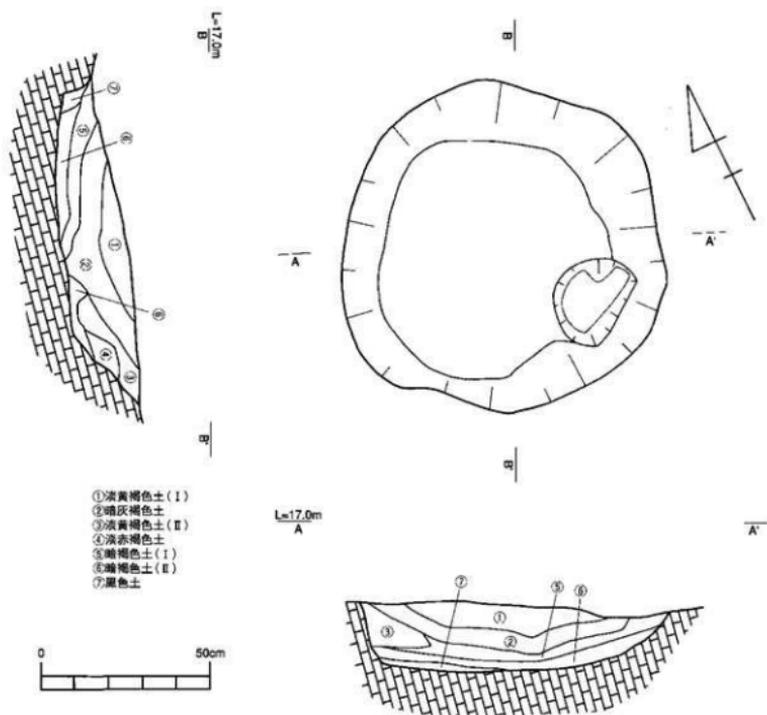
しかし遺物が出土しなかったため時期などの詳細については不明である。

SB-05 (第57図、図版14)

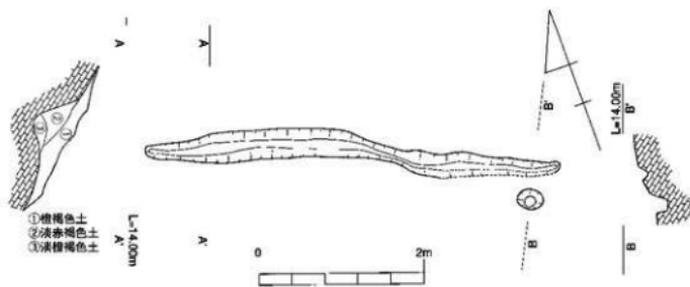
北側斜面の中段部分で検出された住居址で、北側斜面の中段部分で東端に位置する。これは加工段によって平坦面を作り溝で区画するタイプだが、SB-01や04などのように高い壁は持っていない。もともと無かったのか消失してしまったかは不明である。溝の平面形はほぼ直線形を呈し、規模は長さ4.9m、上端幅36cm、下端幅14cm、深さ6.6cmを測る。

柱穴は東端から1つ検出された。柱穴の配置は他に柱穴が検出できなかったため不明である。柱穴の平面形は円形を呈し、柱穴は上端径32cm、下端径14cm、深さ21cmを測る。

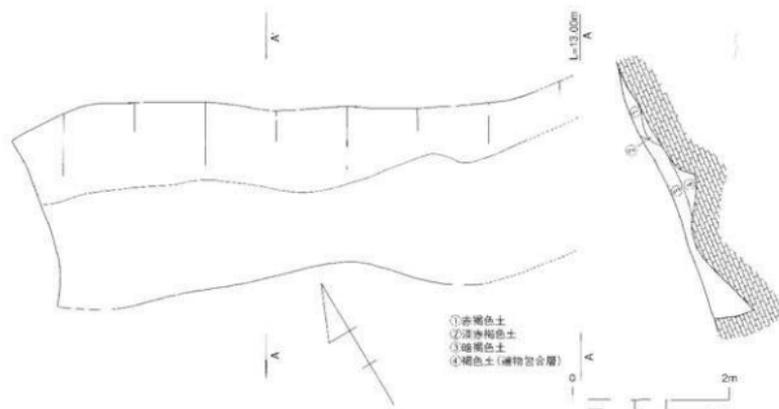
遺物は出土しなかったため時期については不明である。



第58图 SK-02实测图



第59图 SB-05实测图

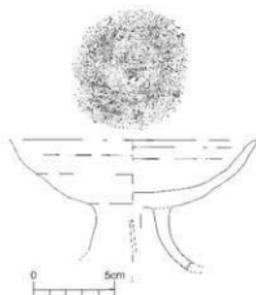


第60図 SX-02（加工段）実測図

SX-02（第58図、図版14）

北側斜向の中段部分で検出された加工段で、中段部分の東端、SB 05の下側に位置する。東側が攪乱を受けており現状をとどめていないため規模などの詳細は不明だが、平明計はほぼ直線形を呈し、現存で長さ8.7m以上、幅約2.2m、高低差は最大で92cmを測る。側溝や柱穴などその他の遺構は検出されなかったため、用途などは不明である。

遺物は覆土中から高坏が出土したが、床面から出土しなかったため時期は不明である。



第61図 SX-02出土遺物実測図

SX-02から出土した主な遺物は第61図である。

覆土層から出土した須恵器の高坏で、坏部から頸部にかけてが残存する。口径は15.0cm、残存高は8.0cmを測る。ロクロ成形で、坏部の底部内面に多方向ナデ、それ以外は回転ナデを施す。坏部内面の底部はヘラ記号“×”が見られ、すかしは2方向1段である。

大谷編年の出雲6期に相当すると思われる。

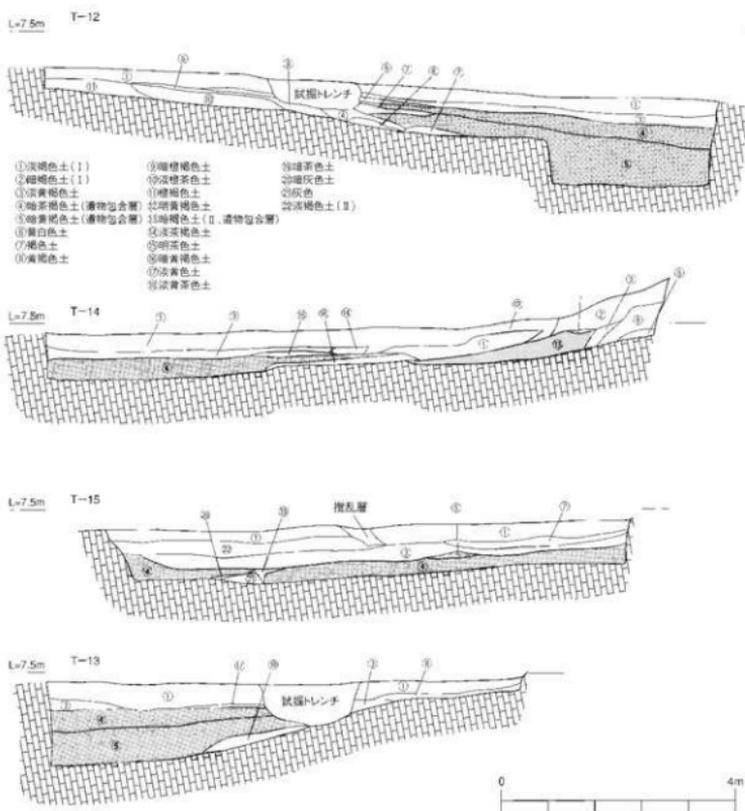
第62図は下平坦面のトレンチの土層断面図である。

ほとんどが自然堆積層と思われるが、斜面との境界は斜面から流れ込んだと考えられる層が見られ、その時にT-14の⑬暗褐色土から大量の遺物が出土した。

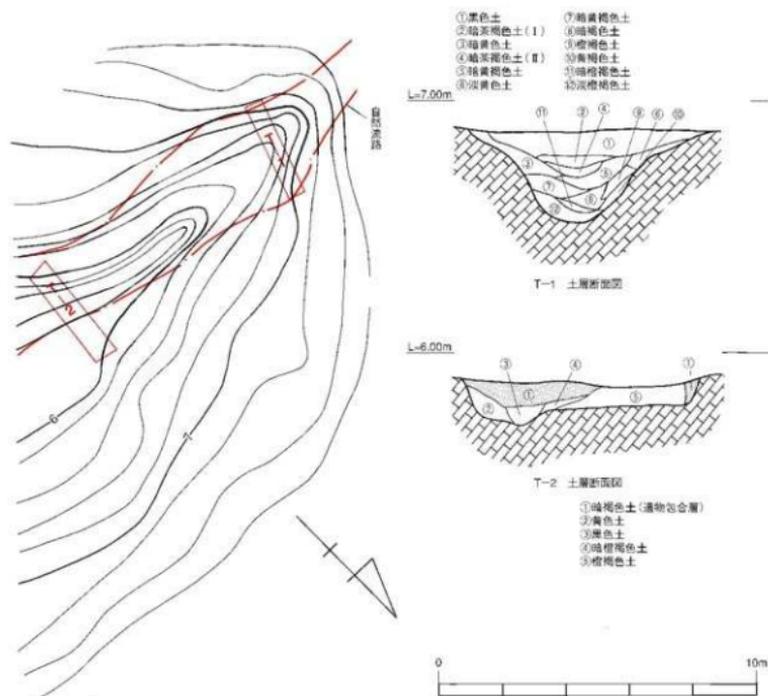
第63図は下平坦面に見られる自然流路で、西側斜面の南端が谷状になっており、水が流れたような痕跡が見られた。

自然流路から出土した主な遺物は第64図である。

1は黒色土中から出土した須恵器の壺の口縁部片で、胴部はわずかに残る。口径は6.7cm、残存高は8.7cmを測る。ロクロ成形で、口縁部は1条の凹線が見られ、内外面には回転ナデを施す。



第62図 谷部平坦面トレンチセクション図

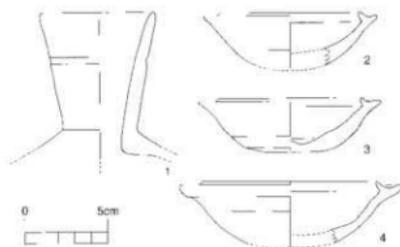


第63図 谷部平坦面実測図

2は黒色土中から出した須恵器の坏身片で、口縁部から胴部にかけて約1/3残存している。口径は推定で10.2cm、残存高は3.2cmを測る。

ロクロ成形で、底部は欠損しているため切り直し方法は不明だが、胴部はヘラケズリによって整形され、そのあと内外面には回転ナデを施している。

3は黒色土中から出した須恵器の坏身片で、ほぼ約1/2残存している。口径・底径はいずれも推定で11.0cm・3.0cm、器高は3.3cmを測る。ロクロ成形で、底部はヘラ切り・ヘラおこしで、胴部はヘラケズリによって整形され、胴部の上はその後回転ナデを施している。内面は底部に多



第64図 自然流路出土遺物実測図

方向ナデ、胴部に回転ナデを施している。

4は黒色土中から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から胴部のかけて約1/3残存している。口径は推定で10.2cm、残存高は3.2cmを測る。ロクロ成形で、底部は欠損しているため切り離し方法は不明だが、胴部はヘラケズリによって整形され、そのあと内外面には回転ナデを施している。

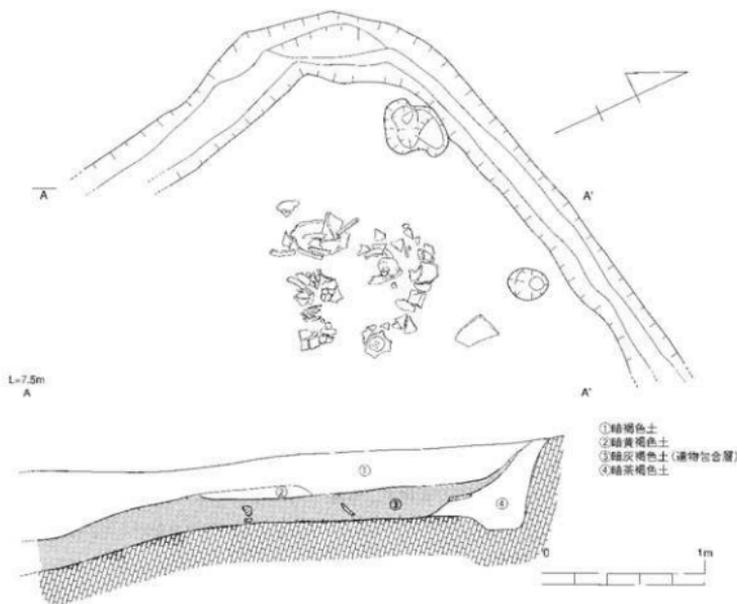
ここで出土した遺物、特に坏身は斜面の住居址から出土したものと比べて技法や時期など異なる。

SI-01 (第65図、図版16)

下平坦面の北側、斜面との境界付近で検出された竪穴住居址である。残念ながら災害防止のための堰堤のために東側半分が検出できなかった。

壁際に側溝を持つもので、平面形は恐らく方形、もしくは隅丸方形を呈する。規模は現存で南北2m以上、東西3m以上を測る。側溝は上端幅44cm、下端幅21cm、深さは5.2cmを測る。柱穴らしきピットが2穴検出されている。上端径25~43cm、下端径7~9cm、深さは31~62cm、柱穴間の距離は1.2mを測る。

遺構の時期は覆土層からしか遺物が出土していないため限定はできないが、出土遺物は出雲5~6期頃のものと思われる。



第65図 SI-01実測図

遺物は覆土第2層から大量の遺物が出土された。その主なものは第65図である。

1は覆土層から出土した土師器の甕類の口縁部片で約1/3が残存する。口径は推定で14.9cm、残存高は6.0cmを測る。口縁部外面はナデを、胴部内面はケズリを施す。

2は覆土層から出土した土師器の小壺で、ほぼ完形である。口径は9.1cm、器高は4.8cmを測り、器形は口縁部がわずかに外反し、底部は丸底である。手捏成形で、内外面には指頭圧痕が残るが、それ以外の調整痕は表面が風化のためか不明である。態度は非常に粗く、内外面とも火を受けたような痕跡は見あたらない。

3は覆土層から出土した須恵器の坏蓋で、ほぼ完形である。口径は8.4cm、底径は3.9cm、器高は3.7cmを測る。器形は口縁部がわずかに内湾する。ロクロ成形で、天頂部はヘラ切り・ヘラおこしによって切り離され、天頂部付近はヘラケズリ、胴部から口縁部にかけてはヘラケズリの後回転ナデを施す。

4は覆土層から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて約1/5が残存する。口径・底径はいずれも推定で12.0cm・6.0cm、残存高は3.1cmを測る。器形は口縁部がわずかに内湾する。ロクロ成形で、底部は欠損しているがヘラ切り・ヘラおこしによって切り離されていると思われ、底部付近はヘラケズリ、内面は多方向ナデ、胴部内外面は回転ナデを施す。

5は覆土層から出土した須恵器の坏身で、一部が欠損しているが全体の形はうかがえる。口径は12.4cm、底径は5.0cm、器高は3.4cmを測る。ロクロ成形で、底部はヘラ切りのよって切り離されて、底部付近はヘラケズリ、内面は多方向ナデ、胴部内外面は回転ナデを施す。

6は覆土中から出土した須恵器の高坏片で、脚部片である。底径は推定9.6cm、残存高は8.4cmを測る。内外面とも回転ナデを施している。すかしは2方向1段であり、片側は切り込みである。

7は覆土中から出土した須恵器の高坏で、一部が欠損しているものの、全体の形を伺い知ることができる。口縁部は16.3cm、底径は9.7cm、器高は10.2cmを測る。内外面とも回転ナデを施す。すかしは2方向1段であり、片側は切り込みである。

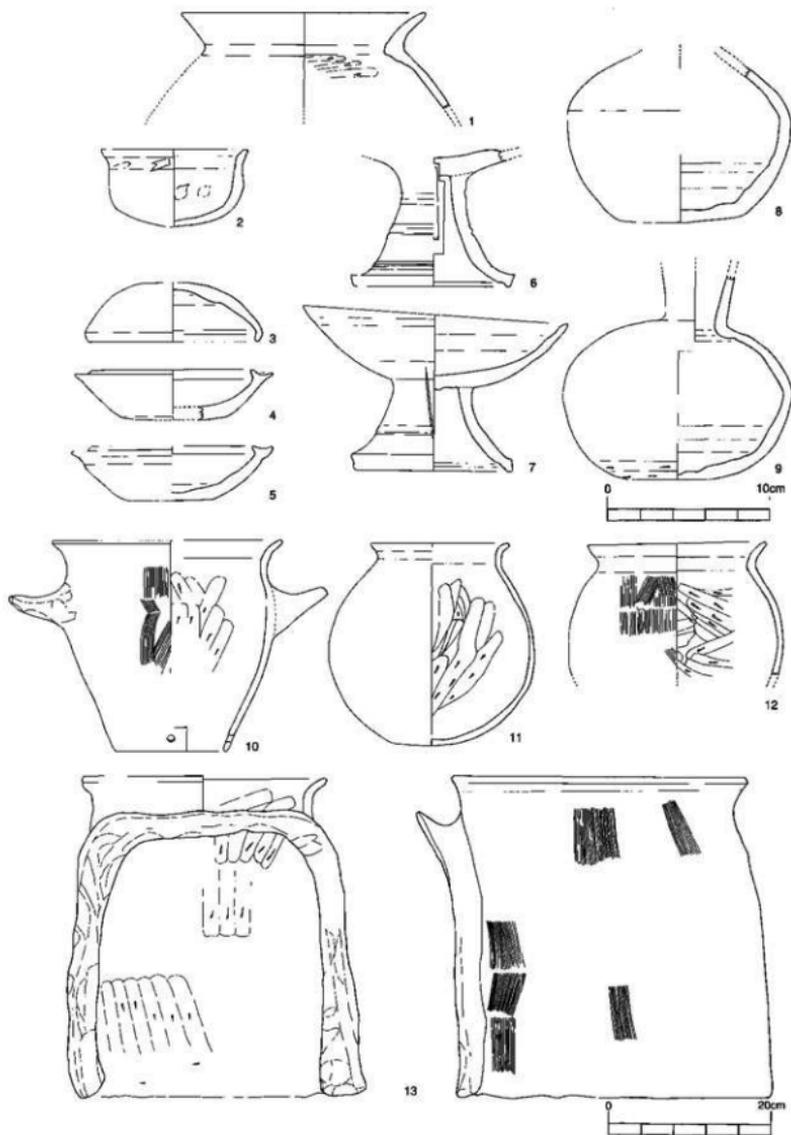
8は覆土層から出土した須恵器の壺で、口縁部が欠損している。底径は8.0cm、残存高は12.5cm、最大幅は11.7cmを測る。底部はヘラ切りによって切り離され、底部付近はヘラケズリが、胴部は回転ナデを施す。胴部は一部では自然釉が付着している。

9は覆土層から出土した須恵器の壺で、口縁部が欠損している。底径は4.0cm、残存高は12.8cm、最大幅は14.0cmを測る。底部はヘラ切りによって切り離され、底部付近はヘラケズリが、胴部は回転ナデを施す。

10は覆土層から出土した土師器の甗片で、底部が欠損しているものの全体の形はうかがえる。口径は28.0cm、底径は13.5cm、残存高は26.8cm、最大幅39.4cmを測る。口縁部がわずかに外反する器形で、外面はハケ目が、内面や把手部にはケズリを施す。外面の所々に焦げたような痕跡が残る。

11は覆土層から出土した土師器の甗で、一部が欠損しているが全体の形はうかがえる。口縁部は16.8cm、器高は25.3cm、最大幅は25.0cmを測る。器形は口縁部が外反し、底部は丸底である。外面は風化のため器面調整は不明だが、内面はケズリを施す。外面の所々に焦げたような痕跡が残る。

12は覆土層から出土した土師器の甗片で、底部が欠損している。口径は23.6cm、残存高は16.7cm、最



第66図 SI-01出土遺物実測図

大幅26.2cmを測る。口縁部が外反する器形で、外面はハケ目が、内面にはケズリを施す。外面の所々に焦げたような痕跡が残る。

13は覆土層から出土した土師器のカマドで、所々欠損しているものの全体の形はうかがえる。口径29.7cm、底径27.5cm、器高40.0cm、最大幅36.8cm、奥行きは44.0cmを測る。外面はハケ目が、内面や底の部分にはケズリを施す。内面の至るところに焦げたような痕跡が残る。

第67図はSI-01付近に設定したT-14から出土した主な遺物である。これらの遺物がSI-1と関連があるかは不明である。

1はT-14を拡張した際に出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて約1/3が残存する。口径は推定で10.9cm、器高は4.4cmを測る。ロクロ成形で、底部はヘラ切り・ヘラおこしによって切り離され、胴部外面はヘラケズリ、口縁部外面は回転ナデ、内面は底部に多方向ナデ、胴部は回転ナデを施す。

2はT-14を拡張した際に出土した須恵器の坏身で、完形である。口径は12.6cm、底径は5.5cm、器高は4.4cmを測る。ロクロ成形で、底部はヘラ切り・ヘラおこしによって切り離され、胴部外面はヘラケズリの後回転ナデ、内面は底部に多方向ナデ、胴部は回転ナデを施す。

3は第3層から出土した須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて約1/2が残存する。口径・底径はいずれも推定で11.6cm・4.0cm、器高は3.7cmを測る。ロクロ成形で、底部はヘラ切り・ヘラおこしによって切り離され、胴部外面はヘラケズリの後回転ナデ、内面は底部に多方向ナデ、胴部は回転ナデを施す。

4はT-14を拡張した際に出土したもので須恵器の坏蓋で、一部が欠損するものの全体の器形はうかがえる。口径は9.1cm、底径は4.3cm、器高は3.1cmを測る。ロクロ成形で、天頂部はヘラ切り・ヘラおこしによって切り離され、胴部外面は回転ナデを施す。

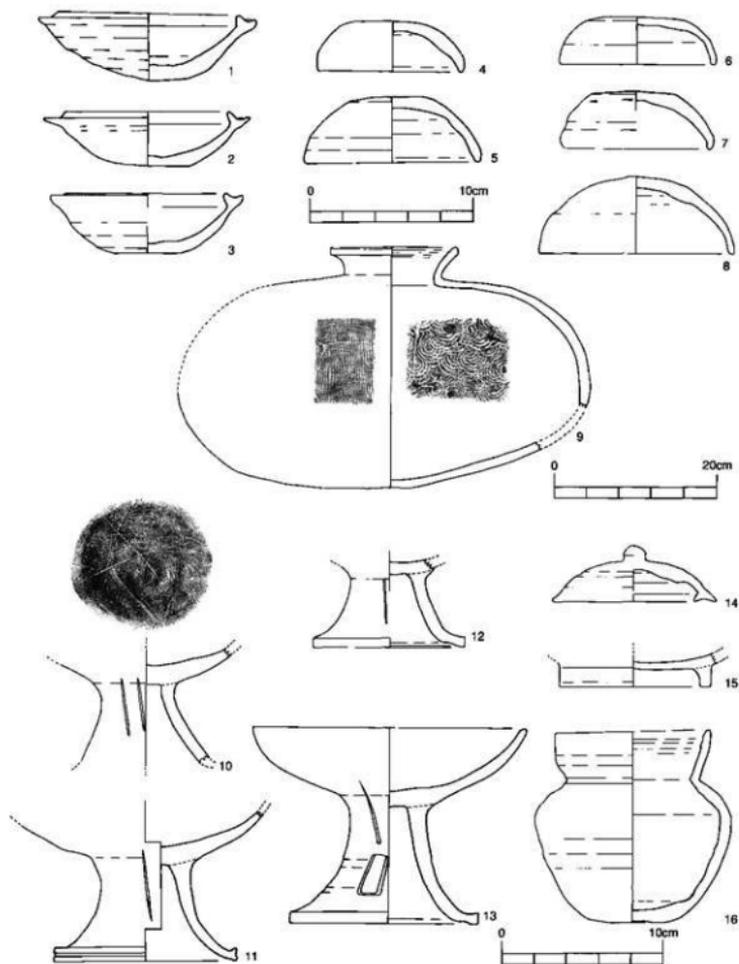
5はT-14を拡張した際に出土した須恵器の坏蓋片で、口縁部から底部にかけて約1/2が残存する。口径・天頂部径はいずれも推定で10.6cm・5.2cm、器高は4.1cmを測る。ロクロ成形で、天頂部はヘラ切り・ヘラおこしによって切り離され、天頂部付近から口縁部外面にかけてはヘラケズリの後回転ナデを、内面は底部に多方向ナデ、胴部は回転ナデを施す。

6は第3層から出土した須恵器の坏蓋片で、口縁部から底部にかけて約1/3が残存する。口径・天頂部径はいずれも推定で9.4cm・6.0cm、器高は3.0cmを測る。ロクロ成形だが、焼成が不良で非常に柔らかく、そのため全体的な摩擦が激しく器面調整が不明である。恐らく天頂部はヘラ切り・ヘラおこしによって切り離され、天頂部付近から口縁部外面にかけてはヘラケズリの後回転ナデを、内面は底部に多方向ナデ、胴部は回転ナデが施されていると思われる。

7はT-14を拡張した際に出土した須恵器の坏蓋で、一部が欠損するものの全体の形はうかがえる。口径は8.8cm、天頂部径は5.2cm、器高は4.6cmを測る。器形は口縁部がつまみ上げられ、わずかに内湾する。ロクロ成形で、天頂部はヘラ切り・ヘラおこしによって切り離され、天頂部付近はケズリの後再調整を行わず、口縁部外面はヘラケズリの後回転ナデを、内面は底部に多方向ナデ、胴部は回転ナ

アを施す。

8はT-14を拡張した際に出土した須恵器の坏蓋片で、口縁部から天頂部にかけて約1/4が残存する。口径・は推定で10.0cm、器高は4.8cmを測る。ロクロ成形で、天頂部はヘラ切り・ヘラおこしによって切り離され、胴部はヘラケズリの後回転ナデを、内面は底部に多方向ナデ、胴部は回転ナデを施す。



第67図 T-14及びその周辺の出土遺物実測図

覆土層から出土した須恵器の甃で、口縁部が欠損している。底径は8.0cm、残存高は12.5cm、最大幅は11.7cmを測る。底部はヘラ切りによって切り離され、底部付近はヘラケズリが、胴部は回転ナデを施す。胴部は一部では自然釉が付着している。

9は第3層から出土した須恵器の横瓶で、胴部が欠損しているものの全体の形は推測できる。口径は14.9cm、器高は推定で30.0cm、最大幅は50.3cmを測る。口縁部内外面は回転ナデを施し、胴部はタタキ成形である。

10は第3層から出土した須恵器の高坏片で、坏部の底部から継部にかけての破片である。残存高は7.1cmを測る。ロクロ成形で、坏部の内面は多方向ナデを、それ以外は内外面とも回転ナデを施す。坏部と継部の継ぎ目には指ナデのような痕跡が見られる。また底部の外面の底の部分に当て具跡のような痕跡も見られる。すかしは2方向の1段で、一方に2本、片方に1本切り込まれている。坏部にはヘラ記号“×”が見られる。

11はT-14を拡張した際に出土した須恵器の高坏片で、坏部から脚部の破片である。底径は11.2cm、残存高は8.9cmを測る。ロクロ成形で、内外面とも回転ナデを施す。すかしは2方向の1段で、1本切り込まれている。

12はT-14を拡張した際に出土した須恵器の高坏片で、坏部から脚部にかけての破片である。底径は9.2cm、残存高は5.5cmを測る。ロクロ成形で、内外面とも回転ナデを施している。すかしは1本づつの2方向の1段で、一方はすかしで、片方は切り込みである。

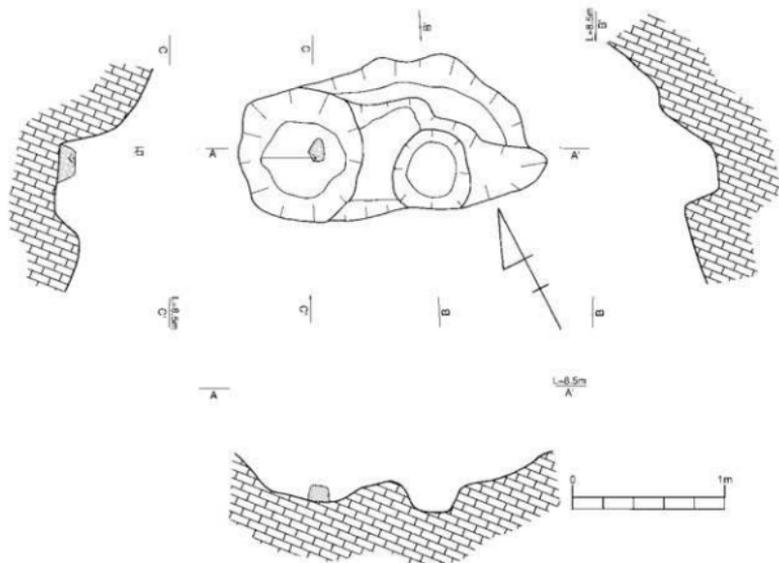
13は第3層から出土した須恵器の高坏で、約1/4が欠損しているが全体の器形はうかがえる。口径は16.8cm、底径は12.0cm、器高は12.2cmを測る。ロクロ成形で、外面は回転ナデ、坏部の底は多方向ナデを施している。すかしは2方向の2段で、上方は1本の切り込み、下方は長方形すかし(2.2cm×1.0cm)である。

14は第3層から出土した須恵器の坏蓋で、完形である。口径は10.0cm、器高は3.5cmを測る。ロクロ成形で、外面はヘラケズリの後回転ナデを施し、内面は天頂部に多方向ナデ、胴部に回転ナデを施す。つまみは擬宝珠形で、後づけされたものと思われる。

15はT-14を拡張した際に出土した須恵器の坏身片で、底部から胴部の一部が残存する。底径は9.2cm、残存高は2.1cmを測る。ロクロ成形で、底部内外面に多方向ナデを、胴部から高台部には回転ナデを施す。高台部は後付で、その際にナデを施す。

16はT-14を拡張した際に出土した須恵器の短径甃で、一部が欠損するものの全体の形はうかがえる。口径は9.5cm、底径は3.5cm、器高は12.0cmを測る。ロクロ成形で、底部はヘラ切り・ヘラおこしによって切り離され、底部付近はヘラケズリを、胴部には回転ナデを、内面は底部に多方向ナデ、胴部は回転ナデを施す。

やはりSI-01やT-14の遺物は技法や時期など斜面出土の遺物とは異なる。



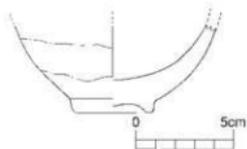
第68図 SK-01実測図

SK-01（第68図、図版）

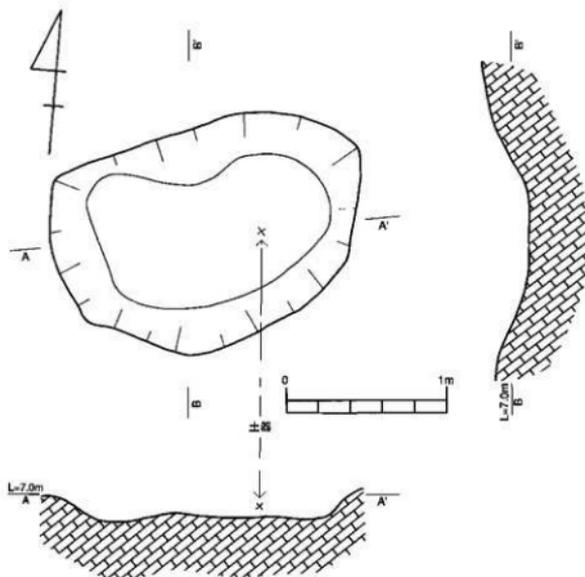
下平地面から検出された土窟で、2つの土塚がつながっているような形状である。平面形は不整楕円形で、規模は長径約200cm、短径約110cm、深さは最大で30cmを測る。覆土中から陶器が、床面からは18×10×8cmの石が出土した。この石は加工されたような痕跡は見られなかった。

第69図はSK-01から出土した陶器である。

覆土1層から出土した陶器の碗で、形態は碗形もしくは天目形である。底径は4.2cm、残存高は4.5cmを測る。内面と外面の胴部には鉄軸が施され、高台は蛇の目で削出高台である。形状から16世紀代の肥前系陶器碗と思われる。



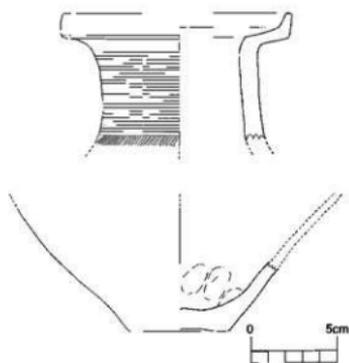
第69図 SK-01出土遺物実測図



第70図 SK-04実測図

SK-04 (第70図、図版)

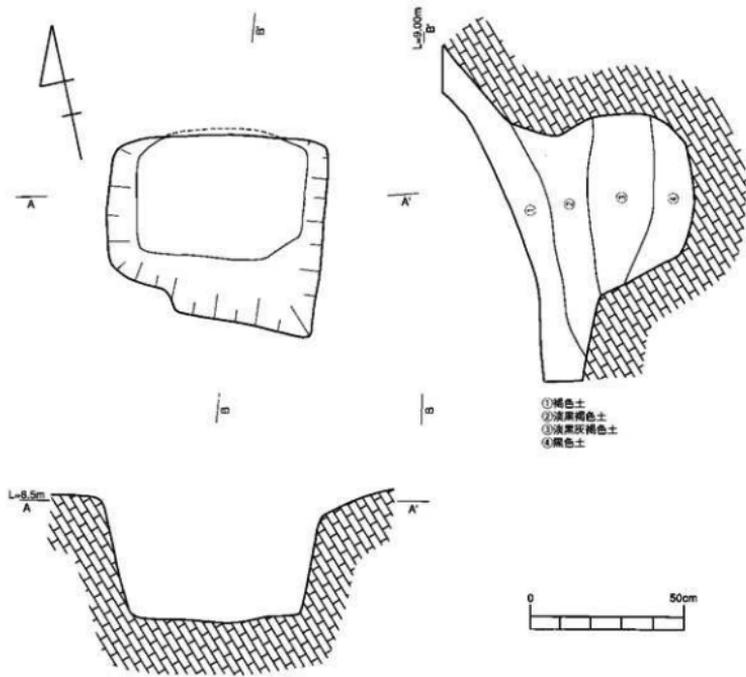
下平坦面の中央から検出された土層で、非常に浅い。平面形は不整楕円形で、規模は上端が長径約100cm、短径約70cm、規模は下端が長径約cm、短径約cm、深さは最大で20cmを測る。覆土は黒色土のみで人工的に加工されたような痕跡は見あたらない。恐らく自然の窪地に黒色土が入り込んだものと思われる。覆土中から弥生土器が出土した。



第71図 SK-04出土遺物実測図

第71図はSK-04から出土した遺物である。覆土層（黒色土）から出土した壺形の弥生土器で、口径は15.2cm、底径は5.9cmを測る。胴部は欠損しているため器高は不明である。外面は頸部の部分に横方向のハケ目を施し、胴部上には斜め方向のハケ目を施している。内面は底部付近に指頭圧痕が見られる。

弥生時代後期の初め頃のものと思われる。¹⁾



第70図 SK-06実測図

SK-06 (第72図、図版)

下平坦面の北側斜面との境で検出されたもので、SK-01の西側に位置する。平面形は方形、断面形は逆台形を呈し、規模は上端が南北72cm、東西64cm、下端が南北1cm、東西2cm、深さ50cmを測る。

北側の壁がややオーバーハングするような形で、覆土3層は粘土質の層が堆積している。遺構内からは遺物が出土しなかったため、時期や用途などの詳細については不明である。

第73図は西側斜面の中腹の土器溜 (SX-03) から出土した主な遺物である。SX-03は地滑りを起こしたと思われる層が見られ、そのために斜面上から流れ込んだ土器が入り込んだものと思われる。遺物の大半が摩滅した遺物が多いのが特徴である。

1は須恵器の坏蓋片で、口縁部から天頂部にかけて約1/2が残存する。口径・天頂部はいずれも推定で14.9cm・6.8cm、器高は3.0cmを測る。ロクロ成形で、外面は天頂部付近がケズリが、胴部は回転ナデ、内面は底部に多方向ナデ、胴部に回転ナデを施す。外面は黒色のタール状の自然釉が付着している。

2は須恵器の坏壺片で、天頂部から胴部にかけて約1/3が残存する。天頂部径は推定で6.0cm、残存高は3.3cmを測る。ロクロ成形で、外面は天頂部付近がケズリが、胴部は回転ナデ、内面は底部に多方向

向ナデ、胴部に回転ナデを施す。つまみは擬宝珠形で後付のものである。

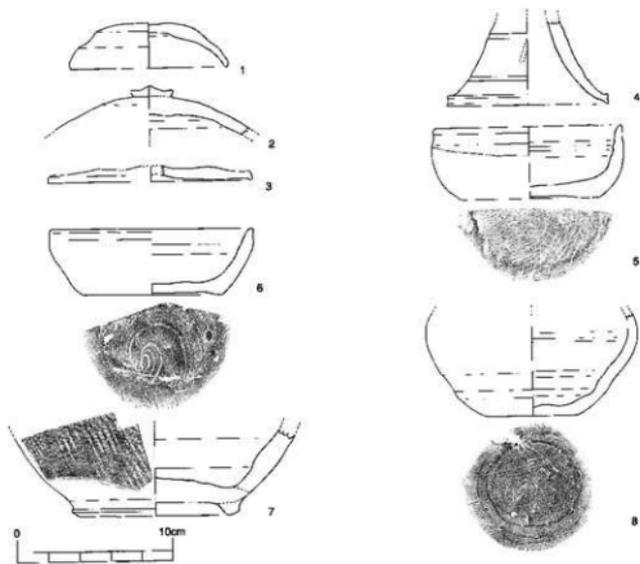
3は須恵器の坏蓋片で、口縁部から天頂部にかけて約1/3が残存する。口縁部径・天頂部径はいずれも推定で11.0cm・7.0cm、残存高は1.0cmを測る。ロクロ成形で、天頂部につまみが付くタイプと思われる。外面は回転ナデ、内面は天頂部に多方向ナデ、胴部に回転ナデを施す。

4は須恵器の高坏片で、脚部片である。底径は10.2cm、残存高は5.5cmを測る。ロクロ成形で、内外面とも回転ナデを施す。すかしは現存ではわからないが、恐らく2方向1段すかし、もしくは切り込みがあったと思われる。

5は須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて約1/2が残存する。口縁部径・底径はいずれも推定で12.0cm・8.8cm、器高は4.7cmを測る。器形は胴部がわずかに膨らみながら口縁部に向かって立ち上がり、わずかに外反する碗形である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部内面は多方向ナデ、胴部内外面は回転ナデを施す。焼成が不良で柔らかく、茶褐色を呈する。

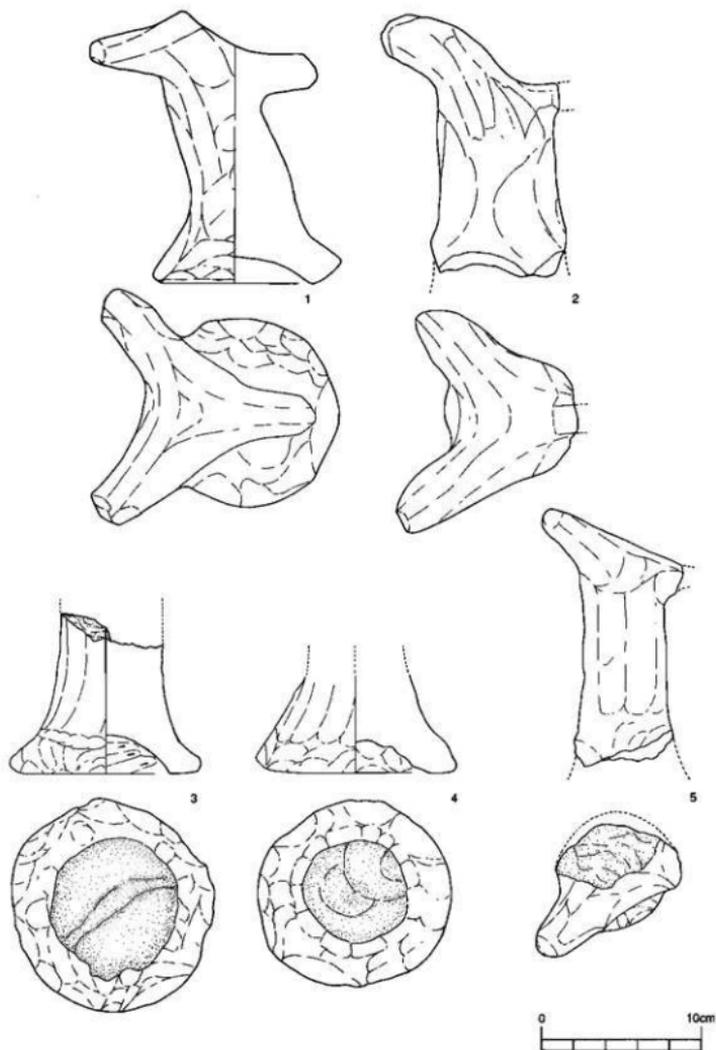
6は須恵器の坏身片で、口縁部から底部にかけて約1/2が残存する。口縁部径・底径はいずれも推定で13.5cm・9.0cm、器高は4.3cmを測る。器形は外にまっすぐに広がりながら立ち上がる碗形である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによって切り離され、底部内面は多方向ナデ、胴部内外面は回転ナデを施す。焼成が不良で柔らかく、褐色を呈する。

7は須恵器の坏身片で、底部から胴部にかけて約1/5が残存する。底径は推定で11.3cm、残存高は5.5cmを測る。器形は外に広がりながら口縁部に向かって立ち上がる碗形と思われる。当初は壺甕類とし



第73図 土器溜まり出土遺物実測図

て作られたのを、高台をつけて再利用したもので、胴部・底部の内外面にタタキ痕が見られ、高台付近は貼付の際の回転ナデが見られる。



第74図 土製支脚実測図

8は須恵器の壺で、口縁部が欠損している。底径は5.8cm、残存高は6.5cm、最大幅は13.6cmを測る。底部はヘラ切りによって切り離され、底部付近はヘラケズリが、胴部の内外面は回転ナデを施す。底部にはヘラ記号“×”が見られる。

第74図は本遺跡から出土した土製支脚である。

1はT-14の第3層から出土したもので、ほぼ完形である。器高は12.1cm、最大幅は14.0cm、底径は11.6cmを測る。外面はケズリを施し、底部は窪んでいる。

2はT-14の第3層から出土したもので、底部が欠損する。残存高は12.1cm、現存の最大幅は10.7cmを測る。外面はケズリを施す。

3はT-8の第3層から出土したもので、底部片である。残存高は10.0cm、現存の最大幅は11.8cm、底径は10cmを測る。外面はケズリを施し、底部は窪んでいる。

4はT-14の第3層から出土したもので、底部片である。残存高は6.2cm、現存の最大幅は12.4cm、底径は10.6cmを測る。外面はケズリを施し、底部は窪んでいる。

5はT-14の第3層から出土したもので、底部が欠損する。残存高は16.2cm、現存の最大幅は8.8cmを測る。外面はケズリを施す。

本遺跡の遺構は久米遺跡と同じく斜面を加工して平坦面を作り、その際に出た土砂を盛土として使い、平坦面を掘げたと考えられる。そのため地崩れなどによって盛土部分の遺構が消失もしくは部分的に消失してしまっただけでなく、住居址の正確な規模や性格など不明な点が多い。

遺構の立地を考えると、西側（東向き）・北側（南向き）斜面に遺構が集中し、南側（北向き）斜面には遺構が検出されなかったのは恐らく日当たりなどを考慮して選地したものと思われる。また谷部平坦面に住居址が少ないのは、地形的にすり鉢状地形の谷底部分にあたり、斜面から土砂や水がかなりの量で流れ落ちてきたと予想される。そのため遺跡が存在した時期もそのような状況であったと推測され、居住には適していなかったであろう。

住居址を見てみると、溝で区画されたタイプが多く、斜面での排水を意識していたのではないだろうか。また床面から遺物が出土した住居址を見ても時期的に奈良時代から平安時代初めに集中し、重複する住居址も少ないことから、一時期に集中して集落が営まれていた可能性がある。

検出された土壌のうち、SK-02・03・05は焼土壌であったが、SK-02・03は恐らく“こ炭焼き”の窯ではないだろうか。こ炭は自家消費用の炭とされ、このような炭窯跡は山間部では頻繁に見られ、その起源は古墳時代からと考えられる。しかも近年まで周辺地域でも行われていたらしい。特にSK-03はSB-01・04は同時の存在したのではなく、住居址の後に使用され、SB-01や04の遺物とともに埋没したと思われる。

SI-01やT-14から出土した大量の遺物は1間の住居で使用した遺物とか考えにくく、斜面の住居址や頂上部平坦面のある遺構から流れ落ちてきたとも考えられる。また遺物の廃棄場所として使用したかもしれず、出土遺物がそのまま時期を決定することはやや困難ではないだろうか。

SX-03に関しては人的な遺構ではなく、地崩れや地滑りによって陥没したところに斜面中腹の遺構にあったと思われる遺物が流れ落ちてきたと考えられる。

次に遺物を概観すると出土遺物は大きく2時期に分けられる。

(1) 谷部のSI-01やT-14から出土した遺物群である。

坏身は器形が受部をもち、立ち上がり部分が低い。調整方法はヘラケズリ・ヘラおこしが主流である。時期的には出雲5～6期頃と思われる。

坏蓋は2種類ある。一つはつまみを持たないものである。調整方法はヘラケズリ・ヘラおこしが主流である。もう一つはつまみとかえりを持つもので、調整方法はヘラケズリ・ヘラおこしの後ナデ調整で再調整されている。これも出雲5～6期頃と思われる。

高坏はすかしや切り込みを持つもので、これも出雲5～6期頃と思われる。

以上のことから本遺跡は遺構で確認はできないものの、6世紀初め～6世紀中頃には何らかの遺構が存在していた可能性が高い。

(2) 斜面から出土した遺物である。

坏身は高台付や底部回転糸切りが見られるものである。調整方法は回転ナデが主流であり、高台はその後に貼り付けられナデ調整を加えている。これは柳浦編年の3～4期頃のものと思われる。

坏蓋は欠損しているものもあるが、大半が擬宝珠形のつまみがつき、かえしがないタイプと思われる。調整方法はヘラケズリの後、一部再調整しないものや回転ナデといった再調整を加えるものが見られる。これも柳浦編年の3～4期頃のものと思われる。

時期的には柳浦編年の3～4期（8世紀中頃～9世紀後半）頃のものと思われる。斜面の住居址の大半がこの時期に当たるとと思われる。

本遺跡は先の久米遺跡・久米A遺跡と同じく遺跡の立地条件や時期的なことなど共通点が多い。まず斜面に遺構と形成していることや、遺構の遺存状態が悪いことが上げられる。また遺物は奈良時代から平安時代初め頃のものも多く出土している。

異なる点は本遺跡では出土遺物はSK-04出土の弥生土器やSK-01出土の陶器が出土した。そのことから弥生時代後期から16世紀までの幅広い遺物が出土した。また古墳時代の後期の遺物が谷底の平坦面から大量に出土している。しかし弥生時代から16世紀まで連続と遺跡が続いていたとは考えにくく、しかも遺物がそれぞれ1点づつしか出土していないため弥生時代と近世初頭に関してはあまり参考にはならないと思われる。

以上のことから本遺跡は古墳時代後期に何らかの遺構が存在した可能性が考えられるが、奈良時代から平安時代初めにかけての集落ではないかと思われる。

註

- 1) 鳥根県埋蔵文化財調査センター松本岩雄氏の御教示による

小 結

まず本遺跡群を概観すると例外（B遺跡の谷部、SI-01）を除いて、共通点が多い。

- (1) 住居址はすべて斜面を加工して掘立柱建物を築いている。
- (2) 斜面を削って平坦面をつくった際に出た土砂を盛土をして平坦面を拡張されたと思われる。しかしその盛土部分が流失してしまっているため住居址の遺存状態が悪い。
- (3) 出土した遺物は時期的に奈良時代から平安時代初めのものが多い。
- (4) カマドや甕などの生活用品と思われる土師器が多く出土している。

上記のように各遺跡とも共通点が多い。本遺跡群の大きな特徴として三方を丘陵に囲まれた谷に向かって集落が点在している点である。恐らく斜面に住居址を築いて各集落とし、生産基盤となる田畑は谷部に作っていたのではないだろうか。しかしながら谷部に関しては調査が行われなかったため断言はできないが、大規模な集落であった可能性が考えられる。

集落を考える上で居住地域だけではなく、その生活基盤である生産基盤を含めた地域を考えなければならず、本遺跡群の場合はその双方が兼ね備わっている。その他の丘陵部分は試掘調査の結果、遺構は確認されていないが、調査が行われた地点と同じように地滑りや地崩れによって消失してしまったかもしれない。また谷部も今回は調査はできなかったが、そういう観点で見ればこの時期の集落の様相が伺い知ることができるのではないだろうか。

本遺跡群は以上のようなことから奈良時代から平安時代初めにかけて営まれ、各遺跡が何らかの有機的な関連を持った大集落と思われる。

いずれにしても現在のところ松江市の橋北地域では奈良時代～平安時代の大規模な集落は調査されていない。しかし本遺跡群の北側で塚山古墳や田中谷遺跡の調査が進められている。そこから同時期の遺物が出土していることから、今後の調査報告を待って検討していきたい。

品名	品名	規格	寸法	重量	色	形状	備考	備考	備考
SB-02	土製土	土製土	口径 9cm 残存高 1.5cm 残存径 10.2cm (備)	1.00g前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: 同色砂り 側面: 同色砂り (内) 底面: 多方向ナブ 側面: 同色砂り		51-4
SU-02	土製土	土製土	口径 30.6cm (備) 残存高 8.7cm	2.00前後の 白内砂粒を 含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ (内) 底面: ナブ		51-5
NK-03	土製土	土製土	口径 7cm 残存高 3.0cm 残存径 8.4cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	灰色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ	遺失として作られたが、遺失として再採用されたと思われる	54-1
SK-01	土製土	土製土	口径 8.0cm (備) 残存高 1.0cm	2.00前後の 白色砂粒を 含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ (内) 底面: ナブ		54-2
SU-06	土製土	土製土	口径 11.7cm (備) 残存高 3.9cm 残存径 8.4cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: 同色砂り 側面: 同色砂り (内) 底面: 同色砂り 側面: 同色砂り	口縁部は再収する	56-1
NR-06	土製土	土製土	口径 7cm 残存高 1.7cm 残存径 9.0cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: 同色砂り 側面: 同色砂り (内) 底面: 多方向ナブ 側面: 同色砂り		56-2
SU-06	土製土	土製土	口径 7cm 残存高 2.0cm 残存径 12.2cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: 同色砂り 側面: 同色砂り (内) 底面: 多方向ナブ 側面: 同色砂り		56-3
NR-06	土製土	土製土	口径 7cm (備) 残存高 1.8cm 残存径 15.5cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ (内) 底面: ナブ		56-4
SB-06	土製土	土製土	口径 7cm (備) 残存高 1.8cm 残存径 15.5cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ (内) 底面: ナブ		56-4
SB-06	土製土	土製土	口径 7cm (備) 残存高 1.8cm 残存径 15.5cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ (内) 底面: ナブ		56-4
SB-06	土製土	土製土	口径 7cm (備) 残存高 1.8cm 残存径 15.5cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ (内) 底面: ナブ		56-4
SK-02	土製土	土製土	口径 15.6cm 残存高 8.0cm	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: 同色砂り 側面: 同色砂り (内) 底面: 多方向ナブ 側面: 同色砂り	口縁部は再収する	59-1
自然流産	黒色土中	自然流産	口径 6.7cm 残存高 3.7cm	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: 同色砂り 側面: 同色砂り (内) 底面: 同色砂り 側面: 同色砂り	自然流産が内側の一部に存在	64-1
自然流産	黒色土中	自然流産	口径 10.2cm (備) 残存高 3.2cm	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: 同色砂り 側面: 同色砂り (内) 底面: 同色砂り 側面: 同色砂り		65-2
自然流産	黒色土中	自然流産	口径 11.0cm (備) 残存高 3.3cm 残存径 3.0cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: 多方向ナブ 側面: ナブ	口縁部は再収する	66-3
自然流産	黒色土中	自然流産	口径 13.2cm (備) 残存高 7.0cm 残存径 14.7cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-4
SI-01	土製土	土製土	口径 14.7cm (備) 残存高 6.0cm	2.00前後の 白色砂粒を 含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-1
SI-01	土製土	土製土	口径 9.1cm 残存高 4.8cm	2.00前後の 白色砂粒を 含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-2
SI-01	土製土	土製土	口径 8.4cm 残存高 3.7cm 残存径 9.9cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-3
SI-01	土製土	土製土	口径 12.0cm (備) 残存高 3.1cm 残存径 6.9cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-4
SI-01	土製土	土製土	口径 12.4cm 残存高 3.4cm 残存径 5.0cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-5
SI-01	土製土	土製土	口径 7cm 残存高 8.4cm 残存径 9.7cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-6
SI-01	土製土	土製土	口径 16.3cm 残存高 9.7cm 残存径 10.2cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-7
SI-01	土製土	土製土	口径 8cm 残存高 12.7cm 残存径 8.0cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-8
SI-01	土製土	土製土	口径 7cm (備) 残存高 12.6cm 残存径 6.0cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-9
SI-01	土製土	土製土	口径 26.0cm (備) 残存高 26.2cm 残存径 30.6cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-10
SI-01	土製土	土製土	口径 16.8cm 残存高 25.9cm 残存径 25.0cm (備)	2.00前後の 白色砂粒を 含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-11
SI-01	土製土	土製土	口径 23.6cm 残存高 16.7cm 残存径 25.0cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-12
SI-01	土製土	土製土	口径 20.7cm (備) 残存高 32.3cm 残存径 44.0cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		66-13
SI-01	土製土	土製土	口径 19.9cm 残存高 4.4cm 残存径 15.0cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		67-1
SI-01	土製土	土製土	口径 12.6cm 残存高 3.6cm 残存径 8.5cm (備)	1.00前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	褐色	(外) 底面: ナブ 側面: ナブ (内) 底面: ナブ 側面: ナブ		67-2

图

版

図版 1 久米遺跡



調査前全景
西側



調査前全景
北側



調査前全景
東側



SB-01 (右)
完掘状況

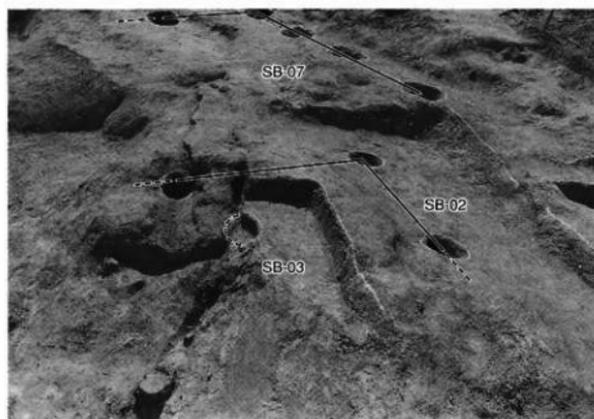


SB-02 (中央)
完掘状況



SK-01 (焼土境)
完掘状況

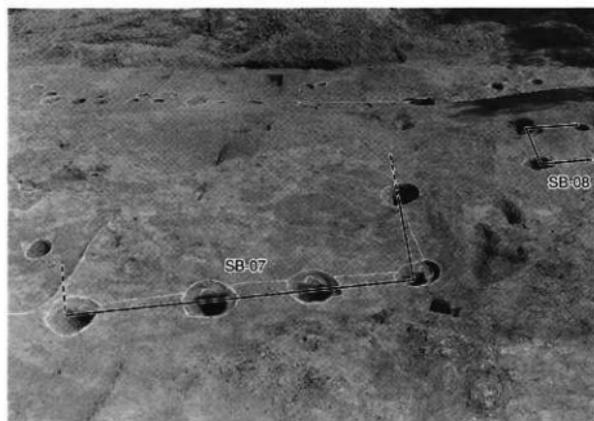
図版3 久米遺跡



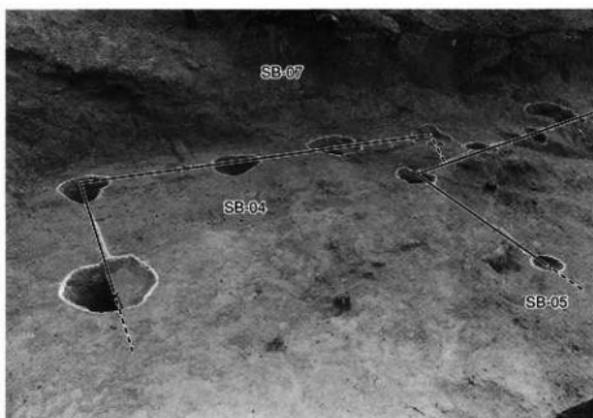
SB-03 (中央)
完掘状況



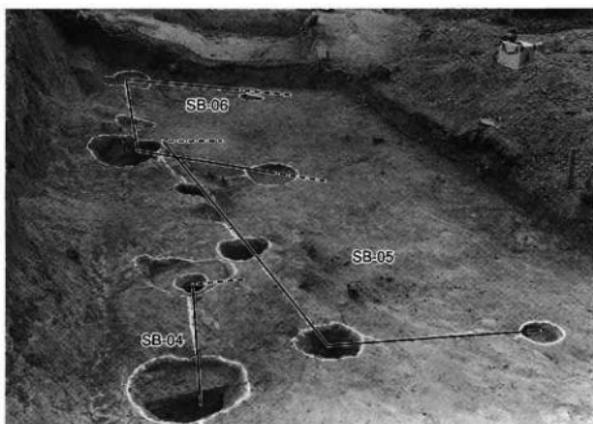
SB-08
完掘状況



SB-07 (左)
完掘状況



SB-04 (左)
完掘状況



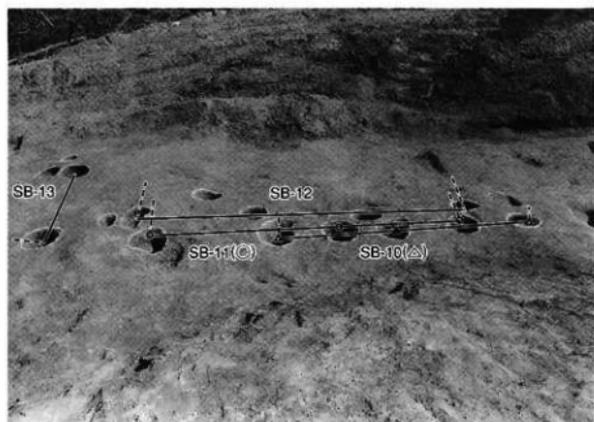
SB-05 (中央)
完掘状況



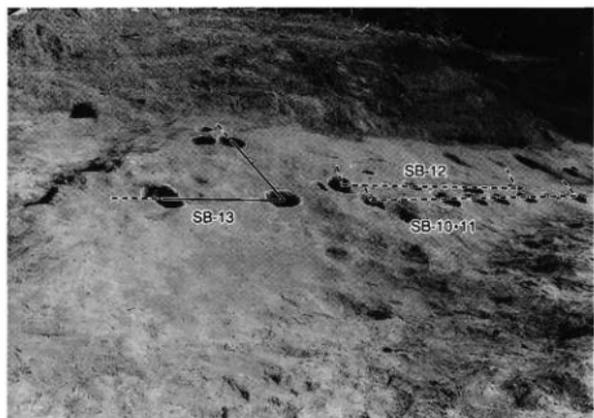
土器
遺物出土状況



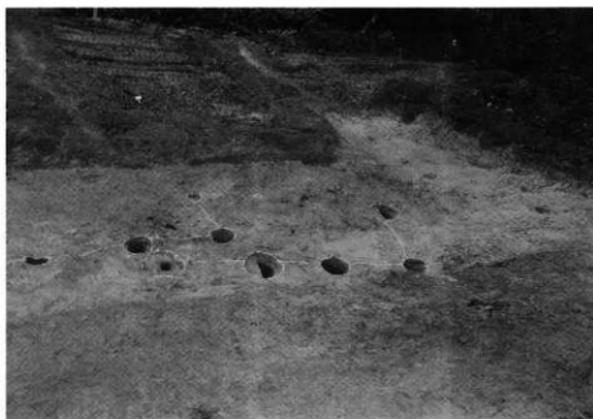
SB-09
完掘状況



SB-10~12
完掘状況



SB-13 (左)
完掘状況



完掘状況
(下段部分)



完掘状況
(上段部分)



調査後全景

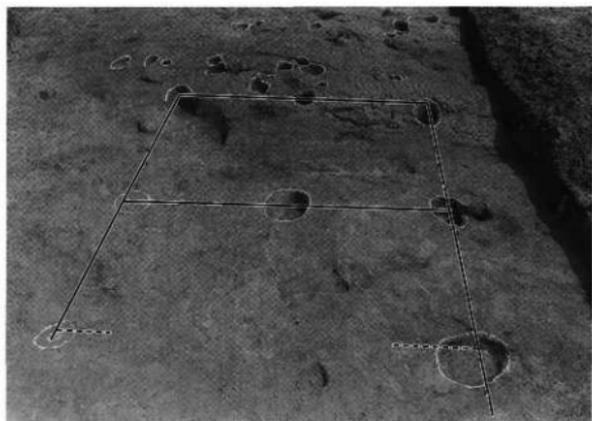
図版7 久米A遺跡



調査前全景



SB-01 (上)
完掘状況



SB-02
完掘状況



調査前全景
(東側から)



調査前全景
(西側から)



調査前全景
(南東側から)



SB-01
完掘状況



SB-01
遺物出土状況



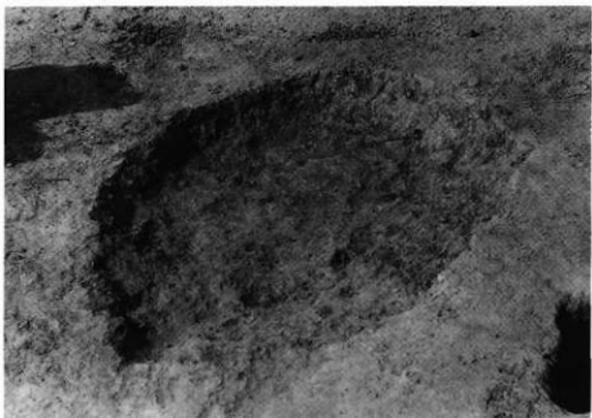
SK-03 (焼土窯)
完掘状況



SB-07
遺物出土状況



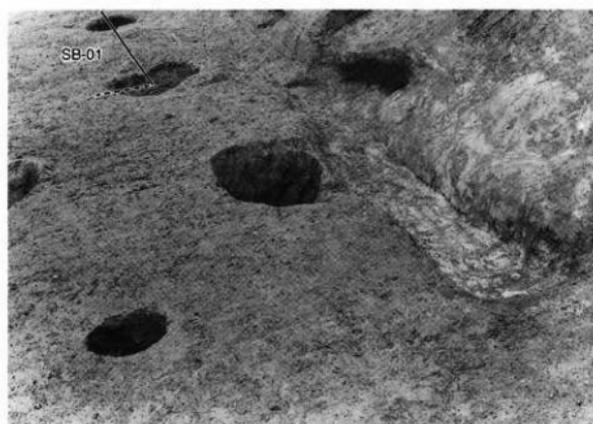
SB-07
完掘状況



SK-05 (掘土場)
完掘状況



SB-02
完掘状況



SB-04
完掘状況



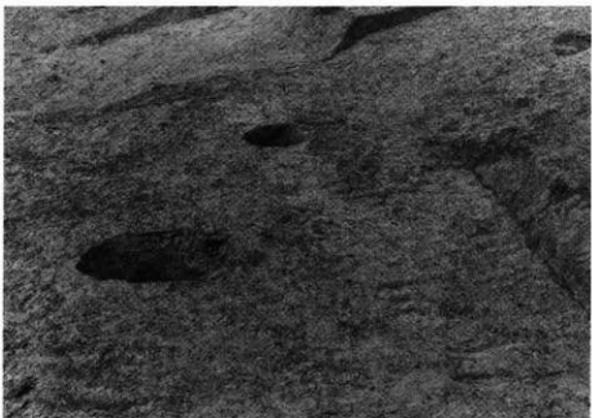
SB-08
完掘状況



SB-09
完掘状況



SB-10
完掘状況



SB-11
完掘状況



SB-06
完掘状況



SK-02 (焼土壇)
完掘状況



SX-01 (加工段)
完掘状況



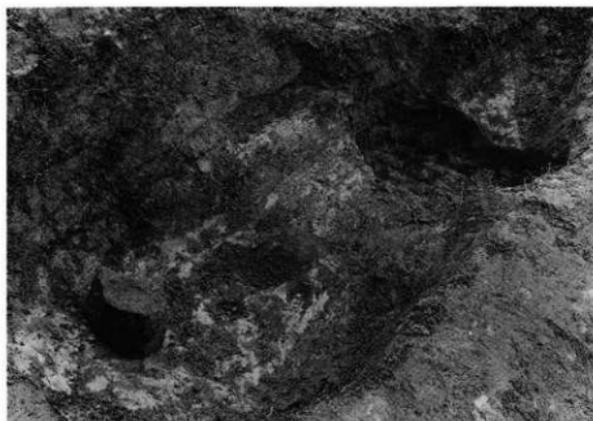
SX-02 (加工段)
遺物出土状況



SX-02 (加工段)
完掘状況



SB-05
完掘状況



SK-01
完掘状況



SK-04
遺物出土状況



SK-06
完掘状況



SI-01
遺物出土状況 (1)



SI-01
遺物出土状況 (2)



SI-01
完掘状況



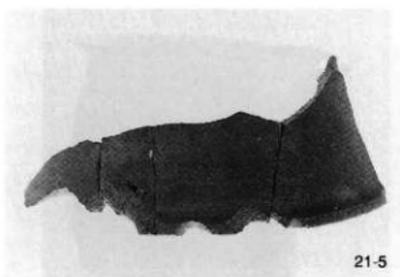
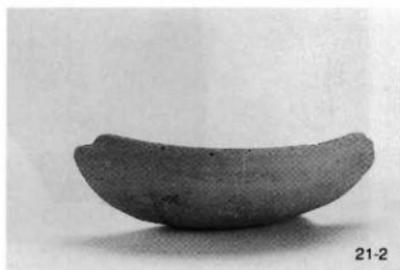
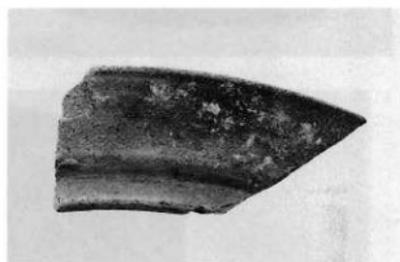
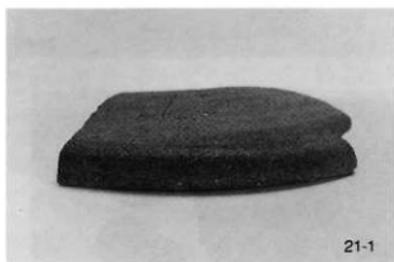
西側斜面
完掘状況 (遠景)



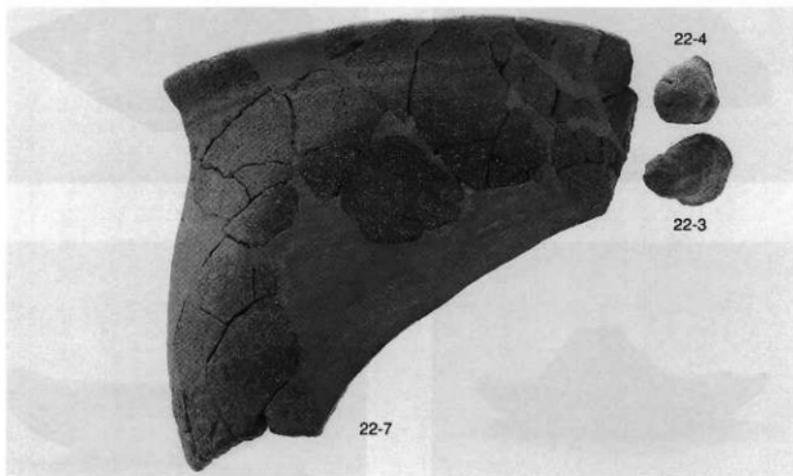
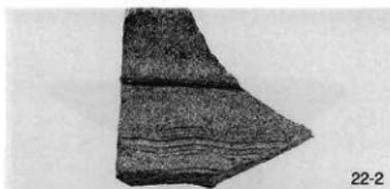
西側斜面
完掘状況 (近景)
(奥から SB-01~04・
07~11)



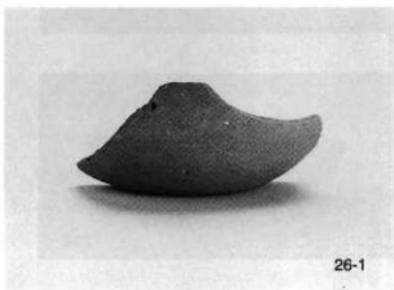
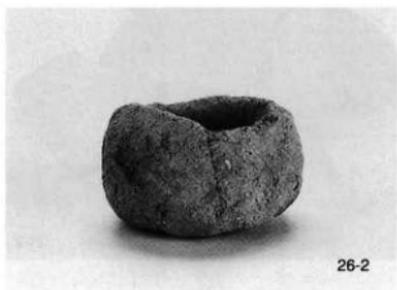
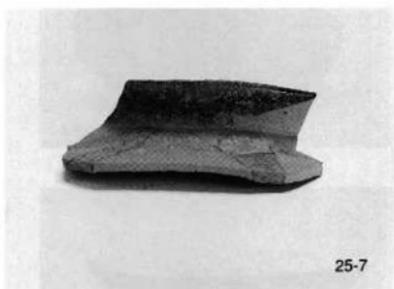
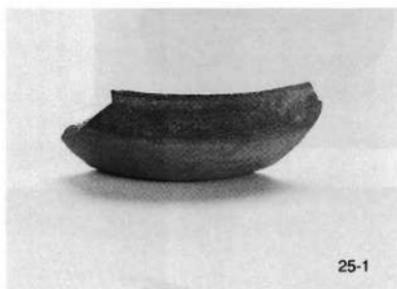
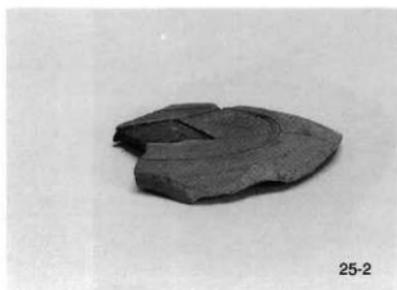
西側斜面
完掘状況 (近景)
(奥から SB-01・04・08)

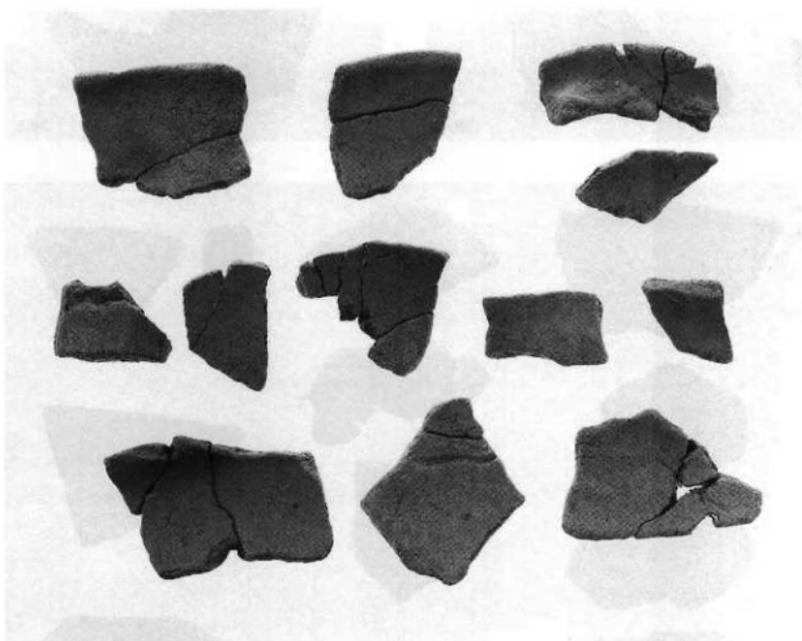


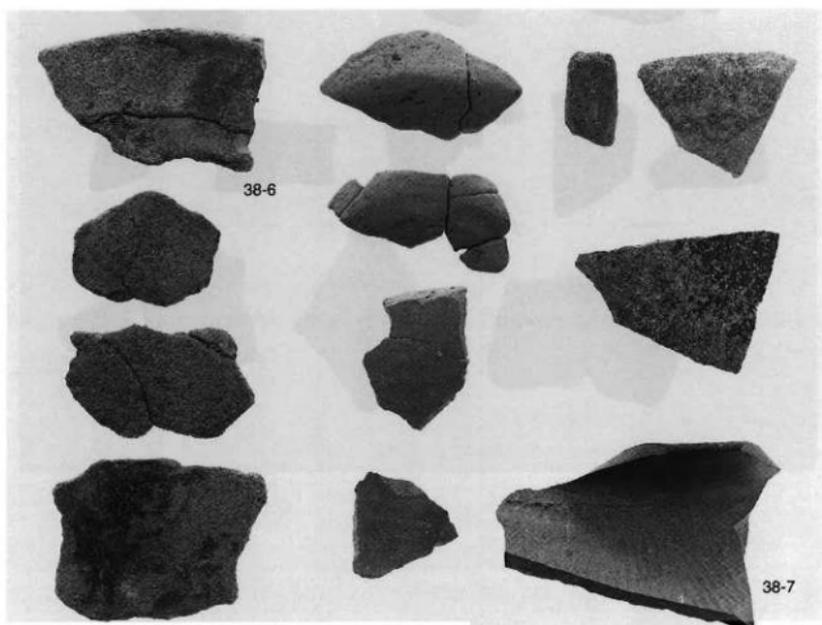
図版19 久米遺跡 (B 調査区、土器溜)









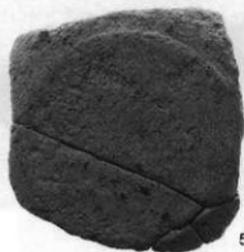




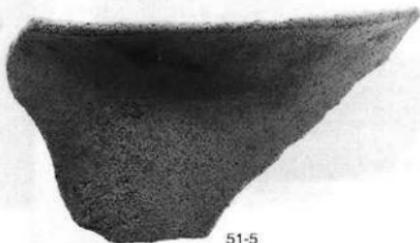
51-4



51-2



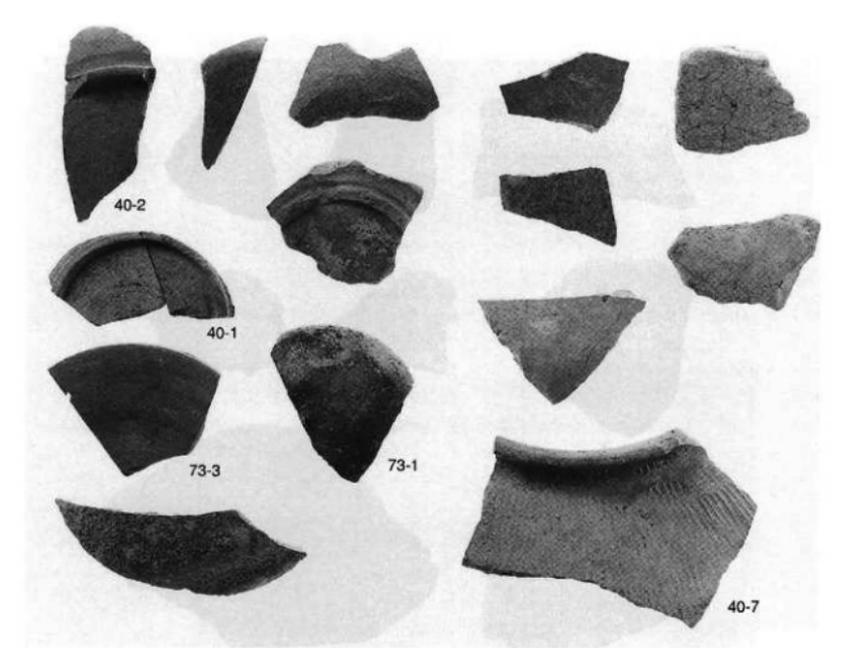
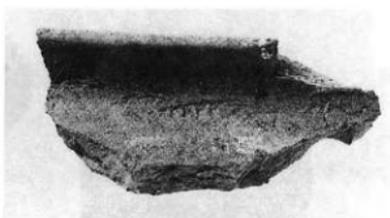
51-3

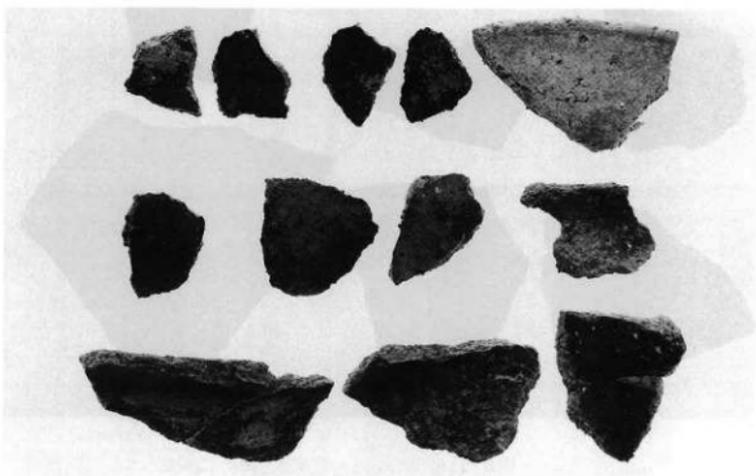
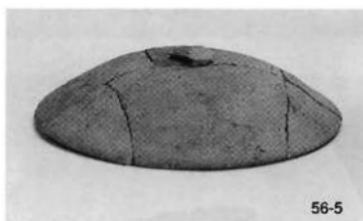
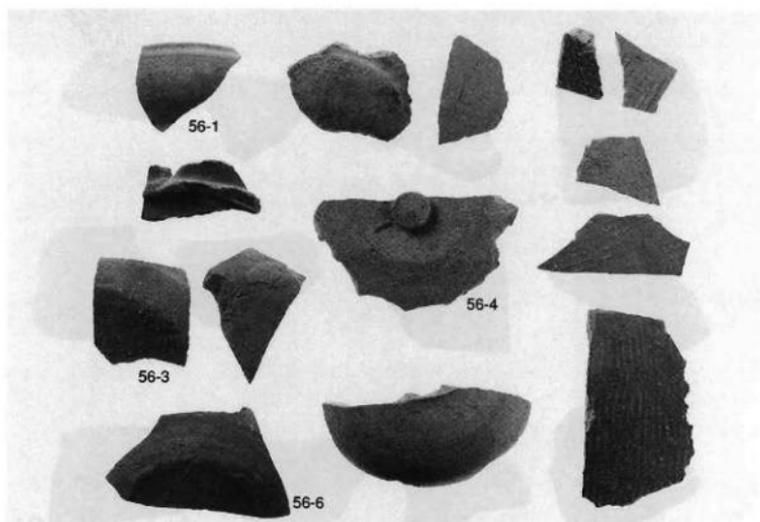


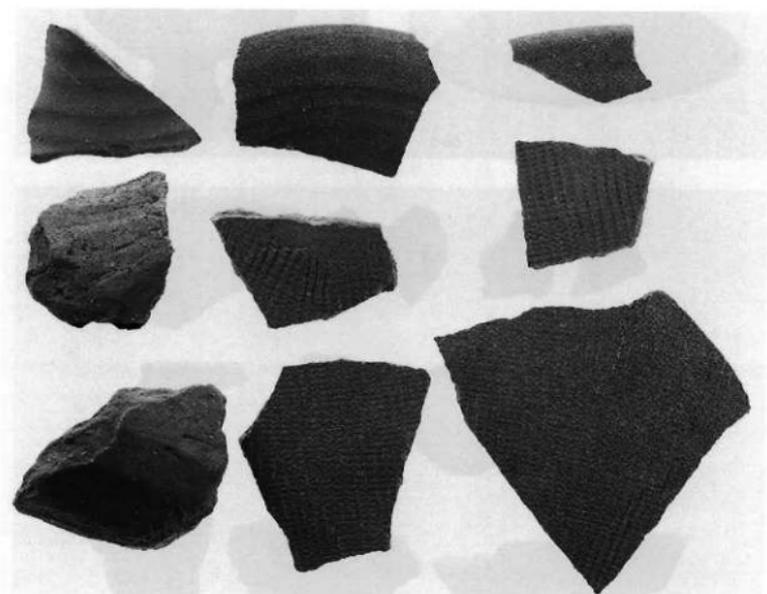
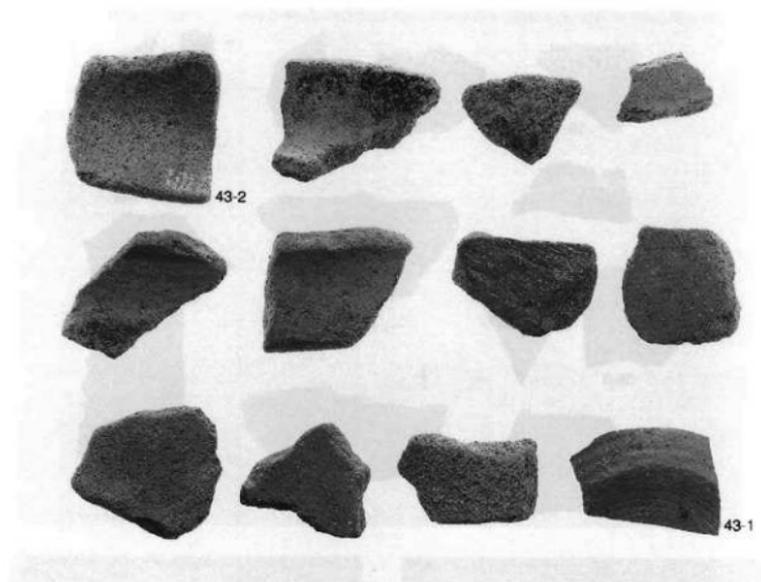
51-5

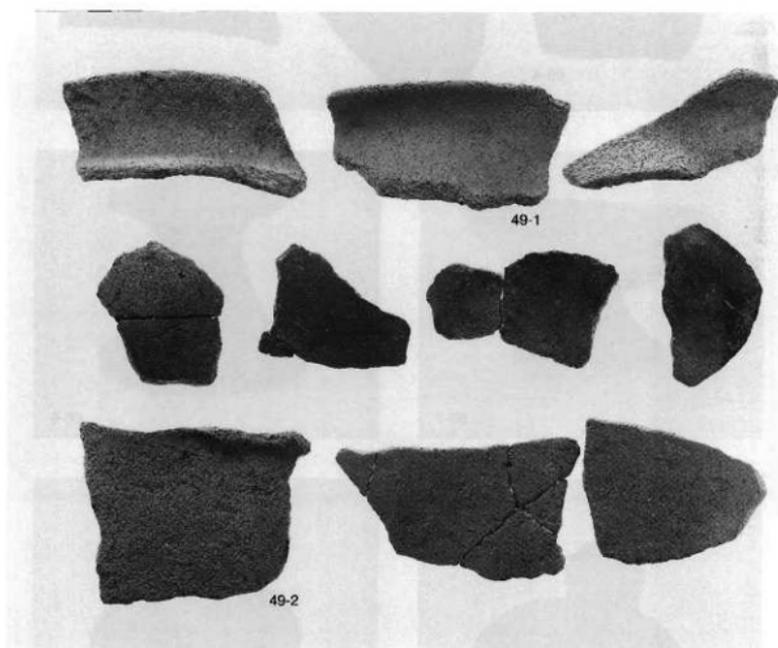


図版25 久米B遺跡 (SB-04、SB-01・04周辺)

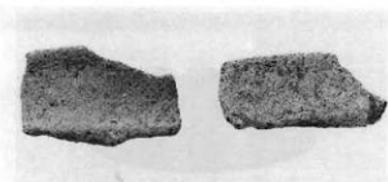




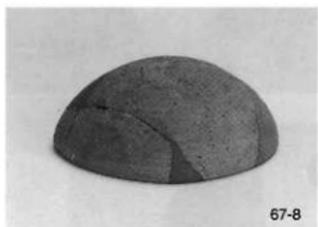
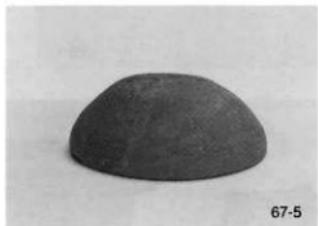












図版33 久米B遺跡 (SK-01、SK-03、SK-04)



69-1

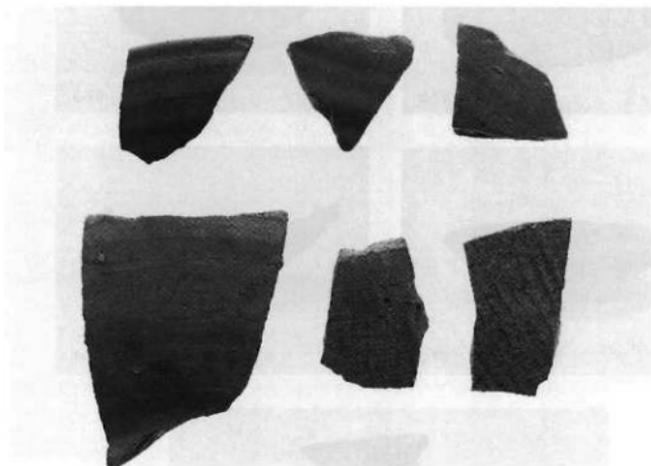


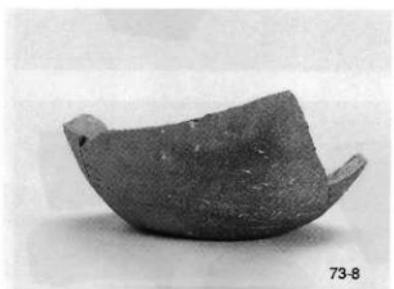
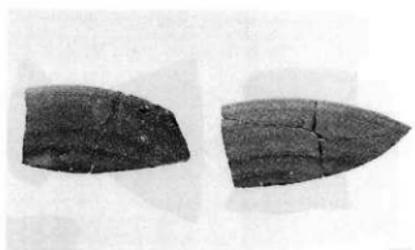
54-1

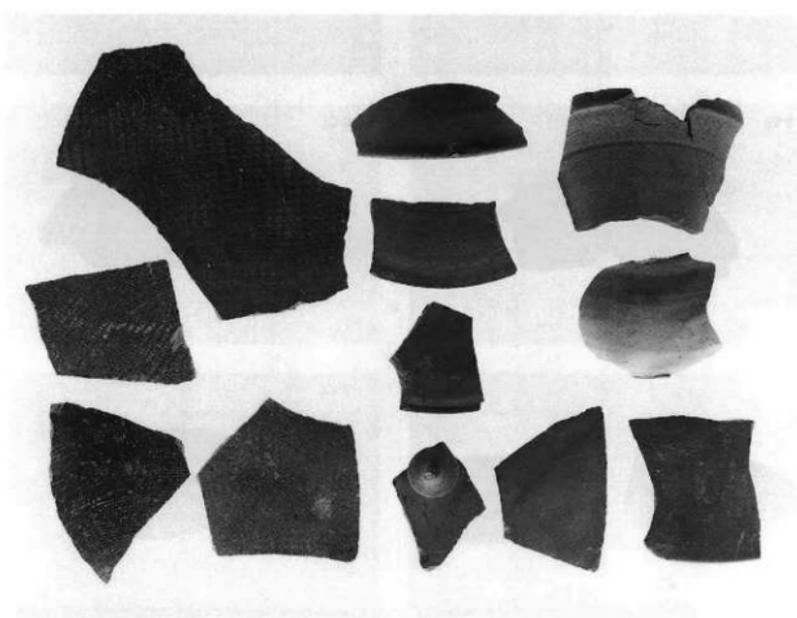
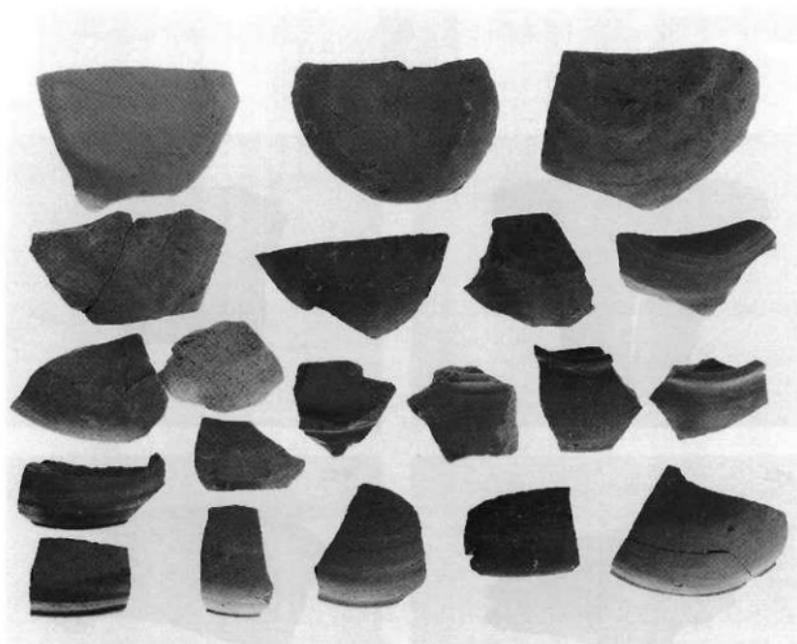


71-2

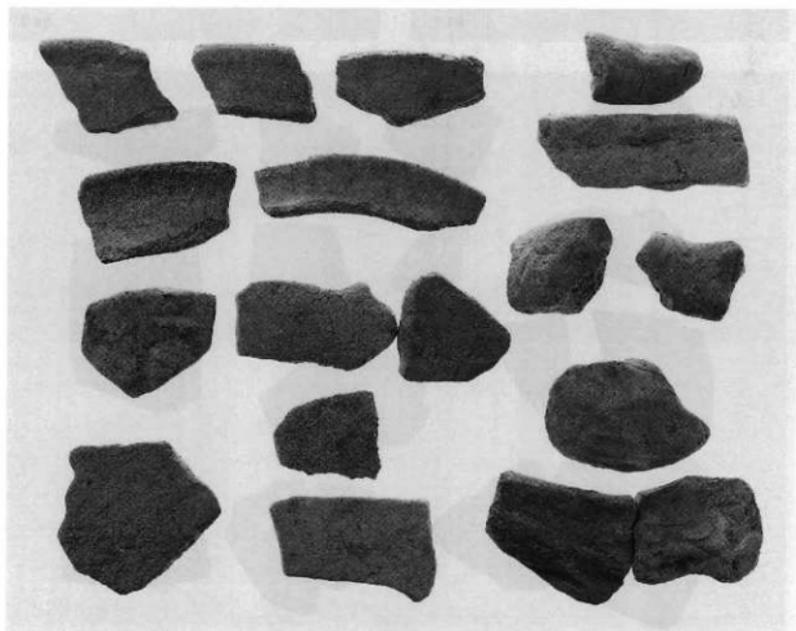
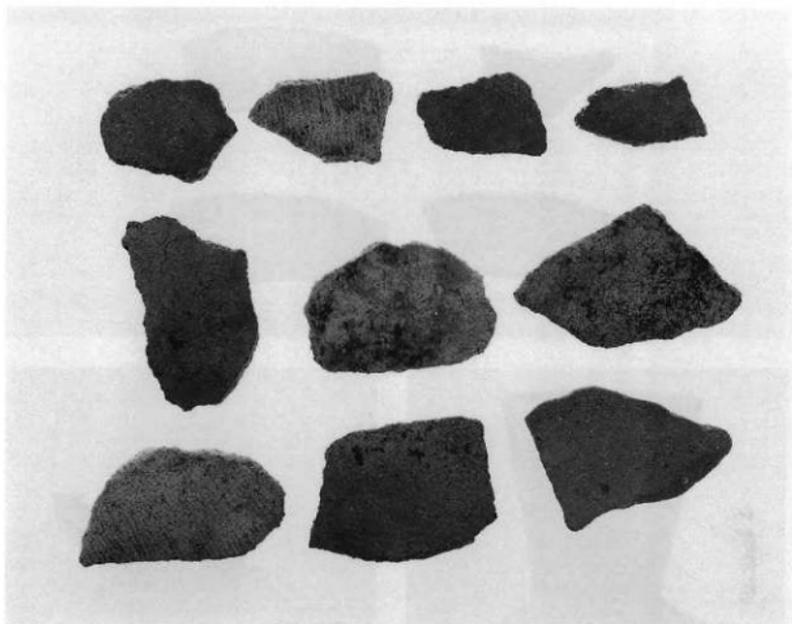
71-1







図版35 久米B遺跡(土器層)(2)



図版37 久米B 遺跡（自然流路）

